

津山市内遺跡調査報告書

平成 30 年度～令和 2 年度

2022

津山市



桑山南 4号墳出土 皮袋形瓶（正面）



桑山南4号墳出土 皮袋形瓶（背面）

序

津山市は、岡山県北部に位置し、平成の合併で市域が拡大したことにより、保存や活用すべき文化財の数も大きく増えております。

これら文化財の保存と活用、及び継承をはかっていく事が、本市の重要な役割となっております。

さて、本書は国庫補助事業（市内遺跡発掘調査事業）で平成30年度から令和2年度に実施した、各種開発事業に伴う埋蔵文化財の試掘・確認調査、指定文化財である古墳の測量調査などの成果をまとめたものであります。

今回の調査成果により新たな資料が蓄積され、今後の地域史研究の一助になれば幸いります。

最後になりましたが、調査から報告書作成に至るまで、ご協力いただきました地権者の皆様をはじめとする関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

令和4年3月31日

津山市長 谷 口 圭 三

例　　言

- 1 本書は、平成30年から令和2年度に実施した、津山市内遺跡発掘調査等事業報告書である。
- 1 本書掲載の調査事業は、全て国庫補助事業（市内遺跡発掘調査等事業）として津山市文化課が実施した。調査は、津山市文化課職員が担当した。
- 1 本書の執筆は、津山市産業文化部文化課職員が行い、文末に文責を記した。編集は宮崎絢子が行った。
- 1 発掘調査は、津山市文化課職員が担当した。また、出土遺物の整理作業は津山弥生の里文化財センター嘱託職員により行った。
- 1 発掘調査に使用した座標は第V直角平面座標系で、方位は座標北を示し、高さは海拔高である。
- 1 遺構実測図の土層注記の表示に用いた色調の一部は、農林水産技術会議事務局監修　財団法人日本色彩研究所色票監修『新版　標準土色帖』（2004年度版）に準拠している。
- 1 出土遺物、図面類及び工事関係図面類は津山弥生の里文化財センターで収蔵・保管している。
- 1 本書のデータはP D F形式で保管している。

目 次

第1章 調査事業の概要と調査体制	1
第1節 調査事業の概要	1
第2節 調査体制	2
第2章 試掘・確認調査の概要	5
第1節 平成30年度試掘・確認調査	5
1. 美作国府跡（総社川崎線）確認調査	5
2. 勅使遺跡確認調査	7
3. 津山城跡（鶴山館西側トイレ付近）確認調査	10
4. 津山城跡（文化センター）確認調査	12
5. 東一宮天王遺跡（東一宮 1117-1 他）確認調査	15
6. 美作国分寺跡確認調査	17
7. 美作国府跡確認調査	24
8. 水原遺跡確認調査	25
9. 東一宮天王遺跡（東一宮 1110-1）確認調査	28
第2節 令和元年度試掘・確認調査	32
1. 市指定史跡苅田家住宅及び酒造場確認調査	32
2. 沼京免遺跡（沼9-7 他）確認調査	36
3. 沼京免遺跡確（沼10-13）認調査	37
4. 院庄館跡確認調査	40
5. 沼京免遺跡（沼9-3 他）確認調査	44
第3節 桑山南4号墳発掘調査	48
1. 調査の経緯と経過	48
2. 古墳群の概要	49
3. 墳丘と周溝	49
4. 石室と出土遺物の状況	51
5. 出土遺物	54
6.まとめ	62
第4節 令和2年度試掘・確認調査	77
1. 慈恩寺古墳群確認調査	77
2. 美作国府跡（総社川崎線）確認調査	81
第3章 測量調査の概要	86
第1節 平成30年度測量調査	86
1. 県指定史跡津山藩主松平家菩提所泰安寺石塔測量調査	86
第2節 令和元年度・2年度測量調査	90
1. 高野山根1号墳・2号墳・3号墳測量調査	90
第4章 保存処理の概要	96
平成30年度・令和元年度保存処理業務	96
令和2年度保存処理業務	98

挿図目次

第1章第1節	
第1図 津山市位置図	1
第2章第1節1	
第1図 調査位置図	5
第2図 トレンチ平面・断面図	5
第2章第1節2	
第1図 調査位置図	7
第2図 調査トレンチ配置図	8
第3図 トレンチ平面・断面図	8
第2章第1節3	
第1図 調査位置図	10
第2図 トレンチ配置図	11
第2章第1節4	
第1図 調査位置図	12
第2図 トレンチ配置図	13
第3図 トレンチ1平面・断面図	13
第4図 トレンチ2平面・断面図	14
第2章第1節5	
第1図 調査位置図	15
第2図 トレンチ1平面・断面図	15
第3図 トレンチ2平面・断面図	16
第2章第1節6	
第1図 調査位置図	17
第2図 トレンチ配置図	18
第3図 トレンチ1平面・断面図	19
第4図 トレンチ2平面・断面図	19
第5図 出土遺物（1）	20
第6図 出土遺物（2）	21
第2章第1節7	
第1図 調査位置図	24
第2章第1節8	
第1図 調査位置図	25
第2図 トレンチ平面・断面図	26
第2章第1節9	
第1図 調査位置図	28
第2図 トレンチ配置図	29
第3図 トレンチ2平面・断面図	30
第4図 トレンチ3平面・断面図	30
第2章第2節1	
第1図 調査位置図	32
第2図 市指定史跡茹田家住宅及び酒造場における石列位置図	32
第3図 出土遺物図	33
第4図 石列	34
第2章第2節2	
第1図 調査位置図	36

第2章第2節3	
第1図 調査位置図	37
第2図 沼9－7 9－9 10－13地点確認調査トレンチ配置図	38
第3図 トレンチ1平面・断面図	39
第4図 沼10－13トレンチ平面・断面図	39
第5図 出土遺物	39
第2章第2節4	
第1図 調査位置図	40
第2図 トレンチ配置図	40
第3図 トレンチ平面・断面図	42
第4図 出土遺物	42
第2章第2節5	
第1図 調査位置図	44
第2図 トレンチ配置図	44
第3図 トレンチ平面・断面図	46
第4図 出土遺物	46
第2章第3節1	
第1図 調査位置図	49
第2図 桑山古墳群位置図	49
第2章第3節3	
第3図 墳丘及び南北トレンチ断面図	51
第2章第3節4	
第4図 石室平面・断面図	53
第5図 石室内遺物出土状況図	54
第2章第3節5	
第6図 出土遺物（1）	55
第7図 出土遺物（2）	56
第8図 出土遺物（3）	57
第9図 出土遺物（4）	57
第10図 出土遺物（5）	58
第11図 出土遺物（6）	59
第12図 出土遺物（7）	60
第13図 出土遺物（8）	61
第14図 出土遺物（9）	61
第2章第4節1	
第1図 調査位置図	77
第2図 トレンチ配置図	78
第3図 トレンチ断面図	79
第2章第4節2	
第1図 調査位置図	81
第2図 トレンチ配置図	81
第3図 トレンチ平面図・断面図	82
第3章第1節1	
第1図 調査位置図	86
第2図 泰安寺 配置図	87
第3図 墓塔現況測量図（平面図・オルゾ・立面図）	88
第2図 墓塔現況測量図（立面図・オルゾ）	89
第3章第2節1	
第1図 調査位置図	90

第2図 高野山根1号墳平面図・断面図	92
第2図 高野山根2号墳・3号墳平面図・断面図	93
第4章	
第1図 中宮1号墳出土鉄刀	96

写真目次

巻頭図版1 桑山南4号墳出土 皮袋形瓶（正面）	
巻頭図版2 桑山南4号墳出土 皮袋形瓶（背面）	
写真図版1 H30 美作国府跡（総社川崎線）	6
写真図版2 H30 勅使遺跡	9
写真図版3 H30 津山城跡（鶴山館西側トイレ付近）	10
写真図版4 H30 津山城跡（津山文化センター）	14
写真図版5 H30 東一宮天王遺跡（東一宮1117-1 他）	16
写真図版6 H30 美作国分寺跡	22
写真図版7 H30 美作国分寺跡	23
写真図版8 H30 美作国府跡	24
写真図版9 H30 水原遺跡	27
写真図版10 H30 東一宮天王遺跡（東一宮1110-1）	31
写真図版1 R1 市指定史跡苅田家住宅及び酒造場	35
写真図版2 R1 沼京免遺跡（沼9-7 他・沼10-13）	38
写真図版3 R1 院庄館跡	43
写真図版4 R1 沼京免遺跡（沼9-3 他）	47
写真図版1 桑山南4号墳	66
写真図版2 桑山南4号墳	67
写真図版3 桑山南4号墳	68
写真図版4 桑山南4号墳	69
写真図版5 桑山南4号墳	70
写真図版6 桑山南4号墳	71
写真図版7 桑山南4号墳	72
写真図版8 桑山南4号墳	73
写真図版9 桑山南4号墳	74
写真図版10 桑山南4号墳	75
写真図版11 桑山南4号墳	76
写真図版1 R2 慈恩寺古墳群	80
写真図版2 R2 美作国府跡（総社川崎線）	84
写真1 陥没直後の状況（左：南西から 右：東から）	87
写真図版1 R1・R2 高野山根1号墳・2号墳・3号墳	94
保存処理対象鉄刀写真（処理前）	96
保存処理後写真（上から②、①、③）	97
保存処理対象遺物処理前写真	98
保存処理後写真（上：蛇行剣 下：鉄釘）	99

表目次

第2章第3節

表1 桑山南4号墳出土遺物観察表（1） 64

表2 桑山南4号墳出土遺物観察表（2） 65

第4章

表1 保存処理対象鉄刀一覧表（文献1より） 96

表1 史跡津山城跡保存処理対象鉄釘一覧表（文献1より） 98

第1章 調査事業の概要と調査体制

第1節 調査事業の概要

津山市は岡山県北部に位置し、人口約10万人、面積506.36km²を測る地方都市である。市の北端は鳥取県に接し、標高1,000m級の中国山地が連なる。また、市の西部及び南部は吉備高原に接し、中心部は盆地状の地形を呈している。これらの間を縫うように岡山県三大河川の一つである吉井川が流れ、瀬戸内海に注ぐ。

旧国では美作国に属し、古代には国府と国分寺が置かれた。中世には守護所が置かれ、近世には津山城が築城されて城下町が整備された。古代以降一貫して県北の政治経済の中心地の役割を果たしてきたが、現在は人口減少と高齢化が進んでいる。

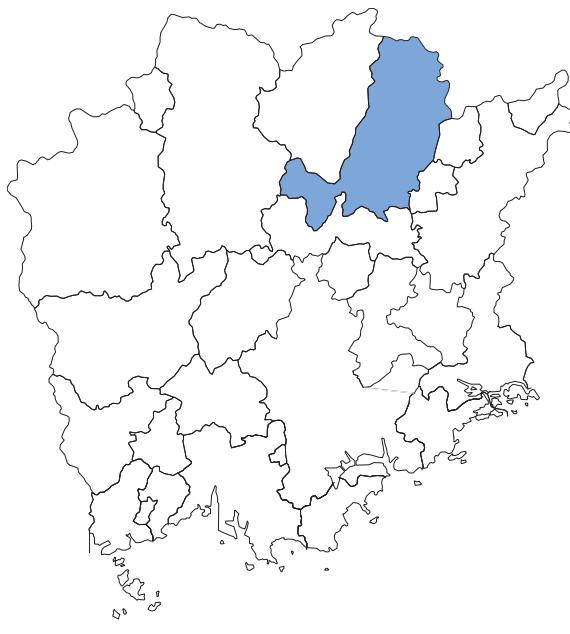
本報告書に所収している報告は、国庫補助事業として平成30年度から令和2年度までに行われた埋蔵文化財の試掘・確認調査、古墳の測量調査、及び出土遺物の保存処理業務である。

埋蔵文化財の試掘・確認調査は、規模の大小合わせて18件ある。

測量調査については、平成17年の合併後、史跡のうち、古墳については、その多くが測量図等の基礎資料がなく、その保存をはかる上で大きな課題となった。このため、基礎資料の蓄積を図ることを目的として、古墳を中心とした測量調査を行うこととした。測量調査は平成22年度から着手しており、平成29年度までに16箇所(古墳37基)の資料化を行った。これらは既刊の報告書に所収されている。今回は令和元年度から令和2年度までに実施した高野山根古墳群について報告する。

なお、平成30年度については、古墳の測量は行わず、7月西日本豪雨により、県指定史跡津山藩主松平家菩提所泰安寺において墓塔が陥没したため、被害状況を把握することを目的に現況測量調査を実施した。

出土遺物の保存処理については、津山市がこれまで実施してきた発掘調査によって出土した鉄製品のなかに、劣化が著しいものが確認され課題となった。このため、保存を図り、活用しやすい状態にするため、必要なものについて保存処理を行うこととした。平成29年度から着手しており、3点の保存処理を行っている。今回は、平成30年度から令和2年度までに実施した10点について報告する。



第1図 津山市位置図

第2節 調査体制

本報告書記載の調査事業は、津山市教育委員会（令和2年度以降は津山市産業文化部文化課）が国庫補助事業として実施した。各年度別の調査体制は次のとおりである。

平成30年度

津山市教育委員会

教育長	有本明彦
生涯学習部長	小坂田裕造
生涯学習部次長（文化課長）	今村弘樹
生涯学習部企画参事（弥生の里文化財センター所長）	小郷利幸
生涯学習部企画参事（文化財保護係長・弥生の里文化財センターワーク次長）	平岡正宏
文化課主査	豊島雪絵
文化課主査	平井泰明
文化課主事	宮崎絢子

令和元年度

津山市教育委員会

教育長	有本明彦
生涯学習部長	小坂田裕造
生涯学習部次長（文化課長）	今村弘樹
生涯学習部企画参事（弥生の里文化財センター所長）	小郷利幸
生涯学習部企画参事（文化財保護係長・弥生の里文化財センターワーク次長）	平岡正宏
文化課主査	豊島雪絵
文化課主査	平井泰明
文化課主事	宮崎絢子

令和2年度

(令和2年4月1日付で、津山市教育委員会から産業文化部に組織改編)

津山市産業文化部文化課

産業文化部長	明楽智雄
産業文化部参与（観光・歴史まちづくり・文化担当）	今村弘樹
文化課長	丸山 実
文化課参事（弥生の里文化財センター所長）	仁木康治
文化課参事（文化財保護係長・弥生の里文化財センターワーク次長）	平岡正宏
文化課主幹	豊島雪絵
文化課主事	宮崎絢子
文化課主事	三輪 望

令和3年度（報告書作成）

津山市産業文化部文化課

産業文化部長	明楽智雄
産業文化部参与（観光・歴史まちづくり・文化担当）	今村弘樹
文化課長	丸山 実
文化課参事（弥生の里文化財センター所長）	仁木康治
文化課主幹（文化財保護係長・弥生の里文化財センター次長）	豊島雪絵
文化課主査	梶原幸代
文化課主査	二宮俊幸
文化課主事	宮崎絢子
文化課主事	三輪 望

出土遺物の整理作業は、弥生の里文化財センター嘱託職員（令和元年度から会計年度任用職員）春名博美、宗本節子、皆木沙織、梅本智子が担当した。また、発掘作業については、津山市に登録の発掘作業員が従事した。古墳の測量業務、及び出土遺物の保存処理については、専門の業者に委託して実施した。

調査から報告書作成にあたり、岡山県教育庁文化財課の指導・協力を得た。

なお、各遺跡の試掘・確認調査、及び古墳の測量にあたっては、敷地内への立入や、調査に伴う伐採等について、関係地権者に快諾いただき、スムーズに事業を進めることができた。厚く御礼申し上げます。

第2章 試掘・確認調査の概要

第1節 平成30年度試掘・確認調査

1. 美作国府跡（総社川崎線）確認調査

a 調査地 津山市山北地内

b 調査期間 平成30年2月8日～

平成30年2月13日

c 調査面積 5.85 m²

d 調査概要

(経緯と経過)

総社川崎線（山北工区）道路新設事業実施に伴い、平成30年1月19日に津山市長より文化財

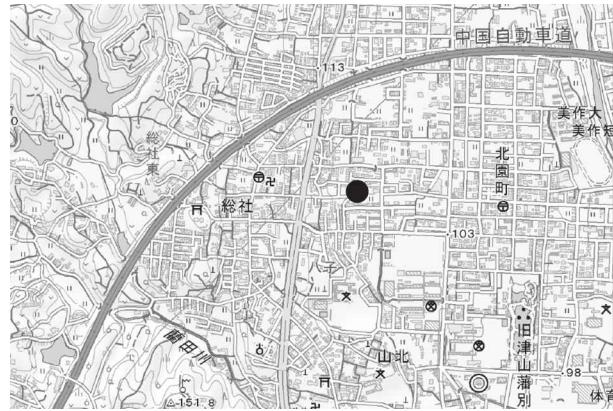
保護法第94条の規定による発掘通知が津山市教育委員会に提出された。

当該地区は、住宅地であり、平成23年に津山市教育委員会が確認調査を行い、溝状の遺構を検出した場所の数メートル北側に位置しており、この溝を含む遺構の広がりを確認するために調査を行った。

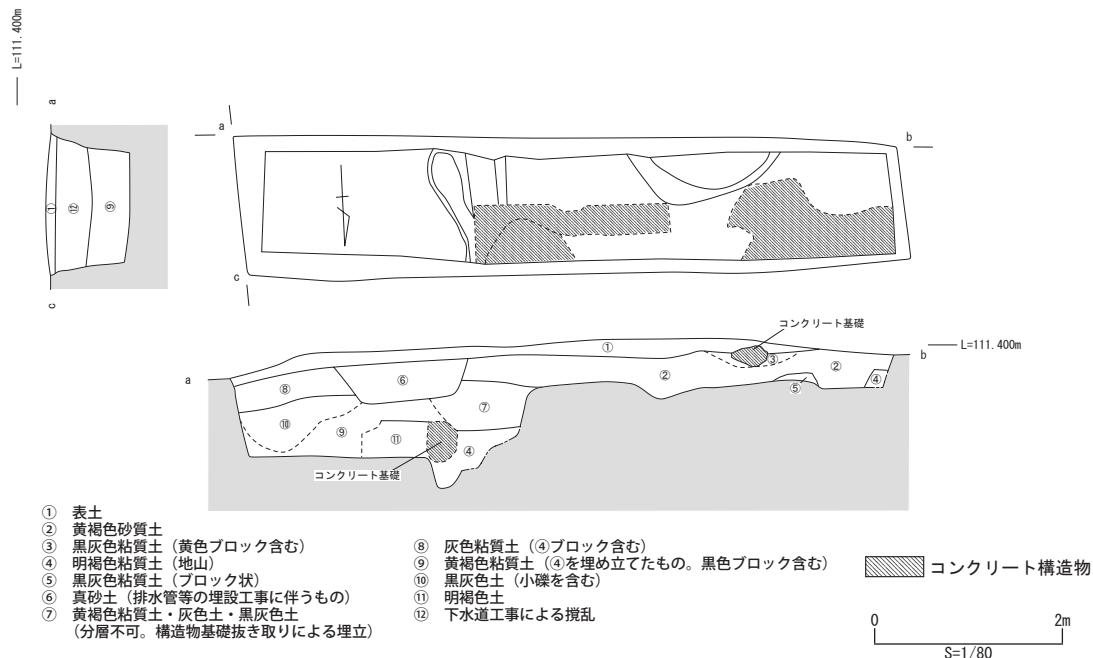
調査は、工事により掘削を行う場所のうち、既存の擁壁等を避けた場所にトレンチを1本設定して、人力による掘削を行った。

(調査の概要)

約1.0m×6.9mのトレンチである。厚さ約20cmの耕作土を取り除くと、明黄色の土層及び暗灰色



第1図 調査位置図 (S = 1: 25,000)



第2図 トレンチ平面・断面図 (S = 1: 80)

の粘質土層が確認された。その下からは厚さ約2～3cmの灰を含む層が帯状に広がっていた。この中からは、金属製のネジを検出しており、宅地造成時に何らかの行為（何かを燃やした跡か）が行われた痕跡であると考えられる。その下からは、西側（丘陵側）で地山と考えられる層が、東側（谷側）で地山を碎いたものを埋め立てたとみられる層が広がっていた。このことは、丘陵側を削り、谷側を埋め立てて造成していたことを示すものであろう。遺構および遺物は確認されていない。

e まとめ

今回の調査では、平成23年に確認されていた溝状の遺構を含む遺構及び遺物は確認できなかった。また、宅地造成時には地山を削り、谷側へ埋め立てたと考えられ、今回の掘削深度までは少なくともこの状況が続いていることが確認できた。

(平井)

写真図版1 H30 美作国府跡（総社川崎線）



調査前（西から）



調査状況（東から）



掘削終了（西から）



調査後（南西から）

2. 勅使遺跡確認調査

a 調査地 津山市高野本郷 1435 番 15 ほか
b 調査期間 平成 30 年 6 月 7 日～

平成 30 年 6 月 13 日

c 調査面積 12.5 m²

d 調査概要
(経緯と経過)

勅使遺跡は、津山市街地を流れる加茂川右岸の沖積地上にある。この周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲の中央付近には、勅使山圓福寺の小堂があり、かつて周辺から白鳳期の瓦が出土したとされている。これまでの所見では、地形や地割等から方 1 町程度の規模を持つ白鳳寺院の存在が想定されている。

包蔵地内における調査は、平成 21 年度に個人住宅建設に先立って行われた確認調査、及び平成 26 年度～29 年度にかけて遺跡の範囲と内容の把握を目的として確認調査を実施している。平成 26 年度の調査で東西に流れていたと思われる溝状の遺構を確認したが、白鳳期にさかのぼる遺構や遺物はこれまでのところ確認されていない。

調査は、病院の建設に伴う確認調査で、工事内容から、浄化槽埋設予定部分にトレーナーを 1 本設定して実施した。調査は一部硬くしまった造成土については重機を用いて掘削し、その他は人力で行った。
(調査の概要)

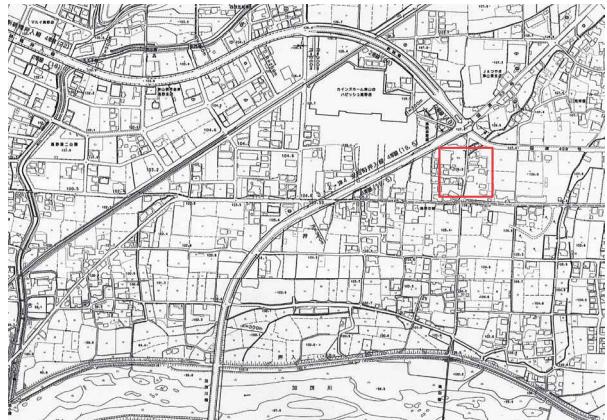
現地表面から 15～20cm 程度下までは砂質土で、その下は 50cm 程度にわたり暗茶褐色レキ混土である。これらは、後世の造成土である。その下は黄褐色の硬いレキ混土が 10cm 程度みられ、この層についても、当該地を造成する際に埋め立てた造成土と考えられる。以下は灰色系の砂質土層が堆積している。砂質土層については、過去の確認調査においても確認されている。砂質土層の上層からは、レンガ片などがみつかったことから、砂質土の上層部分（第 4 層）については、近代以降の堆積であると考えられる。

なお、この砂質土層の下位は、マンガンを含む層であることから、水田であったことが推測される。

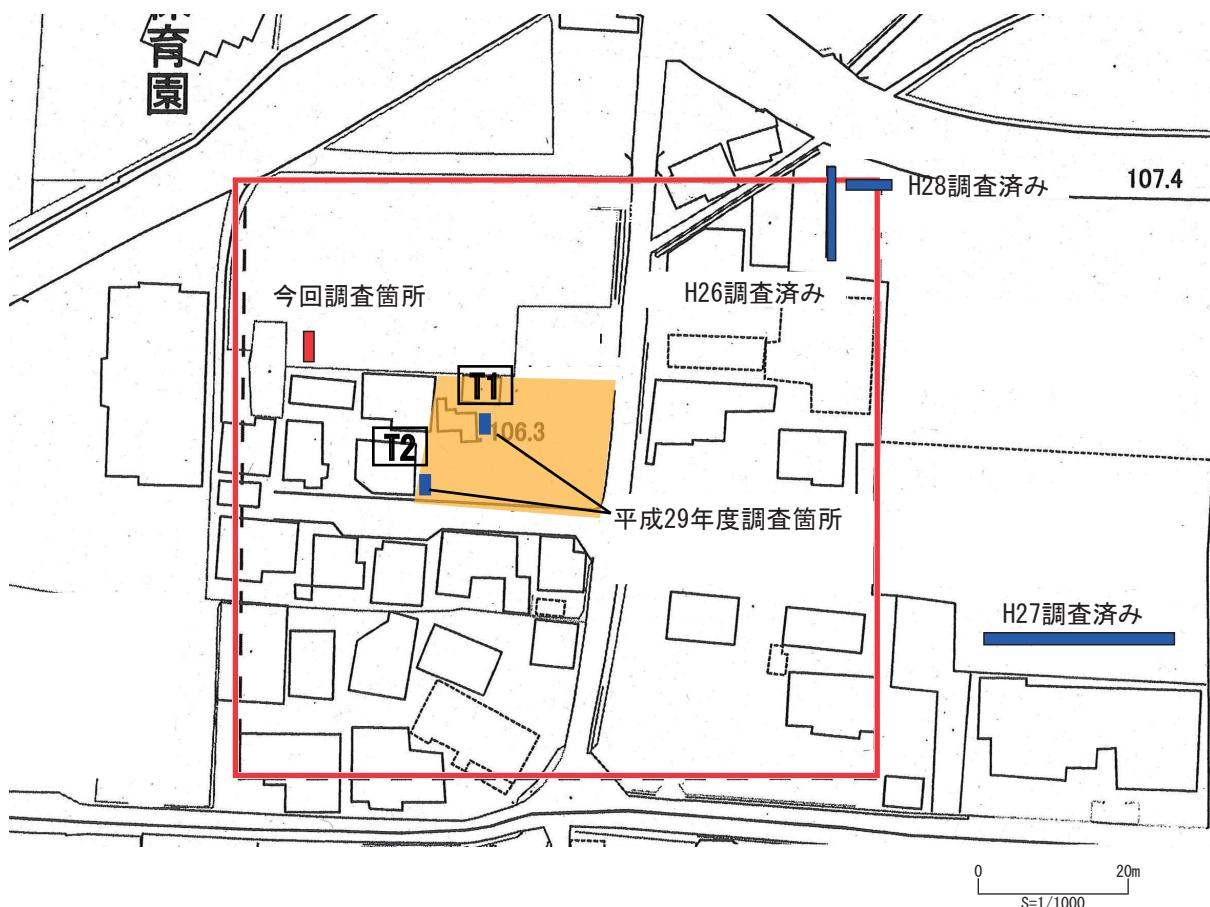
e まとめ

今回の確認調査では、砂質土層の上に造成土が厚く堆積していることが確認された。この造成土は、さかのぼっても近代以降のものと考えられる。また、一時期にはこの場所が水田であったことが推測されるが、古代寺院の存在を示すような遺構・遺物等は確認することができなかった。

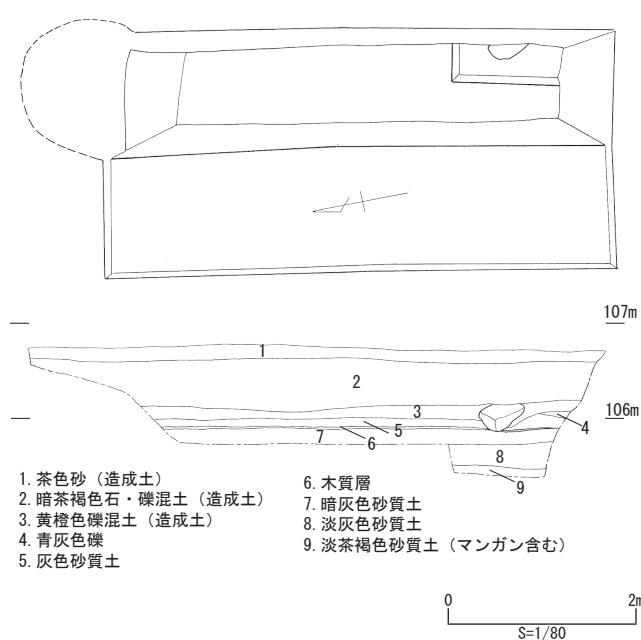
(豊島)



第 1 図 調査位置図 (S = 1 : 15,000)



第2図 調査トレンチ配置図 ($S = 1 : 1000$)



第3図 トレンチ平面・断面図 ($S = 1 : 80$)

写真図版2 H30 勅使遺跡



調査地遠景（北東から）



調査後全景（北から）



調査後全景（北西から）



土層断面（西から）

3. 津山城跡（鶴山館西側トイレ付近） 確認調査

- a 調査地 津山市山下 132
- b 調査期間 平成 30 年 7 月 24 日～
平成 30 年 8 月 31 日
- c 調査面積 10.6 m²
- d 調査概要
(経緯と経過)

トイレ建物の北西部部分に 2.3 m × 2.0 m のトレンチ 1 と、トイレ建物南側に 6.0 m × 1.0 m のトレンチ 2 を設定して調査を行った。

(調査の概要)

トレンチ 1

地表面から約 50cm の深さにパイプが埋設されていた。トイレ建物から西へ 120cm の場所からは、石垣の裏込め石を確認した。ただし、前述のパイプ埋設時にかなりの裏込め石が移動されたと考えられる。トレンチ南東隅の深さ 80cm の場所からは、古い便槽と考えられる構造物の埋設を確認した。

上記の調査結果及び土層の観察から、本トレンチ周辺では、トイレ建物から西へ約 120cm、深さ約 80cm の範囲においては、過去の工事等の削平などにより、津山城に関連する遺構は存在しないと判断される。

トレンチ 2

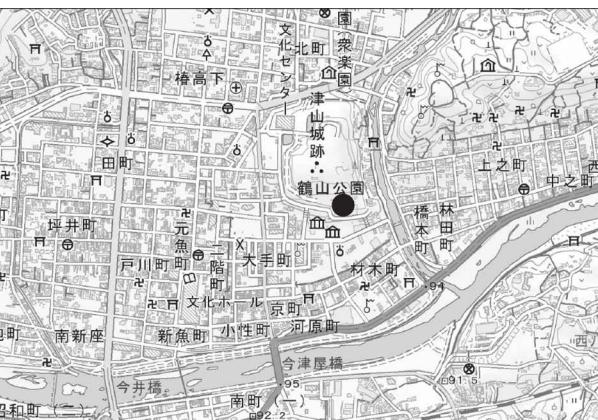
トレンチ南東隅の深さ 30cm の場所から埋設された土管を検出した。本トレンチに関しては、過去の工事等による影響はほとんど受けておらず、石垣の裏込め石については、トイレ建物から西へ 60cm の場所までその範囲が及ぶことを確認した。裏込め石以外の遺構は確認されず、深さ約 50cm の面は日比較的丁寧に整地されていた。

上記の結果から、トイレ建物南側においては、石垣裏込め石以外の遺構は存在しないと判断される。

写真図版 3 H30 津山城跡（鶴山館西側トイレ付近）



トレンチ 1 (上が北)



第1図 調査位置図 (S = 1 : 20,000)

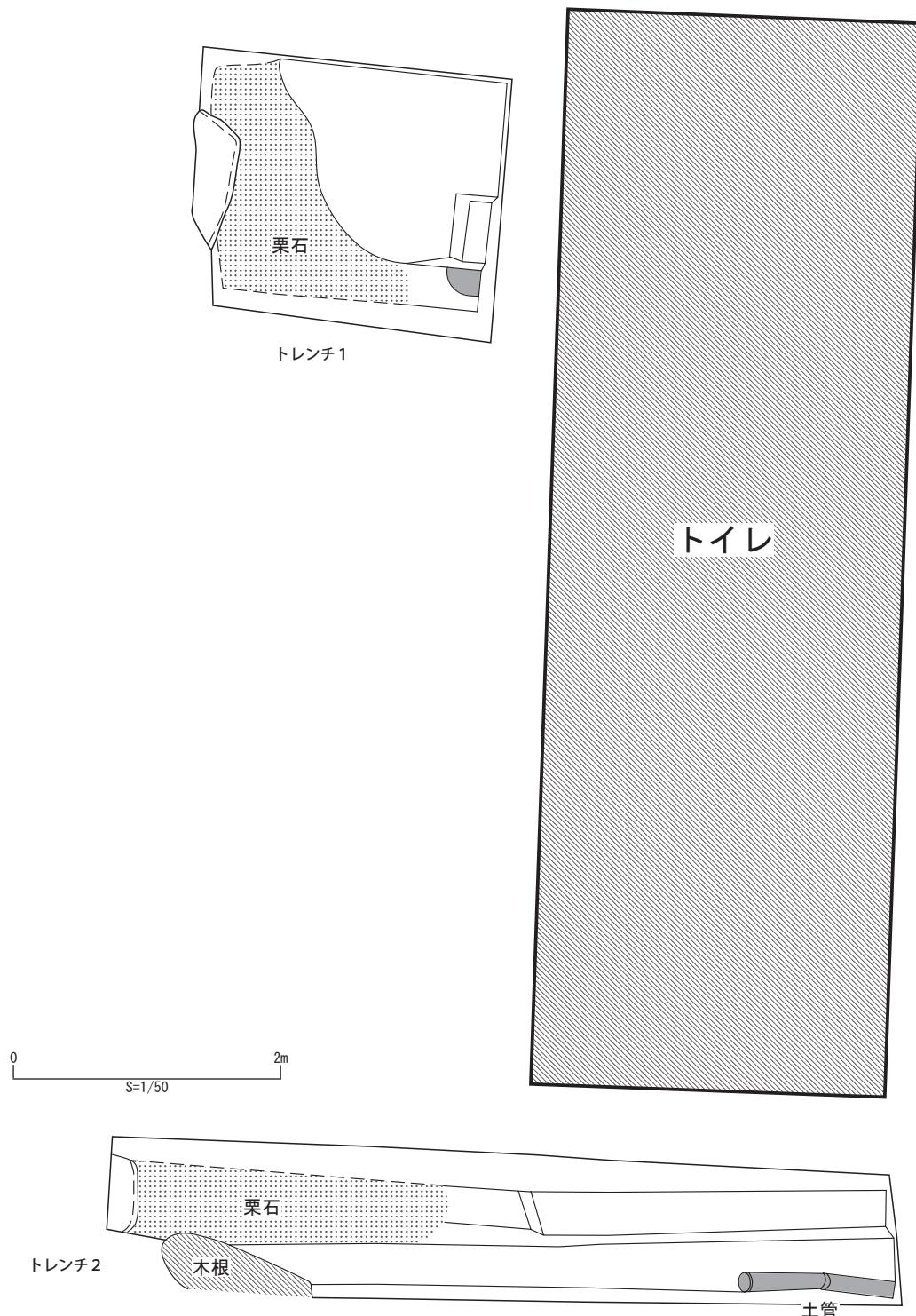


トレンチ 2 (上が北)

e まとめ

トレンチ1は、過去の工事により大きく削平を受けていることから、過去の工事による影響をほとんど受けていないトレンチ2の状況から判断して、トイレ建物の西60cmから西側部分の深さ30cmより深い部分を掘削する場合、石垣の裏込め石が存在することが想定されるため、掘削を行う場合は注意が必要である。また、深さ約50cmの整地面に掘削が及ぶ場合、本調査では遺構が確認されなかつたが、注意が必要と考える。

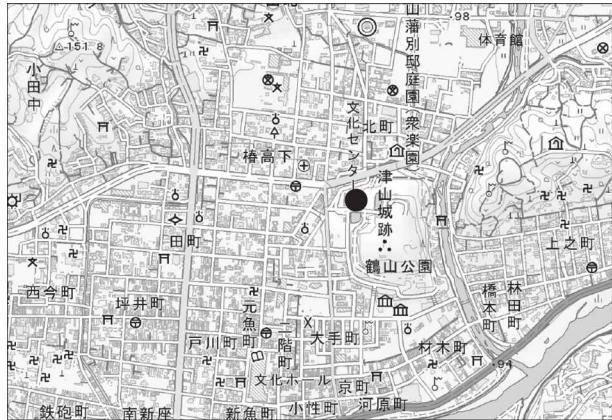
(平井)



第2図 トレンチ配置図 ($S = 1 : 50$)

4. 津山城跡（津山文化センター） 確認調査

- a 調査地 津山市山下ほか
- b 調査期間 平成 30 年 8 月 2 日～
平成 30 年 8 月 20 日
- c 調査面積 25.2 m²
- d 調査概要
(経緯と経過)



第1図 調査位置図 (S = 1 : 15,000)

津山城は、市街地を東西方向に流れる吉井川と南北に流れる宮川との合流点を望む小高い山を利用して築かれている。山頂に本丸を築き、その下に二の丸、三の丸が石垣によって階段状に配される。昭和 38 年 9 月 28 日に、石垣に囲まれた部分を中心に国の史跡に指定された。

津山城の本来の範囲については、埋蔵文化財包蔵地となっている。今回の調査は、史跡指定地外の北西に位置する津山文化センターの改修工事に伴う確認調査である。津山文化センター付近は、森家時代には絵図に区画がみられるが、明らかではない。松平家時代の絵図には、「下御屋敷」の記載がみられ、屋敷地であったことがわかる。明治 3 年 3 月には現在の津山文化センターの地に津山藩庁が新築され、その傍らに第 9 代藩主、松平慶倫の版籍奉還後の住居が新築され、移り住んでいることがわかる。その後、小学校の敷地となり、昭和 41 年、現在の津山文化センターが建てられた。このように、津山文化センターのある土地は明治以降様々な形で利用されていることかわかる。

（調査の概要）

調査区は、改修工事の影響を受けるエレベーターホール予定部分（トレント 1）、及び耐震工事に伴う基礎掘削予定部分（トレント 2）の 2箇所に設定した。調査はトレント 1 については重機を使用し、トレント 2 については人力で掘削を行なった。

トレント 1

津山文化センター駐車場の一部で、エレベーターホール設置予定箇所にあたる部分である。アスファルト及び路盤を重機により剥がしたところ、固くしまった白黄褐色の改良土が検出された。また、トレントの北東隅、及び西側 1.5 m～2 m は碎石がみられた。これは、文化センター建物及び駐車場造成の際のものと考えられる。その下には古い水道管があり、前身の建物に伴うものと推測されるが時期は不明である。改良土を除去するとその直下は黄褐色の地山であり、この調査区からは遺構・遺物等は確認されなかった。

トレント 2

津山文化センターの建物の南側基礎にあたる部分である。この調査区は、トレント 1 から 2.1 m 下がったところに位置する。平成 27 年度に実施したボーリング調査から、2 m～3 m 程度の盛土が行われていることが判明している。

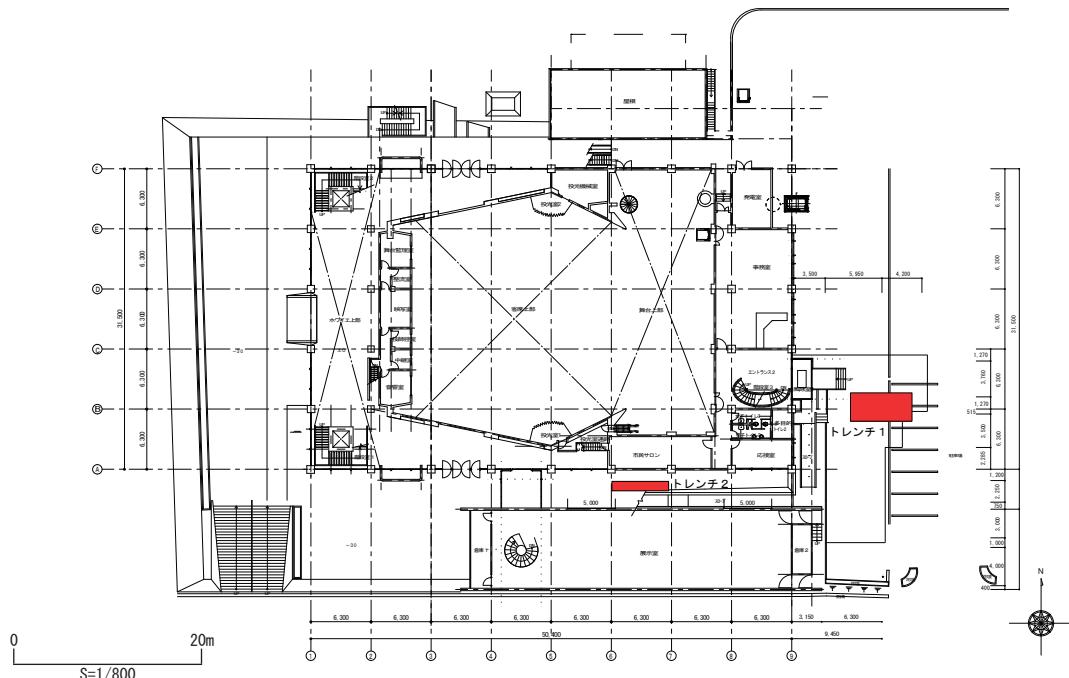
表土である砂味及び砂を除去したところ、表土から 20cm 堀削したところでマンホール、空調機のホース、その他の管がみられた。その下を部分的に 20cm 程度堀削したが、茶褐色の造成土がみられたが、

遺構・遺物等は確認されなかった。

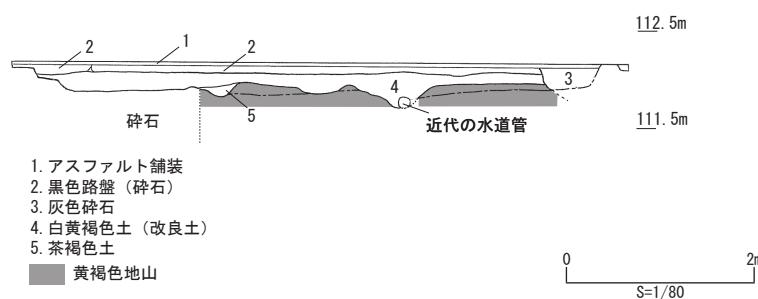
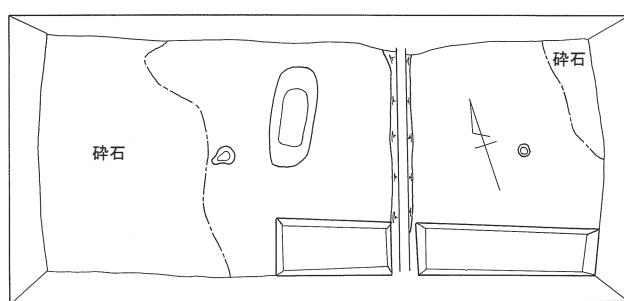
e まとめ

調査では、2箇所の調査区のいずれからも、江戸時代の遺構・遺物は確認されず、遺構があった場所であっても削平されたと推測される。調査区一体は江戸時代は屋敷地、明治時代以降は藩庁や県庁、学校、文化施設など、様々な土地利用がなされており、そのたびに造成が繰り返されてきたと推測される。

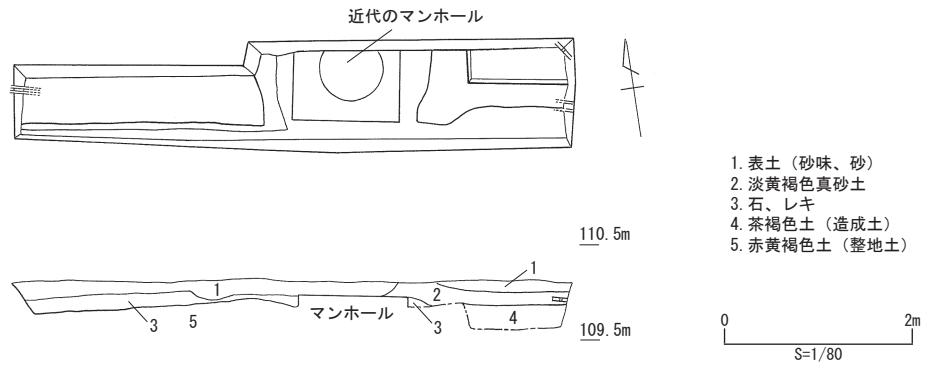
(豊島)



第2図 トレンチ配置図 (S = 1:800)



第3図 トレンチ1平面・断面図 (S = 1:80)



第4図 トレンチ2平面・断面図 ($S = 1 : 80$)

写真図版4 H30 津山城跡（津山文化センター）



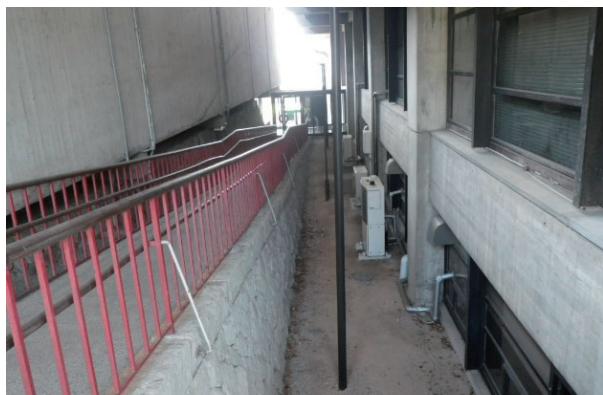
トレンチ1調査前（南東から）



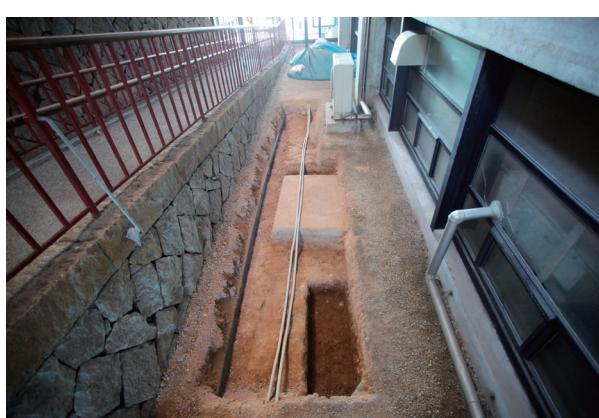
トレンチ1調査状況（西から）



トレンチ1全景（西から）



トレンチ2調査前（東から）



トレンチ2全景（東から）



トレンチ2土層断面（南から）

5. 東一宮天王遺跡(東一宮 1117-1 他) 確認調査

- a 調査地 津山市東一宮 1117-1 他
 b 調査期間 平成 30 年 9 月 11 日～
 平成 30 年 9 月 19 日

- c 調査面積 15.9 m²
 d 調査概要
 (経緯と経過)



第1図 調査位置図 ($S = 1: 20,000$)

宅地造成の計画に伴い、埋蔵文化財の状況を確認するために調査を行った。

当該地区は畠地であり、工事内容は耕作土を除去したのち盛土を行い、宅地を造成するものである。

調査は、当該地中央付近の計画で道路となる部分に 1.5 m × 5 m のトレンチを 2 本設定し、人力にて掘削し調査を行った。

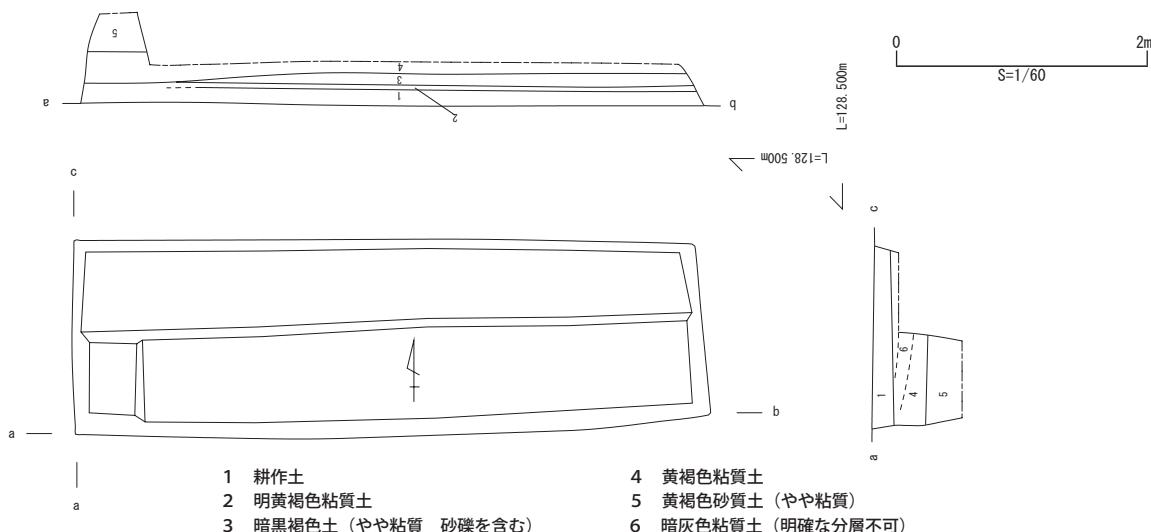
(調査の概要)

トレント 1

深さ約 20cm の耕作土を取り除くと、明黄褐色の粘質土層が現れる。その下が暗黒褐色の砂礫を含む層が一部で確認され、その下は黄褐色の粘質土、さらにその下はやや粘質の砂質土層が続くことが確認された。遺物は、耕作土及び暗黒褐色の砂質土層において、勝間田焼の極小片が数片確認された。この勝間田焼については遺構に伴う出土ではなく、他所からの流れ込みによるものであろう。本トレントにおいて遺構は確認されていない。

トレント 2

深さ約 20cm の耕作土を取り除くと、黄褐色の粘質土層が現れる。排水用に掘削した部分の土層観察から、この黄褐色の粘質土層が下に続いていることが確認でき、この層より下には遺構は存在しないと判断した。本トレントにおいても遺構・遺物は確認されていない。

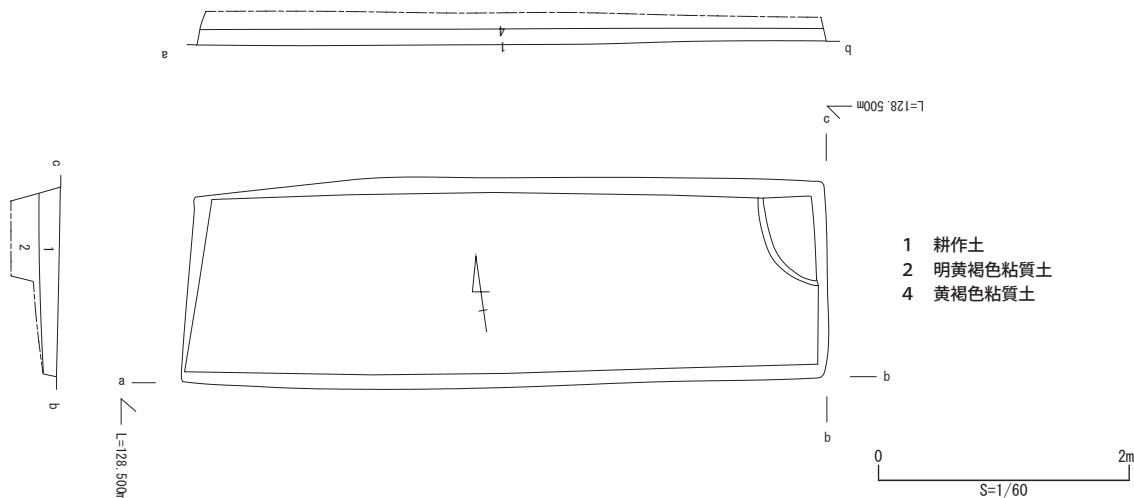


第2図 トレント 1 平面図・断面図 ($S = 1: 60$)

e　まとめ

今回の確認調査では、遺構に伴う遺物や遺構は確認されていない。トレント1では、特に西側においては丘陵を掘削し畑地としたことが地形より推測され、旧地表面はすでに失われていると考えられる。次にトレント2については、耕作土の直下で地山と考えられる黄褐色の粘質土層が確認されており、この層は過去にある程度削平を受けていたと考えられる。このような状況から、当該地において遺構は存在しないと判断される。

(平井)



第3図　トレント2平面・断面図 ($S = 1:60$)

写真図版5 東一宮天王遺跡（東一宮 1117-1 他）



調査地遠景（西から 手前がトレント1 奥がトレント2）



トレント1全景（東から）



トレント2全景（西から）

6. 美作国分寺跡確認調査

- a 調査地 津山市国分寺 309 番地 1 他
- b 調査期間 平成 30 年 9 月 28 日～
平成 30 年 10 月 23 日
- c 調査面積 81.2 m²
- d 調査の概要
(経緯と経過)

周知の埋蔵文化財包蔵地である美作国分寺跡の

範囲内で、宅地造成が計画された。本工事は現水田面に盛土を行い造成するもので、旧地表面に及ぼす影響は極めて軽微なものであった。しかし、今回工事が行われる国分寺西端と想定される部分の情報は少なく、そのため地権者の同意を得て、確認調査を行うこととなった。

調査は、南北（トレンチ 1）と東西（トレンチ 2）に 2 本のトレンチを設定し、重機にて掘削を行った後、人力にて遺構の検出と後にトレンチの拡張を行った。

（調査概要）

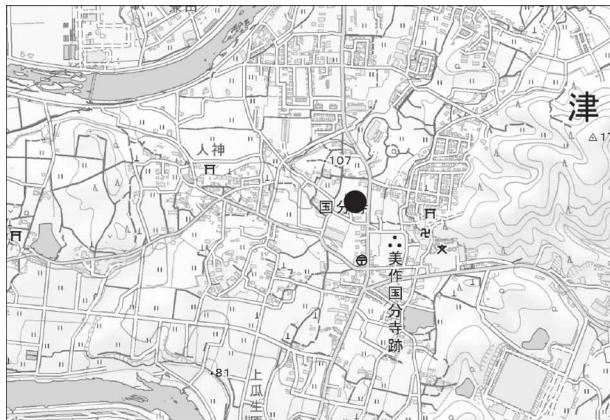
トレンチ 1 (28 m × 1.5 m)

国分寺を区画する東西溝を確認すべく設定したトレンチである。層序は、耕作に伴う層の下は、瓦などを包含する層であり、さらにその下は、地山と考えられる黄褐色の粘土層である。遺構は、柱穴と考えられる土坑を検出している。一部に規則性がみられる配置の土坑を確認したが、その性格・規模などは今回の調査では明らかにできなかった。また、今回の調査の目的である国分寺を区画する東西溝は検出されなかった。

出土遺物は瓦と土器で、明らかに遺構内から出土したものは、土坑 2（径 64cm・検出面からの深さ 34cm）とした遺構から出土した 1～7 の土師器のみで、その他は、遺構検出時に出土したものである。土器は土師器、須恵器、勝間田焼及び弥生土器である。瓦の凹面は、布目が残りナデ調整はあまり行われていない。凸面は格子目タタキを施す 20 と平行タタキの 21 がある。土師器は土坑 2 とした遺構から多く出土している。1～7 は、いずれも小皿で、内外面は回転ナデを施し、摩滅して判断しにくいものもあるが、底部に糸切り痕を残す。13 は土師器の高壺脚部で、外面は面取りされており、その形から木製高壺を土師器に置き換えたものと思われる。須恵器の壺身 10・11 は、内外面を回転ナデし高台を貼り付ける。12 の甕は内外面に回転ナデを施す。勝間田焼の 9 は、底部から口縁部までの立ち上がりは屈曲して椀状になり、口縁端部は肥厚する。底部には糸切り痕を残す。同じく 8 は小皿で、底部から口縁部までの立ち上がりが明確でなく肥厚しながら屈曲する。弥生土器のうち 14 は甕の底部で内面はタテハケ、指頭圧痕を施し、外面は縦方向のヘラ磨きを施し、煤が付着する。15 は、内外面ヨコナデ、外面に縦方向のハケを施す。

トレンチ 2 (21 m × 1.7 m)

国分寺を区画する南北溝を確認すべく設定したトレンチである。層序はトレンチ 1 と同様、耕作に伴う層の下は瓦などを包含する層であり、さらにその下は地山と考えられる黄褐色の粘土層である。主な



第 1 図 調査位置図 (S = 1 : 20,000)

遺構はトレンチ西に位置する。幅約4m、検出面からの深さは15～20cmの溝状の遺構である。ただ、西側の立ち上がりが明瞭ではない。過去に行われた調査から、国分寺を区画する南北溝ではないかと推測される。また、柱穴と考えられる土坑を複数検出している。一部に規則性がみられる配置の土坑がみられるが、その規模などは今回の調査では不明である。

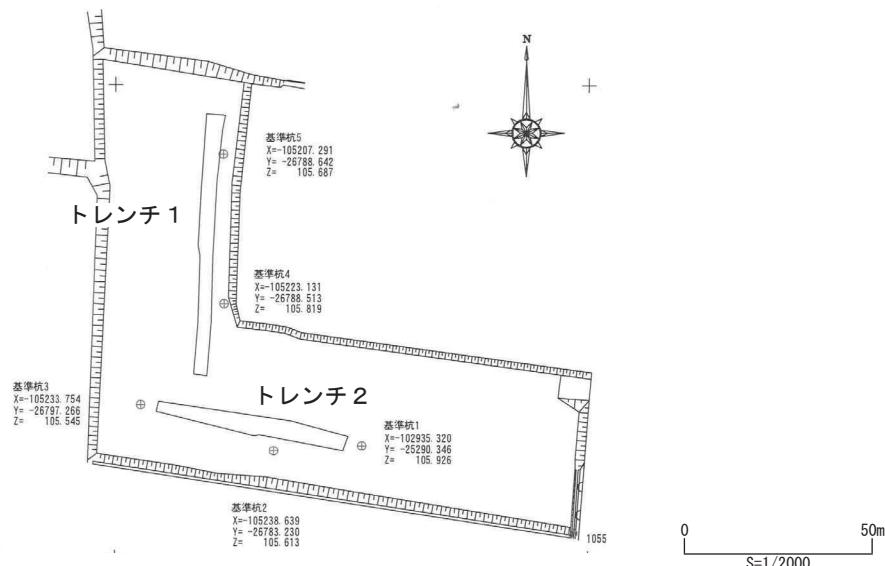
出土遺物はほとんどが瓦であった、土器は若干量のうえ、極小片のみの出土であった。トレンチ1と同様に遺物は、遺構検出時にその多くを検出した。瓦の凹面は、布目が残りナデ調整はあまり行われていない。凸面は縄タタキ目を施す17、平行タタキの18・19がある。小片ではあるが均等唐草文の軒平瓦16も出土している。なお、瓦については、土坑1（径120cm・検出面からの深さ23cm）とした比較的大きな土坑からまとめて出土している（図示できたのは17のみ）。

e まとめ

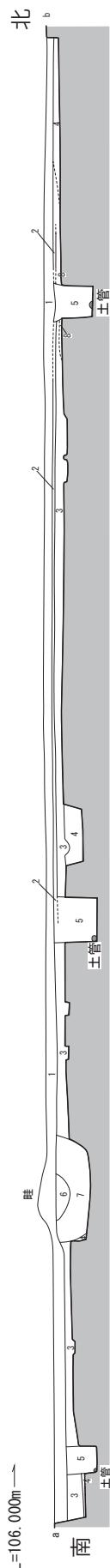
今回の調査目的である国分寺域を区画する溝について、東西溝は確認されなかったが、過去に行われた調査結果から判断して、トレンチ2で確認された溝状の遺構は、南北に区画する溝である可能性が高い。一方で過去の調査で触れられている築地については今回の調査では、それを確認する痕跡は確認できなかった。

また、今回弥生土器が出土したが、周辺には弥生時代の遺跡は知られていない。当地周辺にその存在が推測される。

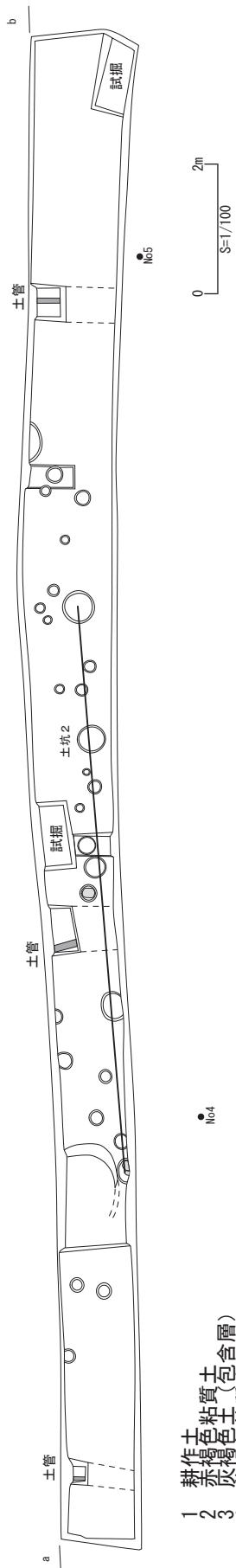
(平井)



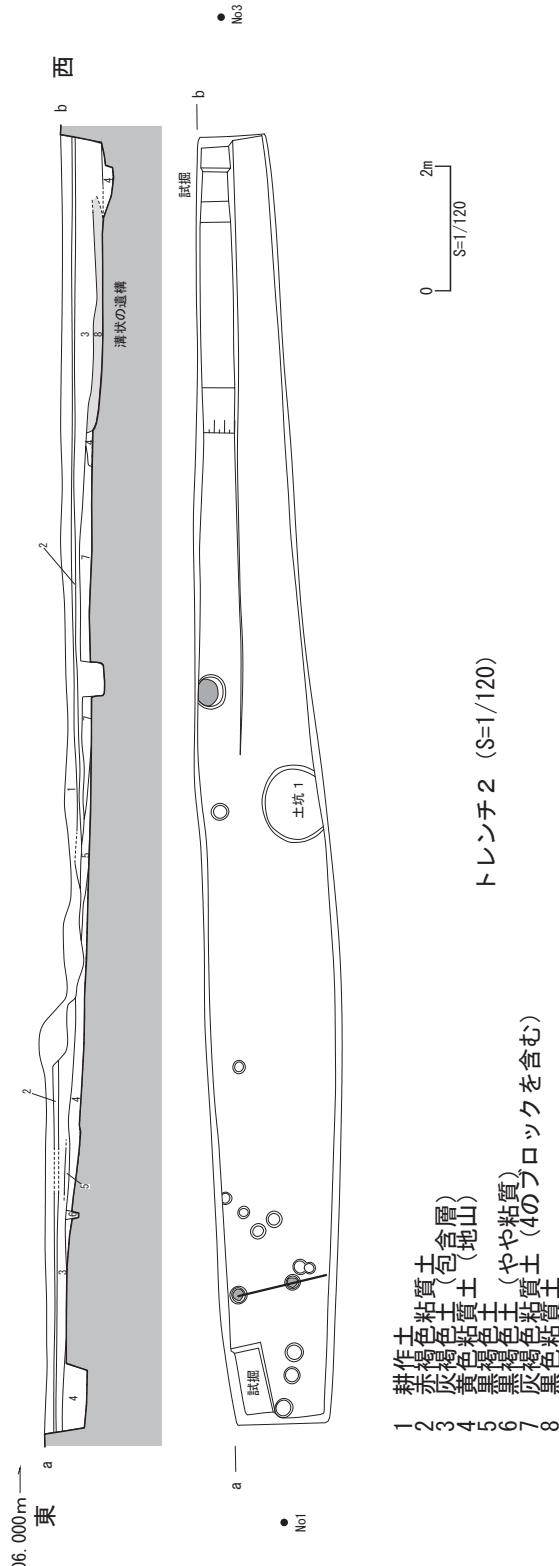
第2図 トレンチ配置図 (S = 1 : 2000)



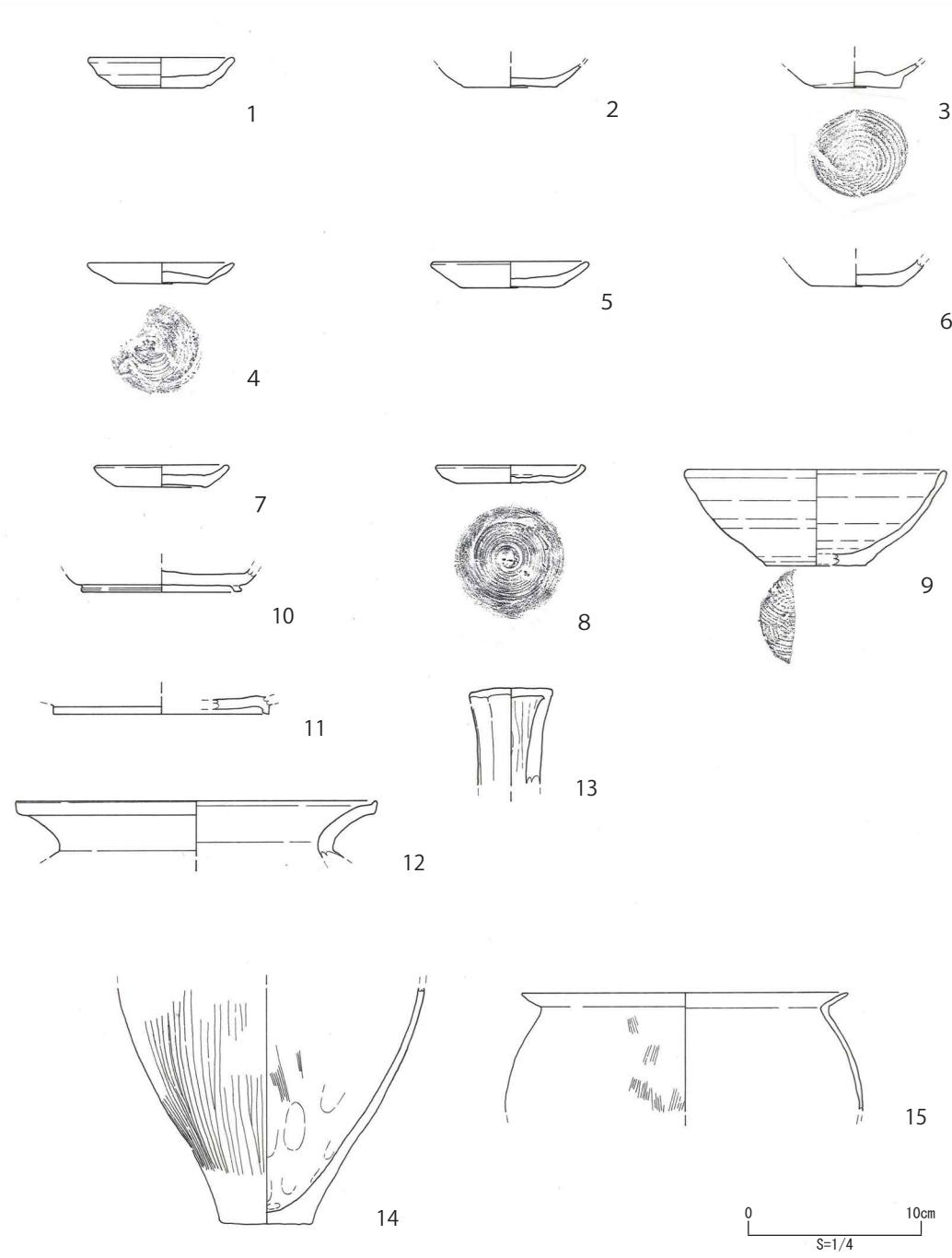
第3図 テレンチ1平面・断面図 ($S = 1:100$)



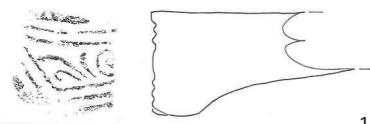
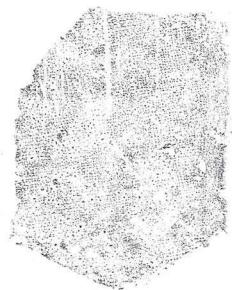
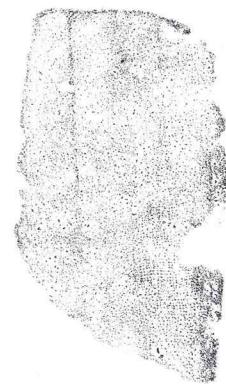
テレンチ1 ($S=1/100$)



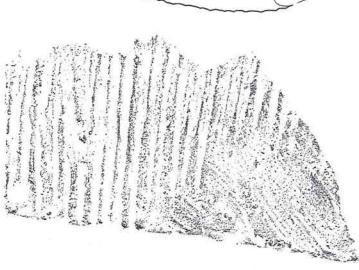
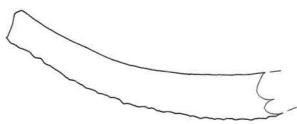
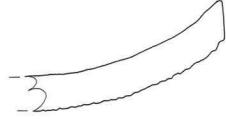
第4図 テレンチ2平面・断面図 ($S = 1:120$)



第5図 出土遺物 (1) ($S = 1 : 4$)

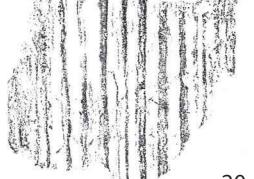
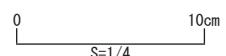
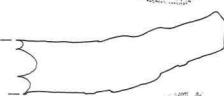
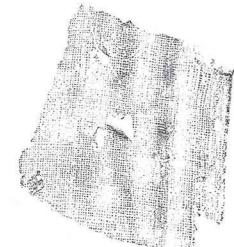
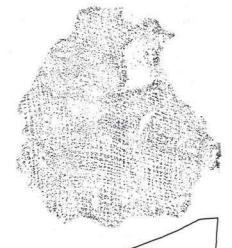


16

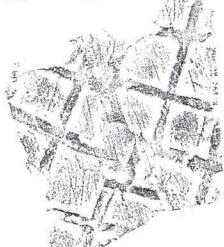


19

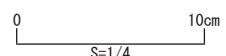
17



20



21

第6図 出土遺物 (2) ($S = 1 : 4$) $S=1/4$

写真図版6 H30 美作国分寺跡



調査前（南東から）



トレンチ1全景（南から）



トレンチ2全景（東から）



土坑1遺物出土状況（北から）



調査風景



中学生職場体験風景

写真図版 7 H30 美作国分寺跡



土坑1出土 土師器 小皿（1～7）



勝間田焼 小皿（8）



勝間田焼 梗（9）



弥生土器 甕（15）



軒平瓦（16）



平瓦凸面 繩タタキ目（17）



平瓦凸面 並行タタキ目（18）



平瓦凸面 格子タタキ目（21）

7. 美作国府跡確認調査

- a 調査地 津山市山北字幸畑 16-1 他
- b 調査期間 平成 31 年 1 月 7 日
- c 調査面積 10 m²
- d 調査の概要

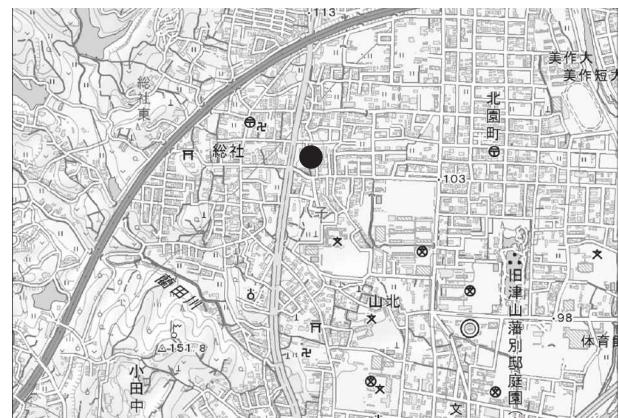
(経緯と経過)

津山市山北地内で、周知の埋蔵文化財包蔵地である美作国府跡において、宅地造成が計画された。現況は畑で、工事に伴い、造成予定地の一部が掘削を伴うため、その部分について工事の際に精査し、遺構の有無について確認を行うこととした。

(調査の概要)

重機により表土をすき取った後に精査をしたところ、直下で地山が検出された。遺構・遺物等は確認されなかったため、写真撮影と、土層の確認を行い、調査を終了した。

(豊島)



第1図 調査位置図 ($S = 1:20,000$)

写真図版 8 H30 美作国府跡



すきとり状況



すきとり、精査後

8. 水原遺跡確認調査

- a 調査地 津山市新野山形 2193 - 1 他
- b 調査期間 平成 31 年 3 月 22 日～
平成 31 年 3 月 28 日
- c 調査面積 11.4 m²
- d 調査概要
(経緯と経過)

埋蔵文化財包蔵地内で太陽光発電設備設置工事が計画されたため、埋蔵文化財の状況を確認するための調査を行った。遺跡の現況は山林（伐採済）である。

調査は、掘削が行われる場所の谷底から斜面上端にかけて、1.1 m × 14 m のトレントチ 1 本を設定して行った。

(調査の概要)

表土及び茶褐色粘質土層を取り除くと明黄色の粘質土層（多くの礫を含む）が確認された。茶褐色粘質土層については、土が締まっておらず、この層の堆積が比較的新しいものであると考えられる。明黄色の粘質土層は、周辺の土層観察から、この層がかなり下まで続くことを確認できたため、これを地山と判断した。

遺物は、トレントチ中ほどの表土内において、土師質系の極小片を 2 片確認しているが、この周辺は丘陵斜面であるため、土砂の堆積はほとんど見られず、いずれかの場所からの流れ込みであると判断した。

遺構は確認されていない。

e まとめ

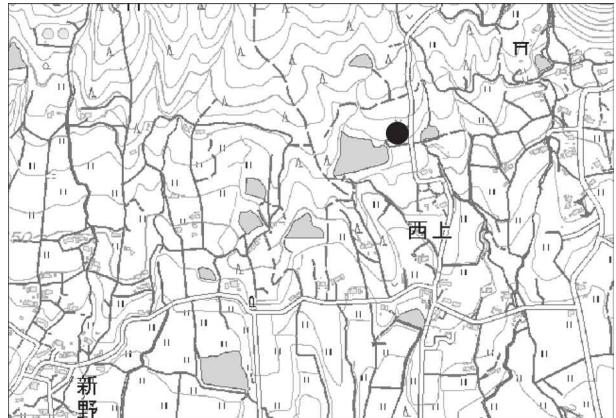
トレントチ周辺の開発予定地は、谷底には田もしくは畑として利用されていた痕跡がみられ、丘陵斜面においても自然地形とは異なる様相を呈している状況が確認でき、過去に農地や林道等に利用されていたことが推測される。

また、谷底の流路（主に今回工事で掘削が行われる部分）及びその周辺では、何度か人の手を入れて改修が行われた等の地域住民の証言もあり、調査結果や地形の観察から、旧地表面は既に失われていると考えられる。

このような周辺地形の状況や本調査結果から、今回の開発対象範囲においては、遺構は存在しないと判断され、集落等が存在するとすれば、今回の開発対象区域外の丘陵頂部周辺であろうと推定される。

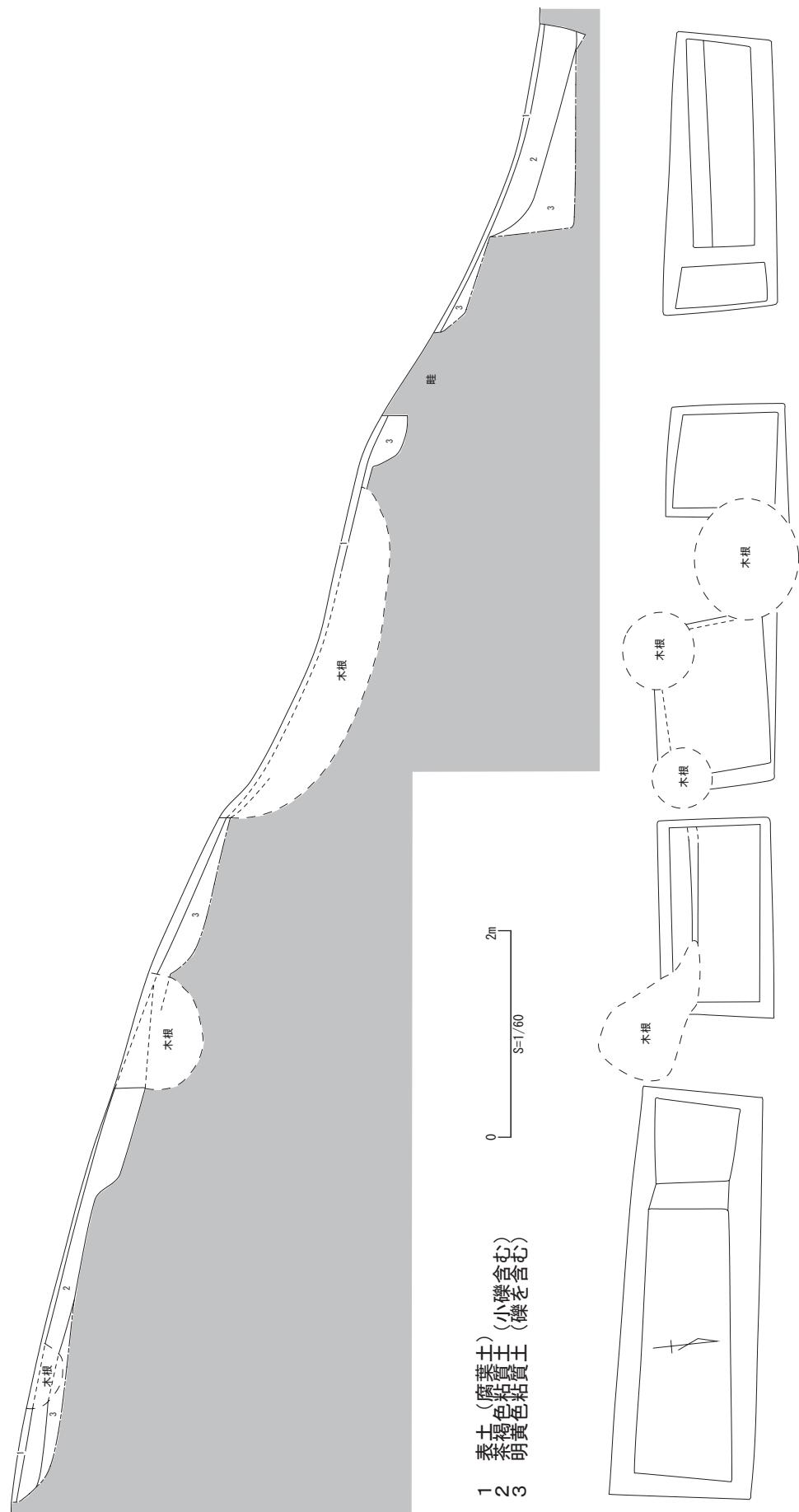
なお、同じく開発対象区域で埋蔵文化財包蔵地内である新野山形 2170、2171 については、既に地山とした明黄色の粘質土層が露出しており、自然の地形ではない平坦面が確認できることから、旧地表面は大部分が失われていると考えられる。

(平井)



第 1 図 調査位置図 (S=1:25,000)

L=282.000m



第2図 トレンチ平面・断面図 ($S = 1:60$)

写真図版9 H30 水原遺跡



調査地周辺



調査前



完掘状況



完掘（トレンチ東端）



調査終了



作業状況

9. 東一宮天王遺跡(東一宮 1110-1 番地)

確認調査

- a 調査地 津山市東一宮 1110-1
- b 調査期間 平成 31 年 3 月 25 日～
平成 31 年 3 月 30 日
平成 31 年 4 月 3 日～
平成 31 年 4 月 12 日

- c 調査面積 52 m²

d 調査概要

(経緯と経過)

調査地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である東一宮天王遺跡に該当する。今回の調査は、宅地造成に伴うもので、造成予定地内において表土のすき取りを行うため、遺跡の有無、及び遺構の深度等についての確認調査を実施した。

なお、後述するトレンチ 1、2 は平成 30 年度に、トレンチ 3～5 は令和元年度に調査を実施したが、併せて本項にて報告する。

(調査の概要)

調査区は、造成工事を行う部分のうち、道路予定地について、まず 2 箇所（トレンチ 1、2）に設定し、その後、遺跡の範囲を確認するため 3 箇所（トレンチ 3～5）で追加の調査を実施した。

トレンチ 1

道路部分の西側に設定したトレンチである。耕作土の下に土器が出土する包含層がわずかに確認されたが、遺構は確認されなかった。

トレンチ 2

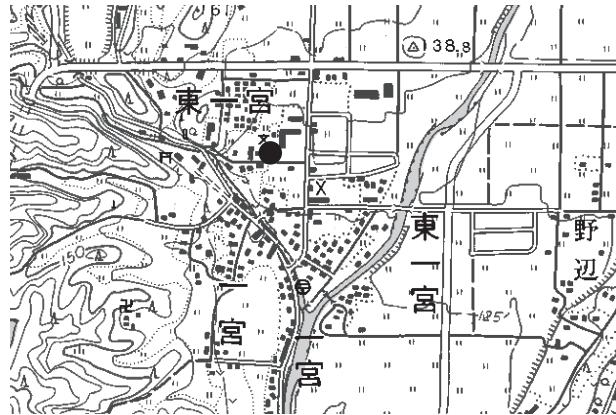
道路部分の西側に設定したトレンチである。重機で表土を取り除いた段階で、人頭大の河原石が数個みられた。その後調査を進めると、耕作土の下から南北方向の溝の遺構が確認された。溝の中に、人頭大あるいはそれよりもやや小さめの河原石がみられた。また、その周辺から、柱穴と思われるピットが数個みつかった。溝は幅 2 m～2.5 m、検出面での深さは最大で 15cm である。埋土は灰色の粘質土及び砂粒で、土師器及び須恵器が出土した。

トレンチ 3

トレンチ 2 から溝が検出されたことを受け、溝の方向を確認するために北側に設定したトレンチである。トレンチ 2 と同様、表土を除去すると、人頭大の河原石がみられ、埋土中から土師器皿、勝間田焼碗のほか、小片が多数出土した。また、溝に平行する形で、木片が一部で確認された。溝の幅は 2 m、検出面での深さは 15cm 程度である。溝以外にも、柱穴と考えられるピットが数個確認された。

トレンチ 4

トレンチ 2 の東側で南北方向に設定したトレンチで、トレンチ 2 で確認された溝以外に、遺構の広がりを確認するために設定したが、遺構・遺物は全く検出されなかった。



第 1 図 調査位置図 (S = 1 : 15,000)

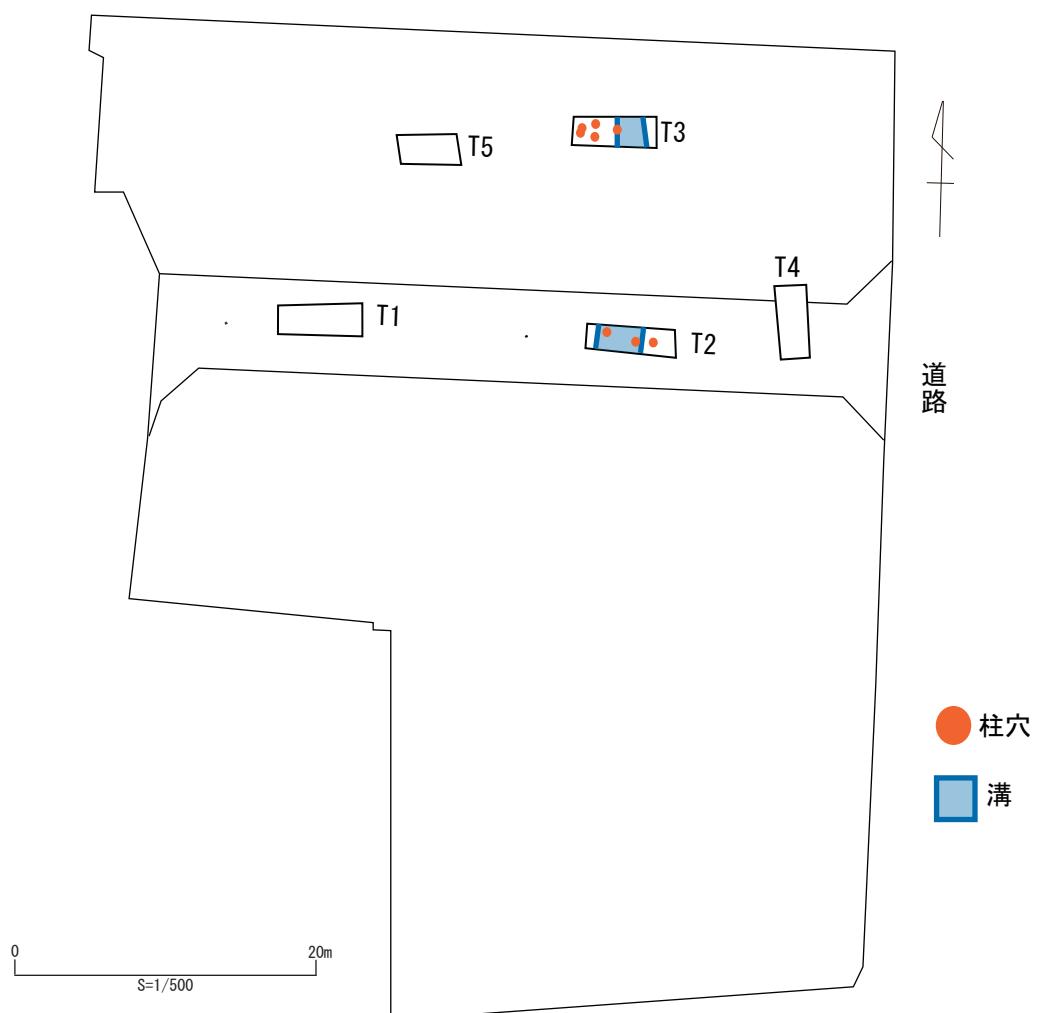
トレンチ 5

トレンチ 3 で複数の遺構が発見されたため、西側への遺構の広がりを確認するために設定した。耕作土の下は黄褐色粘土であり、遺構・遺物ともに発見されなかった。

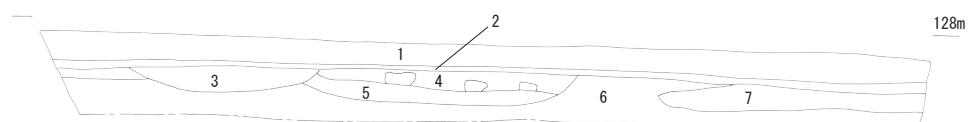
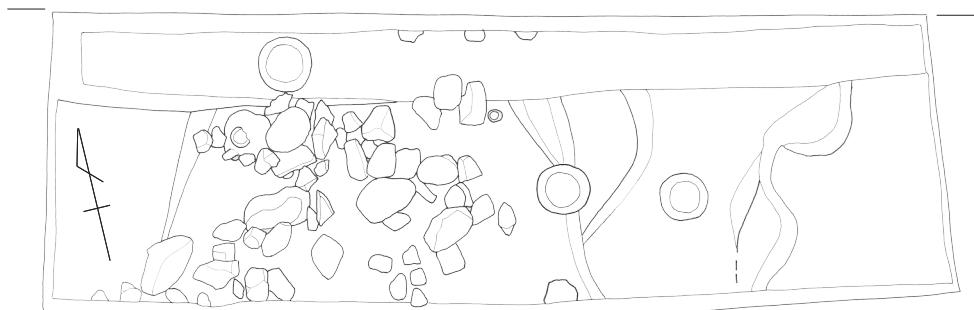
e まとめ

確認調査では、5箇所で設定したトレンチのうち、2箇所で遺構が確認された。遺構は、南北方向にのびる溝で、出土遺物から、中世のものであると考えられる。溝以外にも、柱穴等が確認されたことから、中世の集落が存在していたと推測されるが、部分的な調査であるため、全体の内容は不明である。

(豊島)



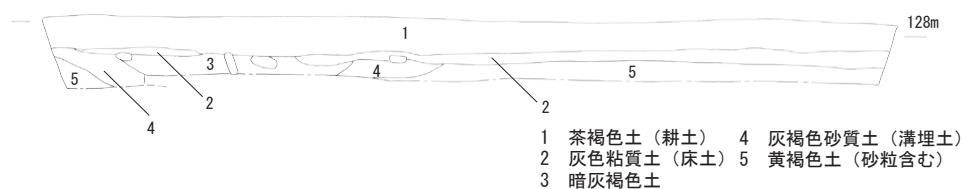
第2図 トレンチ配置図 ($S = 1 : 500$)



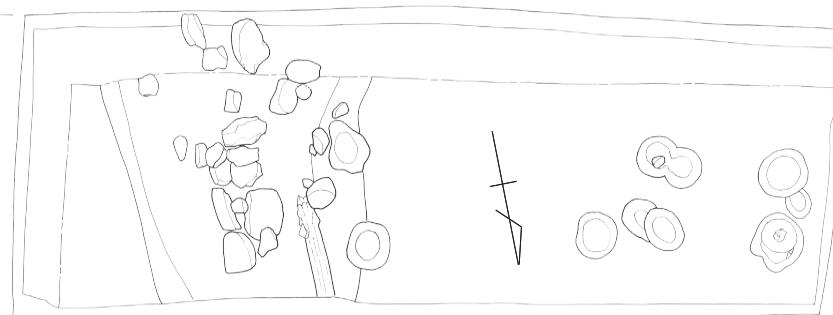
- | | |
|--------------|--------------|
| 1 茶褐色土（耕土） | 5 灰色砂質土（溝埋土） |
| 2 黄橙色土（床土） | 6 黄茶褐色土 |
| 3 暗灰褐色土 | 7 淡灰褐色細粒土 |
| 4 灰色粘質土（溝埋土） | |

0 2m
S=1/50

第3図 トレンチ2平面・断面図 ($S = 1:50$)



- | | |
|-------------|---------------|
| 1 茶褐色土（耕土） | 4 灰褐色砂質土（溝埋土） |
| 2 灰色粘質土（床土） | 5 黄褐色土（砂粒含む） |
| 3 暗灰褐色土 | |



0 2m
S=1/50

第4図 トレンチ3平面・断面図 ($S = 1:50$)

写真図版 10 H30 東一宮天王遺跡（東一宮 1110－1）



トレンチ2（西から）



トレンチ3（東から）



出土遺物

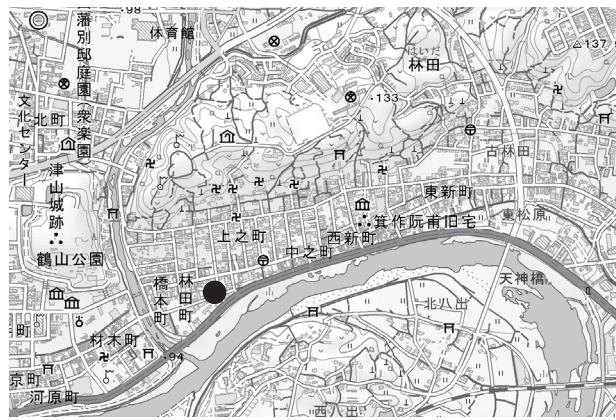
第2節 令和元年度試掘・確認調査

1. 市指定史跡苅田家住宅及び酒造場 確認調査

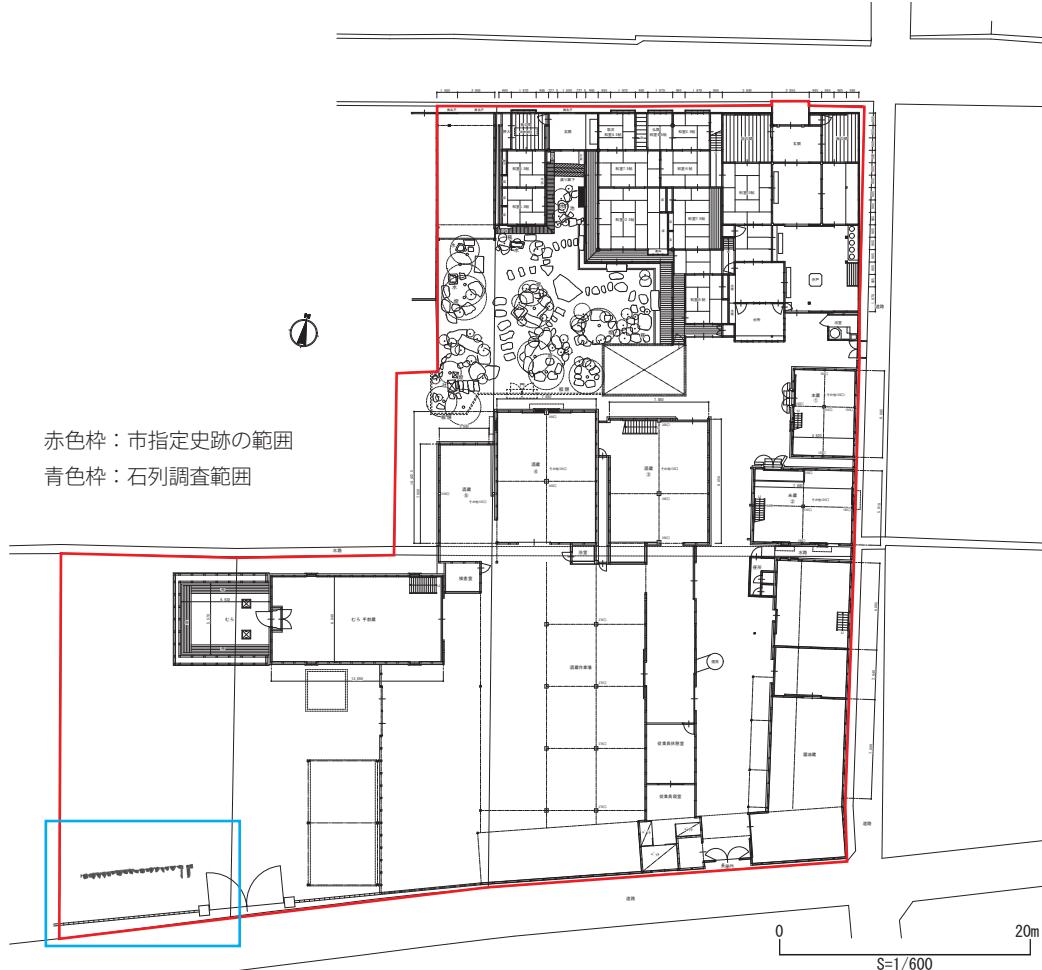
- a 調査地 津山市勝間田町 17 番地他
- b 調査期間 平成 31 年 4 月 23 日～
平成 31 年 4 月 26 日
- c 調査面積 8.5 m²
- d 調査の概要

(経緯と経過)

津山市指定史跡である苅田家住宅及び酒造場の範囲内で、防火水槽の設置が計画された。それに伴い平成 30 年 12 月 26 日付けで、津山市長より津山市指定文化財現状変更許可申請書の提出があり、教育委員会の許可後工事が実施された。本工事施工中に施工業者から、石列を発見したとの報告があり、教育委員会職員が現地確認を行い、その対応について担当課である歴史まちづくり推進室と協議を行った。



第1図 調査位置図 (S = 1 : 25,000)



第2図 市指定史跡苅田家住宅及び酒造場における石列位置図 (S = 1 : 600)

その結果、本石列部分については、工事の影響は及ばないが、工事後は地中に埋没してしまうため、その検出状況について記録を取ることとした。

調査は、確認された石列周辺を人力にて検出し、図面の作成を行った。

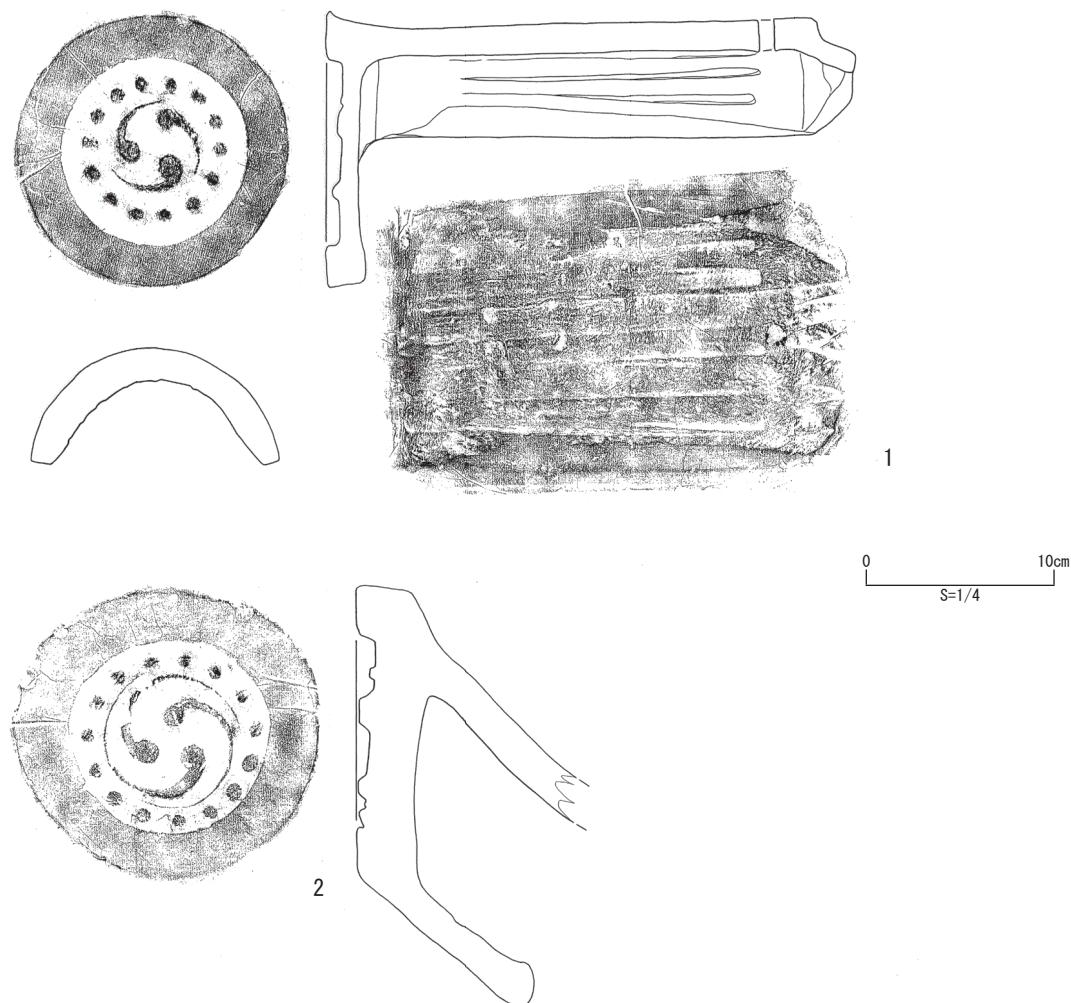
(調査概要)

今回の調査で確認を行った石列は、東西方向に伸び、延長 16.2m、高さは基底部から約 1.15 m を測る。ただし、石列西端については、ブロック塀に近接しており、その設置に伴う掘削により石列が滅失したのか、判然としない。石列基底部は水平になるよう掘削を行っていたが、石列西側においては、扁平な石を用いて水平を確保している。石は 2 石が積まれ、石列東端は南側に折り返し、その外面は丁寧に調整されている。裏込めは用いていない。本遺構周辺において、近世の瓦を検出したが、遺構に伴うものではなく、後世に不要となった瓦を廃棄したものと考えられる。

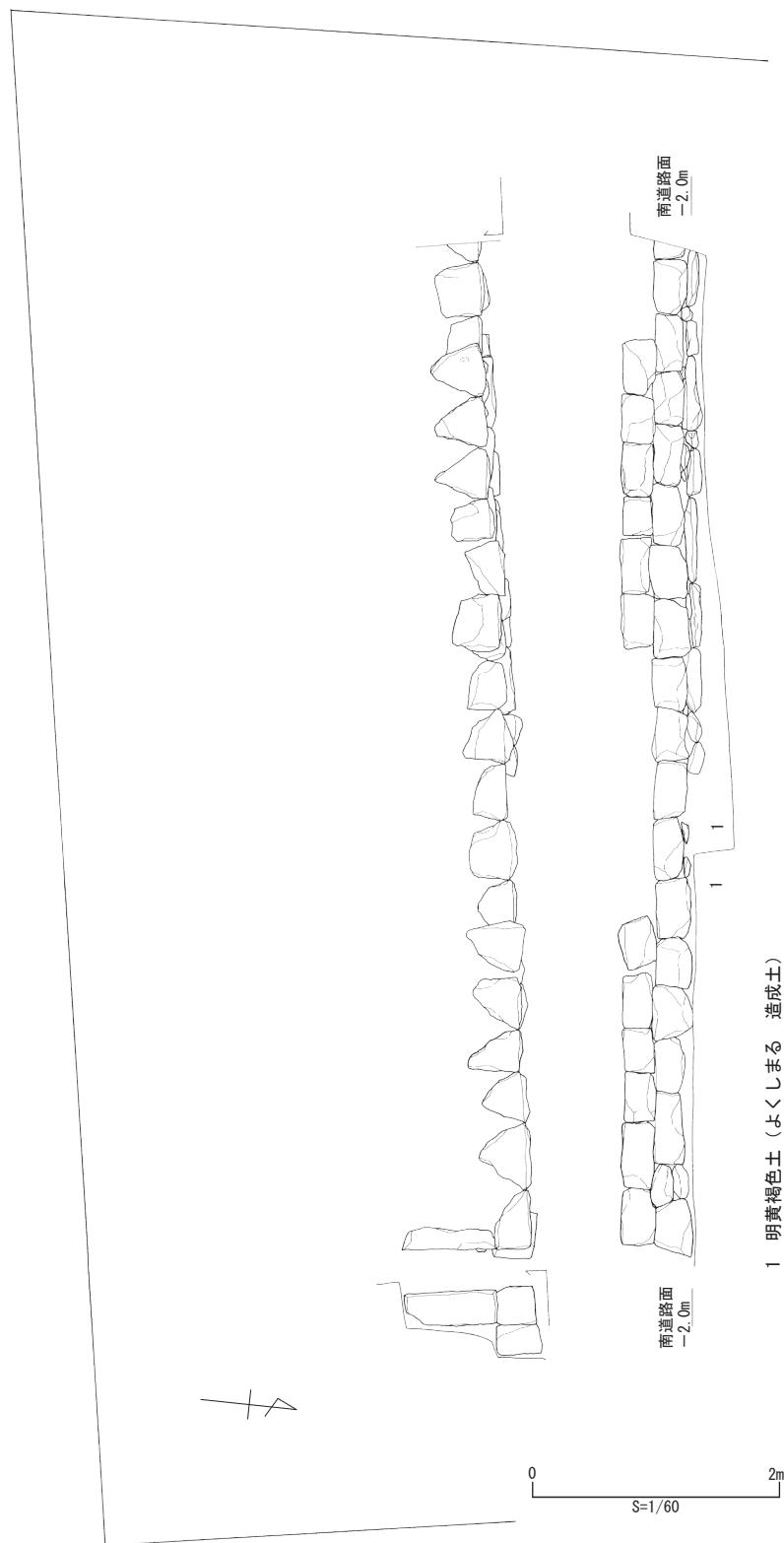
e まとめ

本遺構は、現在施設南側に隣接する道路とほぼ平行に伸びており、当地東側に現在も残る長屋門との関連性が考えられ、同様の機能を持った建造物の基礎ではないかと考えられる。時代については、それを明らかにする遺物が確認されていないため判然としないが、石の加工の状況から近代に属するものではないか。

(平井)



第3図 出土遺物 (S = 1: 4)



第4図 石列 ($S = 1 : 60$)

写真図版 1 R1 市指定史跡苅田家住宅及び酒造場



石列（南から）



石列（北東から）



石列東側隅部（東から）



作業風景



軒丸瓦（1）



鳥伏間瓦（2）

2. 沼京免遺跡（沼9-7他）確認調査

- a 調査地 津山市沼9-7、9-9
- b 調査期間 平成31年4月17日～
令和元年5月7日
- c 調査面積 36 m²
- d 調査概要
(経緯と経過)

調査地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である沼京免遺跡に該当する。隣接する道路部分で、1977年から1979年にかけて、区画整理に伴い発掘調査が実施されており、大規模な弥生時代集落であったことが判明している。

今回の調査は、調査が行われた道路の西側隣接地の宅地造成に伴うもので、造成予定地内において表土のすき取りを行うため、遺跡の有無、及び遺構の深度等についての確認調査を実施した。

(調査の概要)

調査区は、造成工事を行う部分のうち、道路予定地について、2箇所（トレンチ1、2）に設定し、南側に1箇所（トレンチ3）を設定した。

トレンチ1

道路部分の東側に設定したトレンチである。耕作土（15cm～25cm）の下は黄灰色の粘土（地山）である。遺構は、調査区の東半部で、井戸、溝、及び柱穴が確認された。井戸は、河原石を積み上げたもので、廃棄の際に人頭大の河原石で埋められていた。遺物は見られなかったが、積み方から、近世の井戸と推測される。また、その東側で、柱穴2個、及び浅い溝がみつかった。これらは、弥生時代のものと考えられる。柱穴の1つから、弥生土器の小片が出土した。

トレンチ2

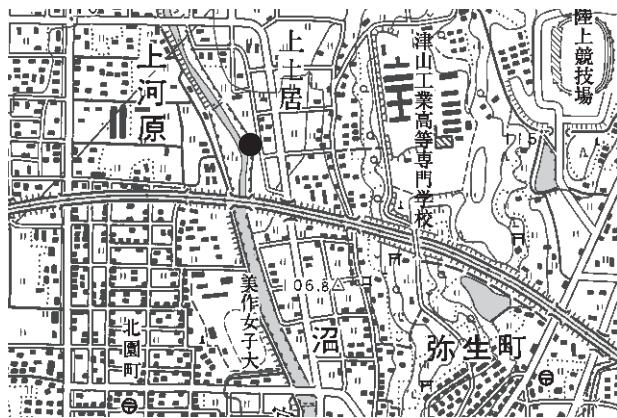
道路部分の西側に設定したトレンチである。耕作土（20cm）を除去すると、直下で地山が確認された。遺構・遺物は確認されなかった。

トレンチ3

造成予定地の南端に設定したトレンチである。トレンチ1、2と比べ、耕作土が50cm以上みられ、その下で黄灰色の地山が確認された。調査区の西側で部分的に落ち込んでいる箇所がみられたが、耕作によるものと考えられる。耕作土中から弥生土器片が数点確認されたが、遺構は確認されなかった。

e まとめ

確認調査では、トレンチ1で近世のものと考えられる井戸、及び弥生時代の柱穴、溝を確認した。川に近いトレンチ2では遺構は確認されなかったため、遺構は東側に存在すると推測される。南側のトレンチ3は、かつての発掘調査から、本来は遺跡が存在していたところと推測されるが現地表面から50cm下で地山が確認されたことから、既に削平を受けていると考えられる。



第1図 調査位置図 (S = 1:20,000)

(豊島)

3. 沼京免遺跡（沼 10 – 13）確認調査

- a 調査地 津山市沼 10 番 13
- b 調査期間 令和元年 9 月 20 日～
令和元年 9 月 25 日
- c 調査面積 20 m²
- d 調査概要
(経緯と経過)

調査地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である沼京免遺跡に該当する。隣接する道路部分で、1977 年から 1979 年にかけて、区画整理に伴い発掘調査が実施されており、大規模な弥生時代集落であったことが判明している。

今回の調査は、以前に調査が行われた道路の東側に隣接地する水田の宅地造成に伴うもので、造成予定地内において表土のすき取りを行うため、遺跡の有無、及び遺構の深度等についての確認調査を実施した。

(調査の概要)

調査区は、造成工事を行う部分について 1 箇所に調査区を設定した。

道路部分に近い箇所において調査区を設定した。耕作土（約 20cm）の下に黒褐色土、淡褐色土が堆積し、その下は黄褐色の地山である。

地山近くまで掘削を進めたところ、柱穴と考えられる遺構が 4 個、溝が 1 条検出された。柱穴は検出面から深さ 20 ~ 30cm、溝は検出面から 10cm 程度であった。

いずれの遺構からも遺物は出土していないが、耕作土及び黒褐色土層から、数点の弥生土器片と考えられる小片が出土した。

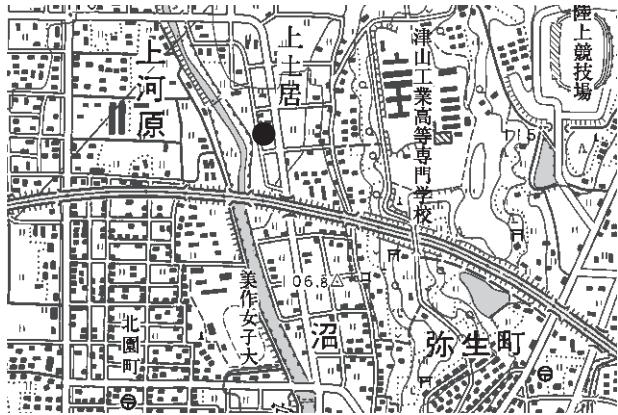
なお、本調査区のすき取りに伴う工事立会の際に、弥生時代後期の土器片が出土した。ともに甕の口縁部である。

e まとめ

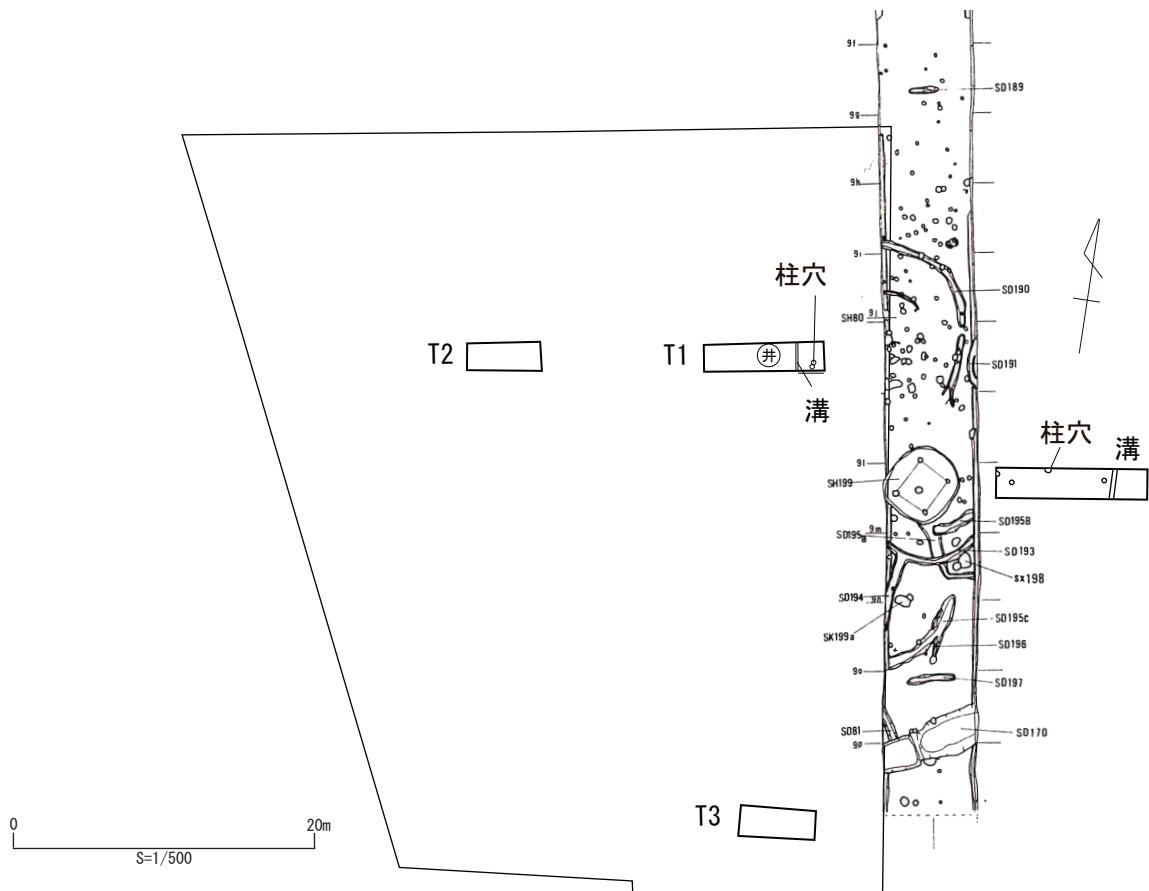
今回の確認調査では、柱穴、溝を確認した。周辺の発掘調査成果等から、これらの遺構は弥生時代に属するものと考えられる。

これらの遺構は、現地表面から 40cm 下で確認された。溝や柱穴が浅いことから、遺構の上層は既に削平を受けていることが推測される。

(豊島)



第 1 図 調査位置図 (S = 1 : 20,000)



写真図版2 R1 沼京免遺跡
(沼9-7 他・沼10-13)



沼9-7他地点 トレンチ1井戸（南から）

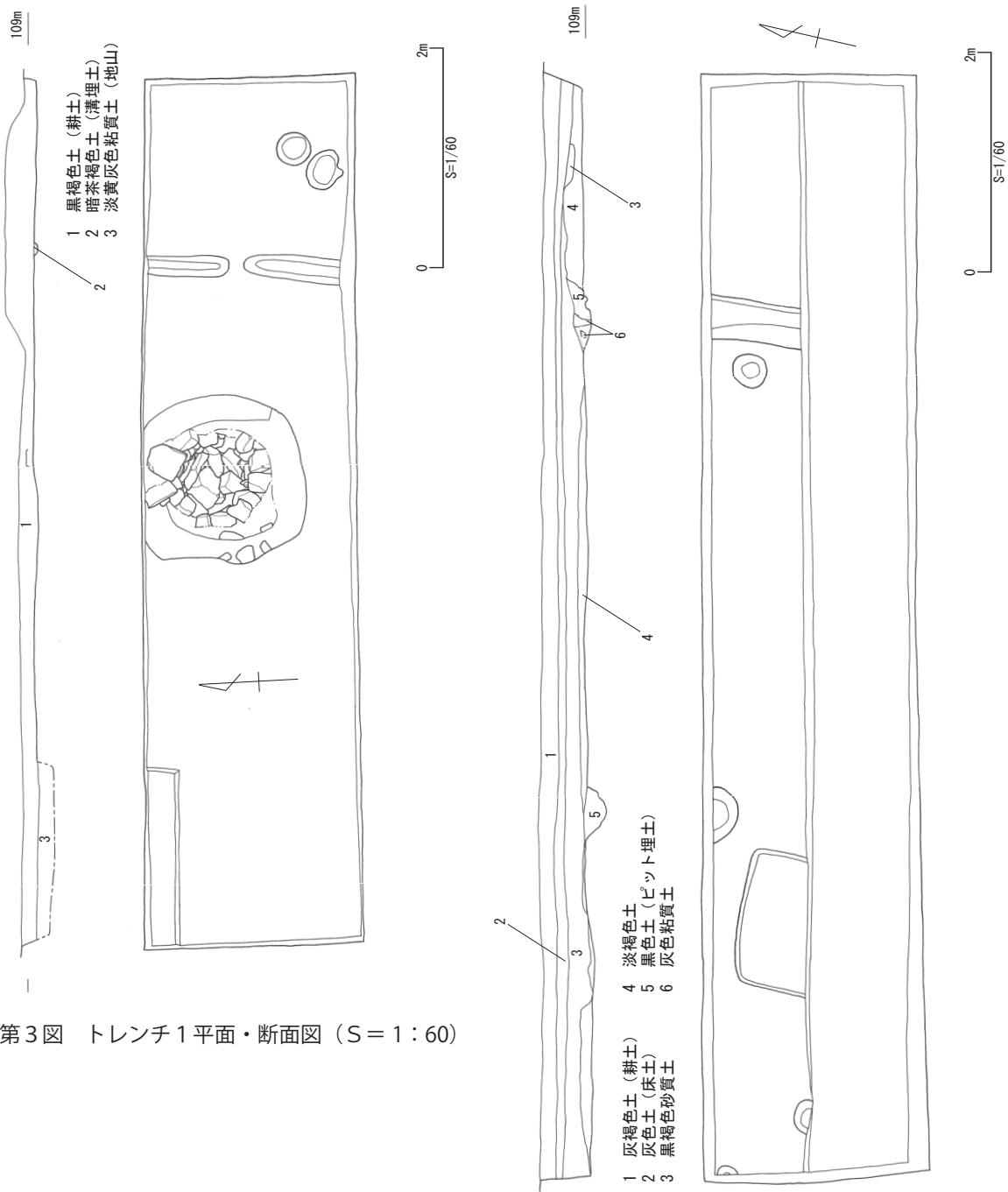


沼9-7他地点 トレンチ1全景（東から）

第2図 沼9-7 9-9 10-13地点 確認調査トレンチ配置図 (S = 1:500)

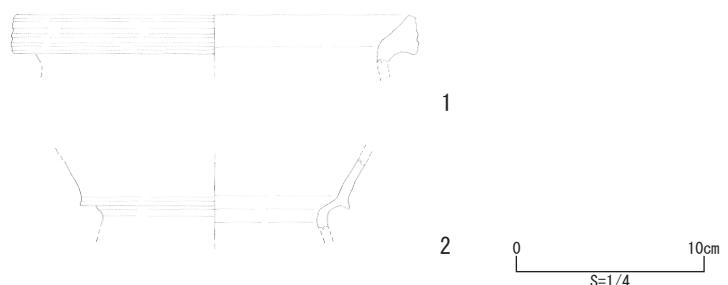


沼 10 – 13 地点 トレンチ全景 (東から)



第3図 トレンチ1平面・断面図 ($S = 1 : 60$)

第4図 沼10-13トレンチ平面・断面図
($S = 1 : 60$)



第5図 出土遺物 ($S = 1 : 4$)

4. 院庄館跡確認調査

- a 調査地 津山市神戸地内
- b 調査期間 令和元年7月24日～
令和元年8月22日
- c 調査面積 41 m²
- d 調査概要
(経緯と経過)

周知の埋蔵文化財包蔵地である院庄館跡の範囲内において、宅地造成等が計画されたため、遺構の有無及び遺構の深度についての確認調査を実施した。

当該地は水田であり、工事内容は耕作土等を除去したのち盛土を行い、住宅地を造成するものである。

調査は、現況で高低差のある2つの水田の南側に2m×10mのトレンチを各1本設定し、重機で表土を除去したのち、人力にて掘削した。なお当該地は、国指定史跡院庄館跡(児島高徳伝説地)の東側に隣接しており、小字名が「堀」であることから、館跡の周囲をめぐる堀の存在が推測された。

(調査の概要)

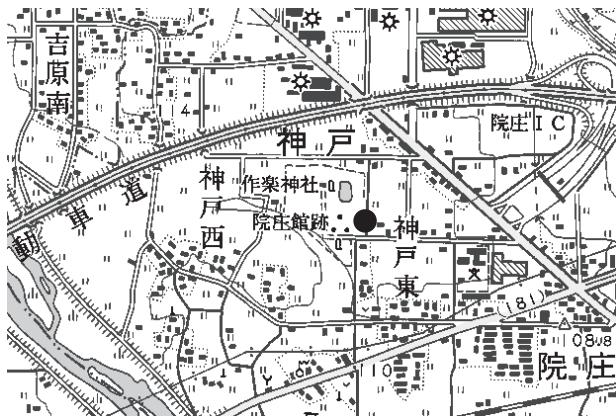
トレンチ1

現在の水田に伴う耕作土等を25cm程度取り除くと、黒褐色土層が現れ、この面で柱穴31基、溝1条、土坑1基が確認された。遺構の埋土は全て灰褐色土であり、柱穴は一部規則性がみられる配置のものもあるが、調査状況からは明確な建物跡と判断できなかった。

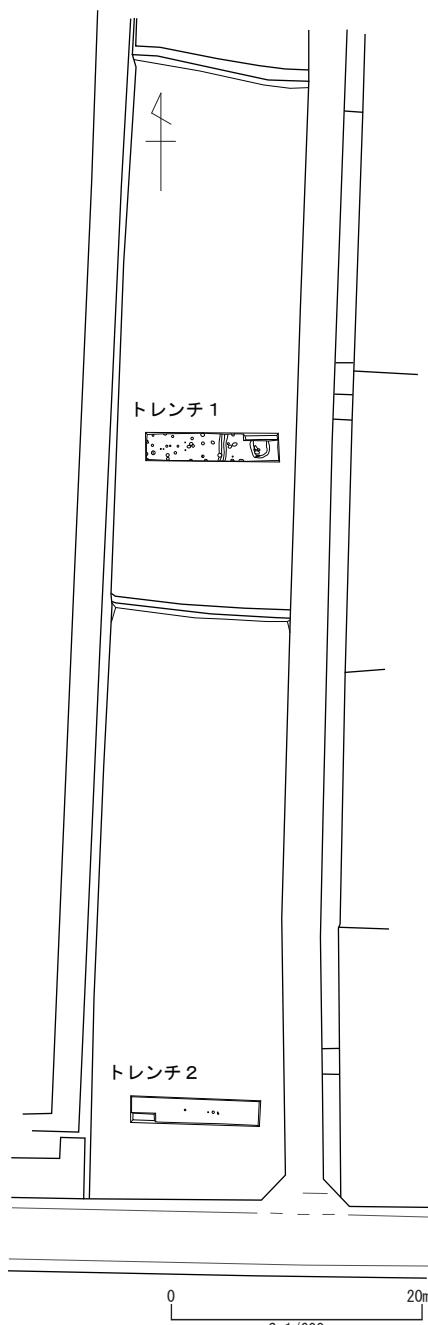
また、検出された溝は非常に浅く、現地表面の高さを比べると、トレンチ1よりも西側に隣接する史跡指定地の方が高いことから、遺構は後世に削平を受けており、本来の遺構面は検出面よりも高かったことが推測される。

土層確認のため、北東隅を一部掘り下げたが、黒褐色土が30cm～40cmみられ、その下は拳大の礫の混じる明褐色の砂層が確認された。当該地は氾濫原であることから、これより下層には遺構は存在しないと判断した。

遺構に伴う遺物として、土坑1からすり鉢底部(2)と京都でみられる鎌倉期の瓦質羽釜の口縁部(3)が、柱穴28から土師器皿(4)が出土し、この他にすり鉢片(1)や土師器小片、須恵器ないし勝間田焼小片が出土した。いずれも



第1図 調査位置図 ($S = 1 : 7,000$)



第2図 トレンチ配置図 ($S = 1 : 600$)

概ね院庄館跡が機能していた時期と同時期のものと考えられる。

トレンチ 2

現在の水田に伴う層の下に 1 段階古い時期の水田層があり、その下からトレンチ 1 よりやや淡い黒褐色土層が確認された。この面でピットが検出されたが、遺物を伴わないとため、時期は不明である。

黒褐色土の下層を確認するため、南西隅を一部深く掘り下げたが、親指大の礫をまばらに含む名褐色の砂層であったため、これより下には遺構は存在しないと判断した。

出土遺物は、磁器小杯（5）、勝間田焼碗の高台（6）、勝間田焼甕片（7）、等が確認された。一部新しい時期のものがみられるが、概ね調査区 1 と同時期のものと考えられる。

e まとめ

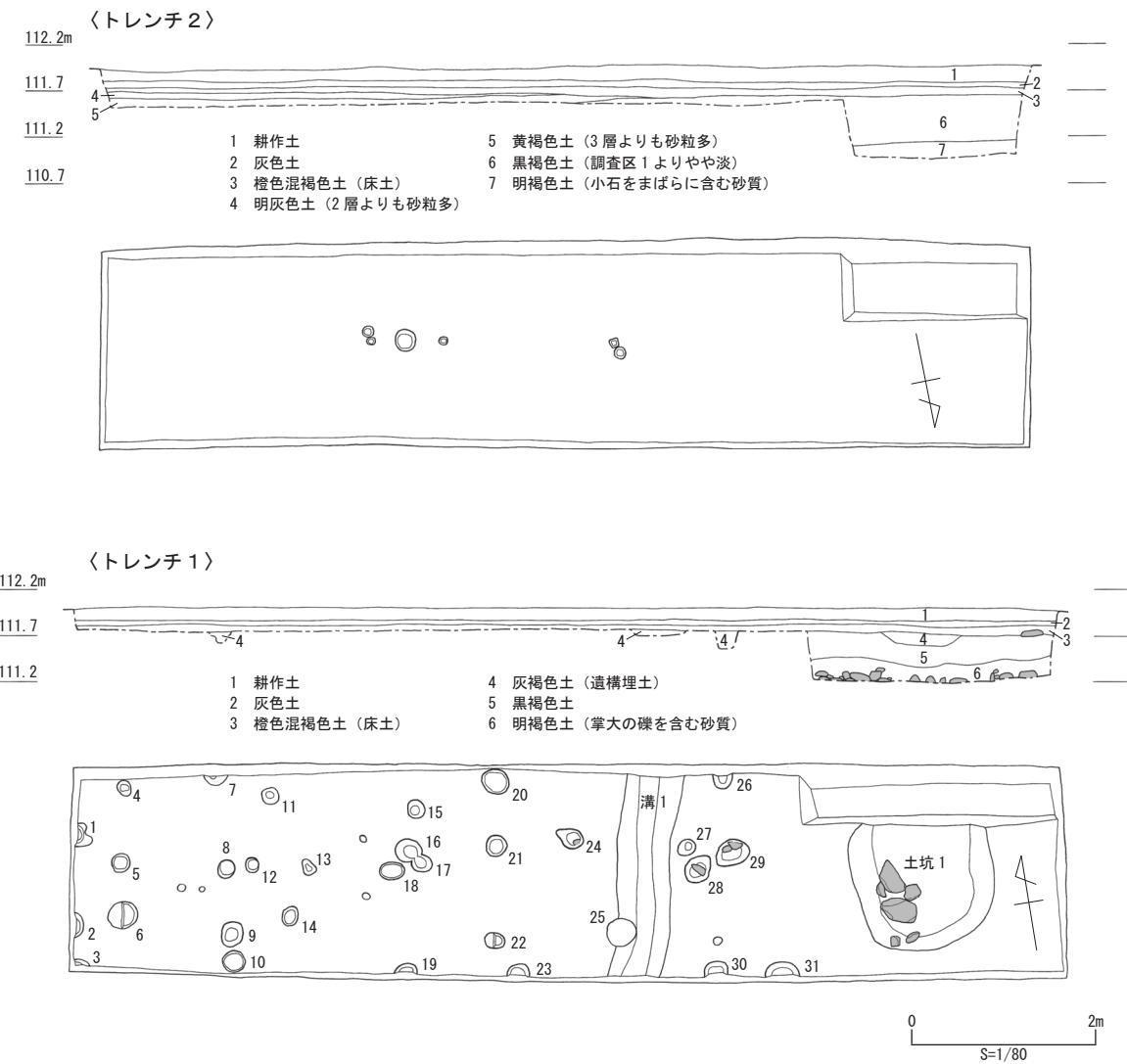
今回の確認調査では、北側に設定したトレンチ 1 で、柱穴や土坑、溝を確認した。出土した遺物から、これらの遺構は 12 世紀末から 13 世紀代のものであることが判明した。

当該地は、史跡院庄館跡（児島高徳伝説地）の東側に隣接しており、小字名が「堀」であることから、館跡の周囲をめぐる堀の遺構が確認される可能性が考えられたが、調査の結果、堀の存在を推測させる遺構は確認されなかったことから、この地が「堀」ではなかったことが判明した。

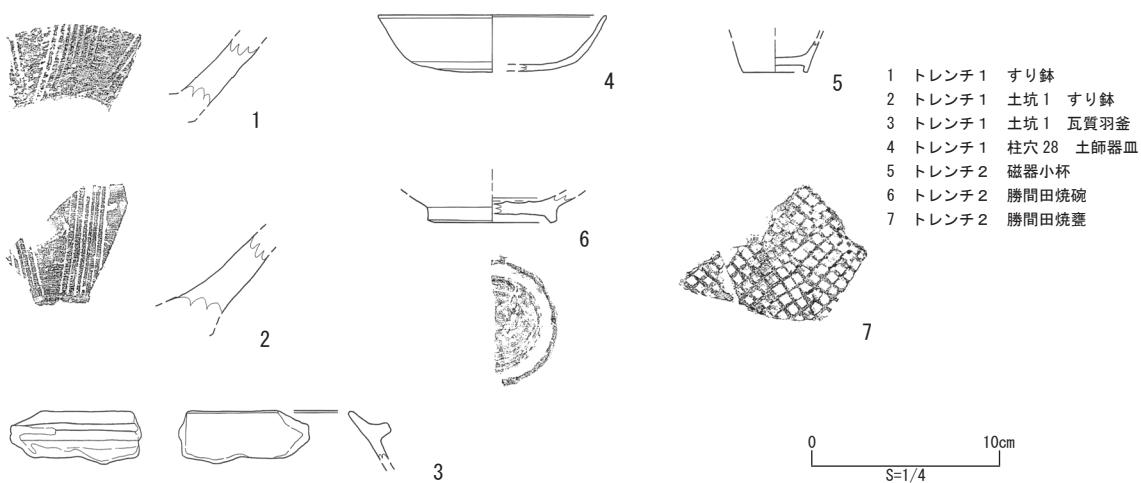
昭和 55 年の調査では、当該地から市道及び水路を隔てた東側に位置する水田の確認調査を実施しており、南北方向の小規模な溝が確認されたが、館跡に伴うものであるか否かについての明確な判断はできていないのが現状である。また、現在史跡指定地内にある土壠や溝は、第 2 次世界大戦末期に掘られたものであるが、これらがもとの「堀」を踏襲している可能性も否定できない。

したがって、今回の調査によって確認された遺構については、時期は院庄館跡が機能していた時期と重なるが、史跡院庄館跡（児島高徳伝説地）との関わりで価値付けを行うことは困難であると思われる。

（宮崎）



第3図 トレンチ平面・断面図 (S = 1 : 80)



第4図 出土遺物 (S = 1 : 4)

写真図版3 R1 院庄館跡



調査前（南東から）



トレンチ1 遺構検出状況（西から）



トレンチ1 全景（西から）



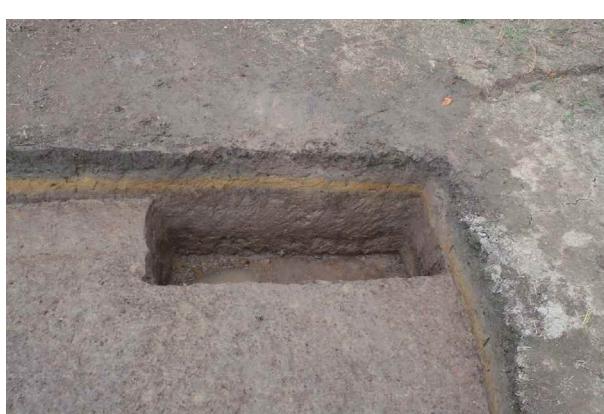
トレンチ1 断ち割り部分の土層（南から）



トレンチ1 調査状況



トレンチ2 全景（西から）



トレンチ2 断ち割り部分の土層（北から）



トレンチ2 作業状況

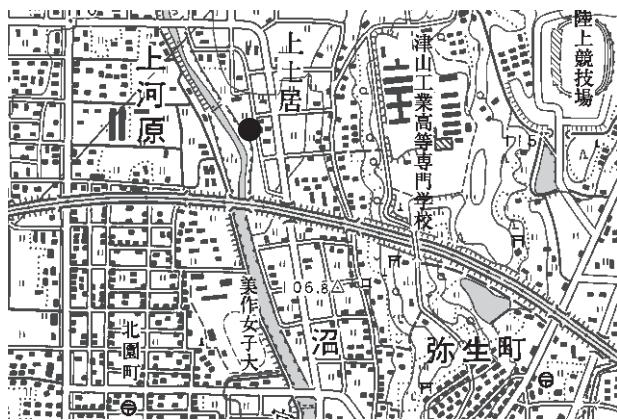
5. 沼京免遺跡（沼9－3他）確認調査

- a 調査地 津山市沼9－3他
- b 調査期間 令和元年11月19日～
令和元年11月28日
- c 調査面積 28 m²
- d 調査概要
(経緯と経過)

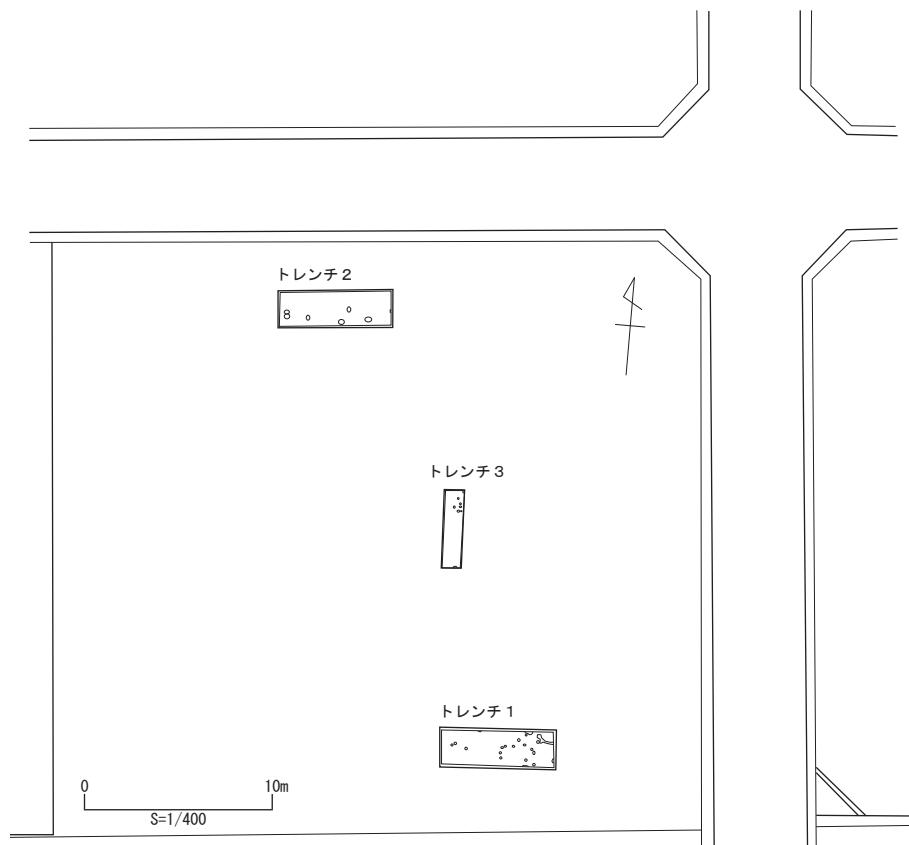
周知の埋蔵文化財包蔵地である沼京免遺跡の範囲内において、宅地造成が計画されたため、遺構の有無及び遺構の深度についての確認調査を実施した。

当該地は、先に報告された、沼京免遺跡（沼9－7他）確認調査地の北に隣接する。現況は水田であり、工事内容は耕作土を除去したのち盛土を行い、住宅地を造成するものである。北及び東に隣接する道路部分で、1977年から1979年にかけて区画整理に伴う発掘調査が実施されており、弥生時代の集落があったことが判明している。

調査は、当該地の南端と北端に2m×6mのトレンチを各1本、中央に1m×4mのトレンチを1本設定し、人力にて掘削した。



第1図 調査位置図 (S = 1:20,000)



第2図 調査区配置図 (S = 1:400)

(調査の概要)

トレンチ 1

現在の水田に伴う層とその下の 1 段階古い水田に伴う層を取り除くと、弥生土器と推測される土器小片を含む黒褐色土層が確認された。その下には黄褐色の地山があり、この面で溝 1 条と小ピット 24 個が検出された。いずれの遺構も検出面からの深さは 5 ~ 10cm 程度で、埋土は明黒褐色土もしくは黒色土であり、遺物は検出されなかった。

出土遺物は、黒褐色土層中から器台の口縁部（1）等弥生土器小片が出土した。

トレンチ 2

現在の水田に伴う層を除去すると、トレンチ 1 同様黒褐色土層が検出された。この面では遺構の検出が困難であったため、その下の黄褐色の地山まで掘り下げたところ、柱穴が 7 個検出された。検出面からの深さはいずれも 10cm 程度である。埋土からは、柱穴 2 から弥生時代前期の甕片が、柱穴 4 と 5 から中世とみられる土師器皿が出土した。柱穴 4 の土師器小皿は、柱穴底からの出土である。

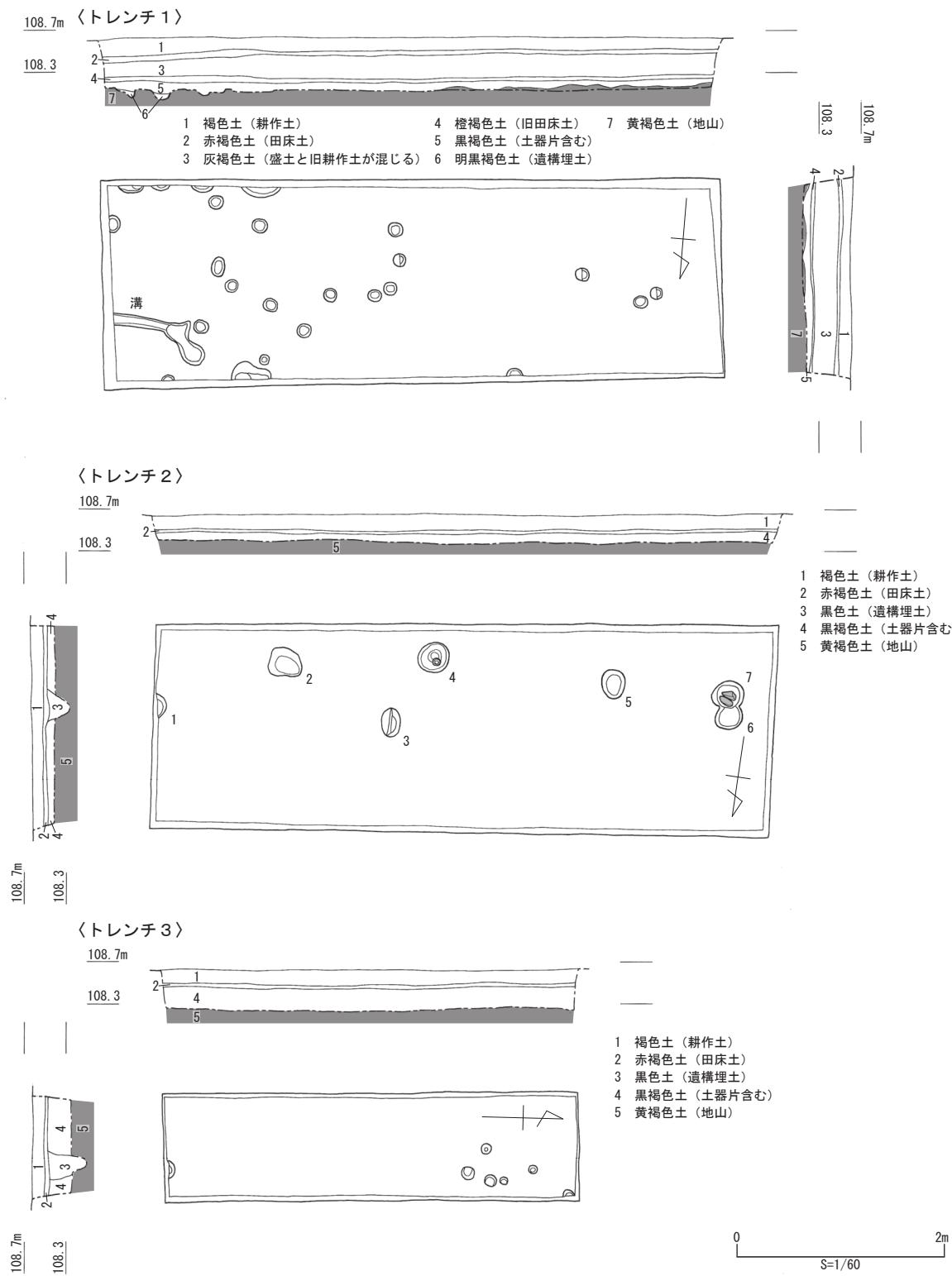
トレンチ 3

トレンチ 2 同様の土層の堆積状況で、黒褐色土層の面では遺構の検出が困難であったため、黄褐色の地山まで掘り下げたところ、小ピットが 6 個、柱穴が 1 個検出された。いずれの遺構も検出面からの深さは 5 ~ 10cm 程度、遺物は検出されなかった。

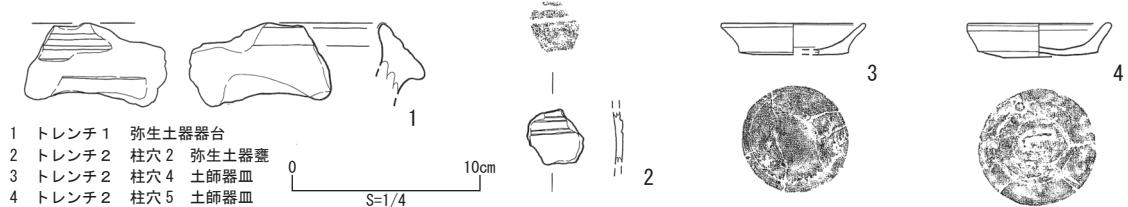
e まとめ

今回の調査では、柱穴、溝、小ピットを確認した。周辺の発掘調査の成果や、トレンチ 2 の出土遺物から、トレンチ 2 の柱穴は中世、他の遺構は弥生時代もしくは中世に属するものと考えられる。遺構の深度が浅いことから、遺構の上層は既に削平を受けていることが推定される。

(宮崎)



第3図 トレンチ平面・断面図 ($S = 1 : 60$)



第4図 出土遺物 ($S = 1 : 4$)

写真図版4 R1 沼京免遺跡（沼9－3 他）



調査前（南東から）



トレンチ1 遺構検出状況（東から）



トレンチ1 全景（西から）



トレンチ2 遺構検出状況（西から）



トレンチ2 柱穴4 遺物出土状況（南から）



トレンチ2 全景（北から）



トレンチ3 遺構検出状況（左が北）



トレンチ3 全景（左が北）

第3節 桑山南4号墳発掘調査

例　　言

- 1 本節は、民間駐車場造成工事に伴う桑山南4号墳の発掘調査報告である。
- 1 桑山南4号墳は、津山市高尾1584-1地内に所在する。
- 1 調査期間は、令和2年3月16日から5月9日までで、令和元年度事業分については国庫補助事業として実施している。調査主体は津市教育委員会（平成31年4月1日付けで産業文化部に組織改編）文化課（津山弥生の里文化財センター）で、小郷利幸（2.3.31まで）、仁木康治（2.4.1から）が担当した。発掘作業は津山市埋蔵文化財発掘作業員 森泰三、安東芳克、山本昌章、梶並郁江、片岡計介が従事した。
- 1 出土遺物の整理は令和2年度に行い、調査報告書の執筆は令和3年度に文化財センター職員仁木及び三輪 望が担当した。執筆分担は1～4が仁木、5及び6が三輪である。また、図化及び出土品整理については文化財センター会計年度任用職員春名博美・宗本節子・皆木沙織・梅本智子の助力を得た。
- 1 調査にあたっては次の方々から多くの助言・教示を得た。ここに記して感謝の意を述べる。岡山県古代吉備文化財センター、尾上元規、澤山孝之、亀山行雄、河本清、澤田秀実、野崎貴博（順不同、敬称略）
- 1 出土遺物及び図面等は津山弥生の里文化財センターに保管している。

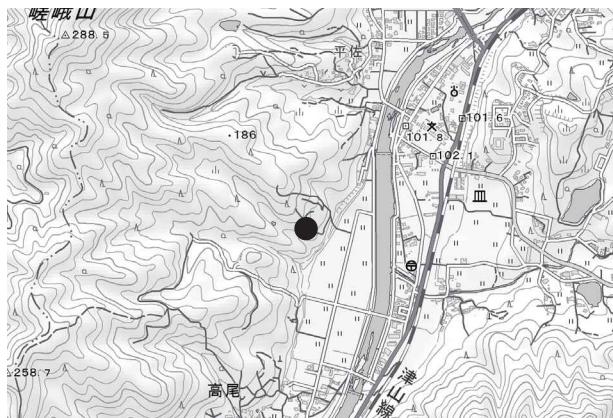
1. 調査の経緯と経過

桑山南4号墳は、津山市高尾1584-1地内に所在する。津山市佐良山地域(津山市高尾・皿・平福・福田地内)には、吉井川支流の皿川に沿って狭小な平野が広がり、両岸の山麓から尾根、さらに谷部にかけて多数の小規模群集墳が所在する。これらは、こんにち佐良山古墳群と総称されるが、戦後の群集墳研究の出発点となった、「佐良山古墳群の研究」(近藤義郎編 1952)に因む。考古学史的に著名な地域であり、地域住民の意識も高い。

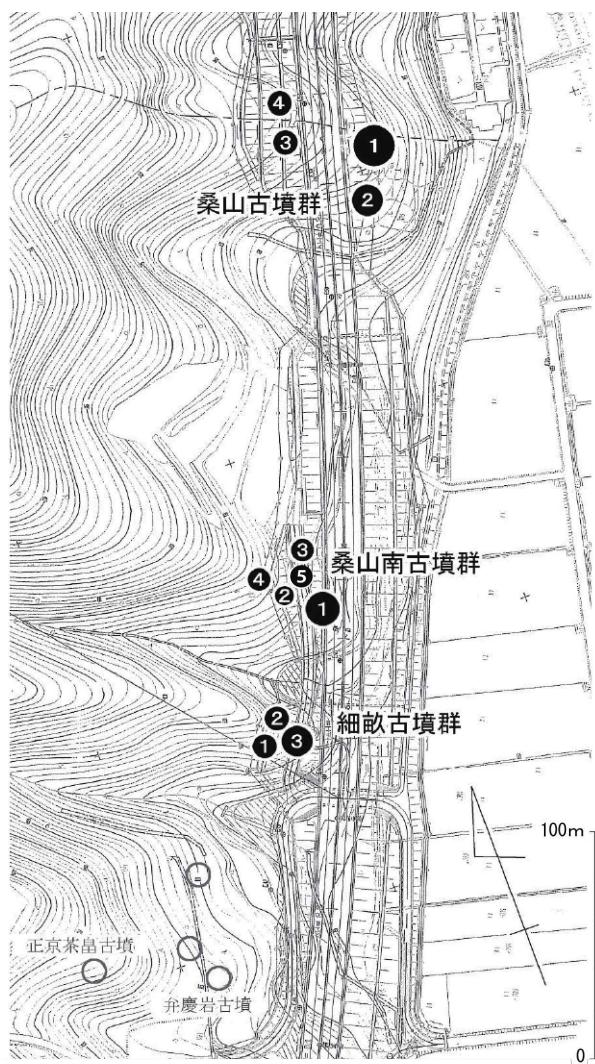
平成29年度から一般国道53号線(津山南道路)改築工事に伴い、岡山県教育委員会によって道路予定地の埋蔵文化財の発掘調査が着手されたが、桑山南4号墳は協議対象になったものの、平成30年に実施された墳裾部の一部調査(註1)を除き、現状保存が予定されていた。

ところが、隣接するグラウンドゴルフ場への進入路や駐車場の造成のため、古墳の調査依頼がグラウンドゴルフ場の管理団体から津山市に強く要望された。追って令和2年2月18日付で文化財保護法第93条に規定する発掘届の提出を受け、国庫補助事業として緊急調査を実施することになった。

発掘調査は、津市教育委員会文化課(令和2年4月から産業文化部文化課に再編され市長部局に異動)を調査主体として、令和2年3月16日に着手した。3月27日にはほぼ発掘作業が終了したが、調査担当者の異動に伴い一時中断、引継ぎ後の4月11日から再開した。4月以降の調査については、当初の調査予定期間を超過していたことと、出土遺物がやや多量であったことから石室内の補足調査と実測作業を集中的に行い、5月9日にすべての作業を終了した。また、調査終了後であったが簡易な見学会を7月11日に実施している。



第1図 調査位置図 (S = 1 : 25,000)



第2図 桑山南古墳群位置図

「桑山古墳群」現地説明会資料(岡山県古代吉備文化財センター)から転載・一部改変

本墳については、原因者と協議のうえ、石室については埋土保存することで合意し、市文化課職員の立会のうえ埋め戻しを行った。また、周辺の遺跡の調査状況から、造成に伴う掘削作業の際にも立会い、あらたな遺構・遺物等の確認に努めたが、新規の発見は皆無であった。

なお、4月以降の調査については、調査期間の短縮及び担当者が約2年間別部署にいた関係もあり、文化財センター職員諸氏から多大な助力を得た。改めてここに御礼申し上げる。

2. 古墳群の概要

桑山南古墳群は皿川左岸の尾根南側斜面に所在し、5基の古墳で構成される。築造時期としては6世紀中葉から7世紀前半に及ぶ。古墳群に隣接する北の尾根上には桑山古墳群、南の尾根上には細畠古墳群があり、いずれも皿川に臨む尾根ごとにまとまったあり方を示す。

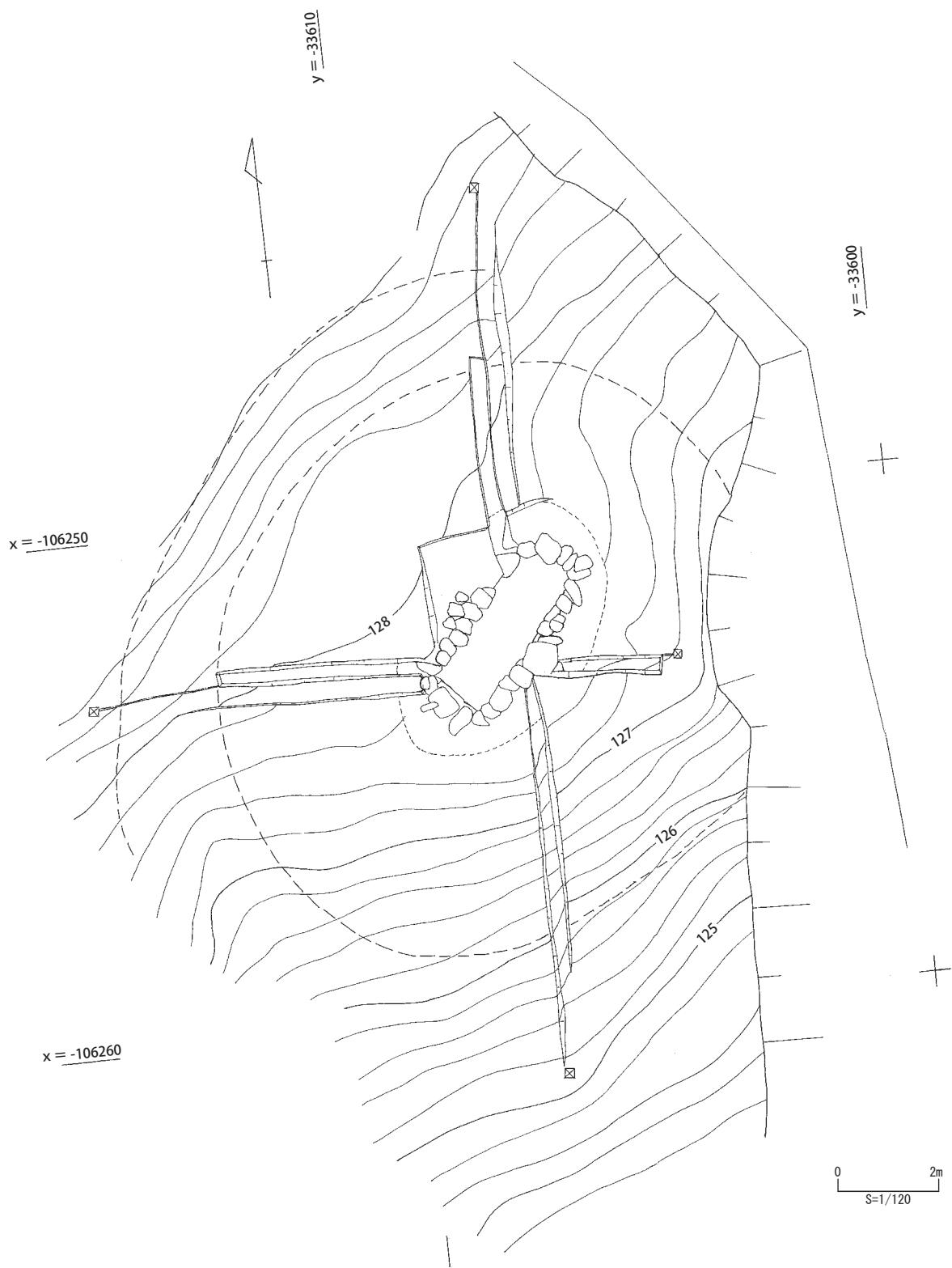
桑山南1号墳は、陶棺2基を内蔵する径15mの横穴式石室を内部主体とする古墳で、出土品のうち、大刀は美作地域では6例目となる銀象嵌が施されたものであることが明らかになった（註2）。2号墳は1号墳の北西にある径9m、高さ約2.5mの円墳で小型の竪穴式石室を有し、鉄鏃・刀子・鉄鐸などが発掘調査により出土している。3号墳は径10m、高さ4mの横穴式石室を有する円墳で、陶棺2基を内蔵する。古墳群のなかでは北端に位置する5号墳は、3号墳の南に近接する径9m、高さ2mの竪穴式石室を内部主体とする古墳である。石室内には人骨が残存していた。さらに古墳群の南に近接して古墳時代後期の箱式石棺群・土坑墓群が、やや離れて中世の土坑墓群が確認されている。

なお、4号墳を除いた4基の古墳および箱式石棺群・土坑墓群は、一般国道53号（津山南道路）改築工事に伴い、岡山県古代吉備文化財センターによって平成29年度から令和元年度にかけて発掘調査が実施された（註1）。

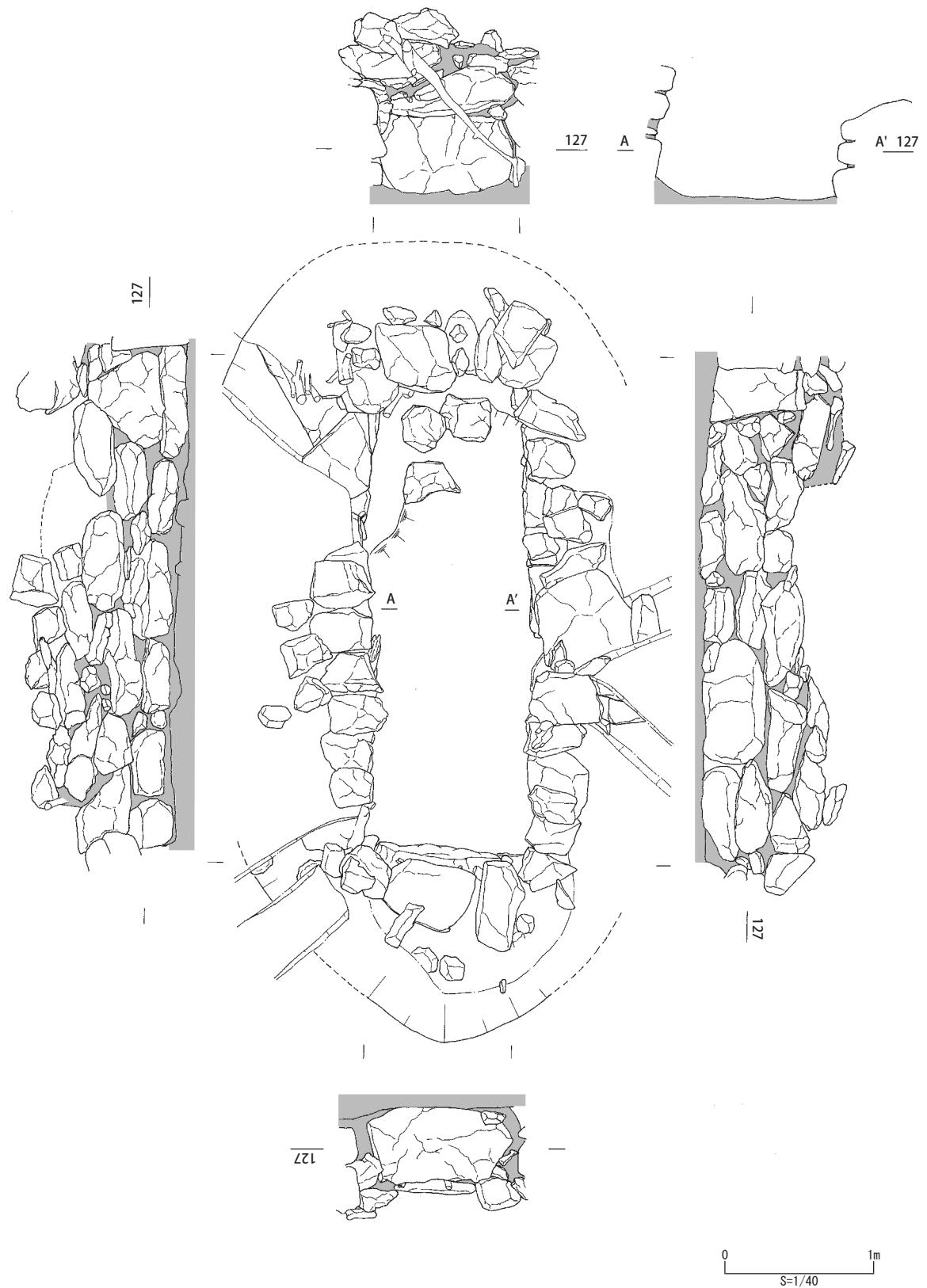
3. 墳丘と周溝（第3図）

桑山南4号墳は、2号墳の北西方向、古墳群の中では最高位に位置する。墳丘は、墳頂部が大きく削平されテラス状となっていたほか、南東から南にかけての墳端は地山に連続するものの比較的明瞭であるのに対し、西から北にかけては周溝との関係も含めて不明瞭である。墳丘盛土と地山および石室掘り方の関係の把握のため、南北方向・東西方向にそれぞれ直交する形でトレンチを設定し、検討しつつ調査にあたった。本稿ではそれぞれ南北トレンチ・東西トレンチと呼称する。

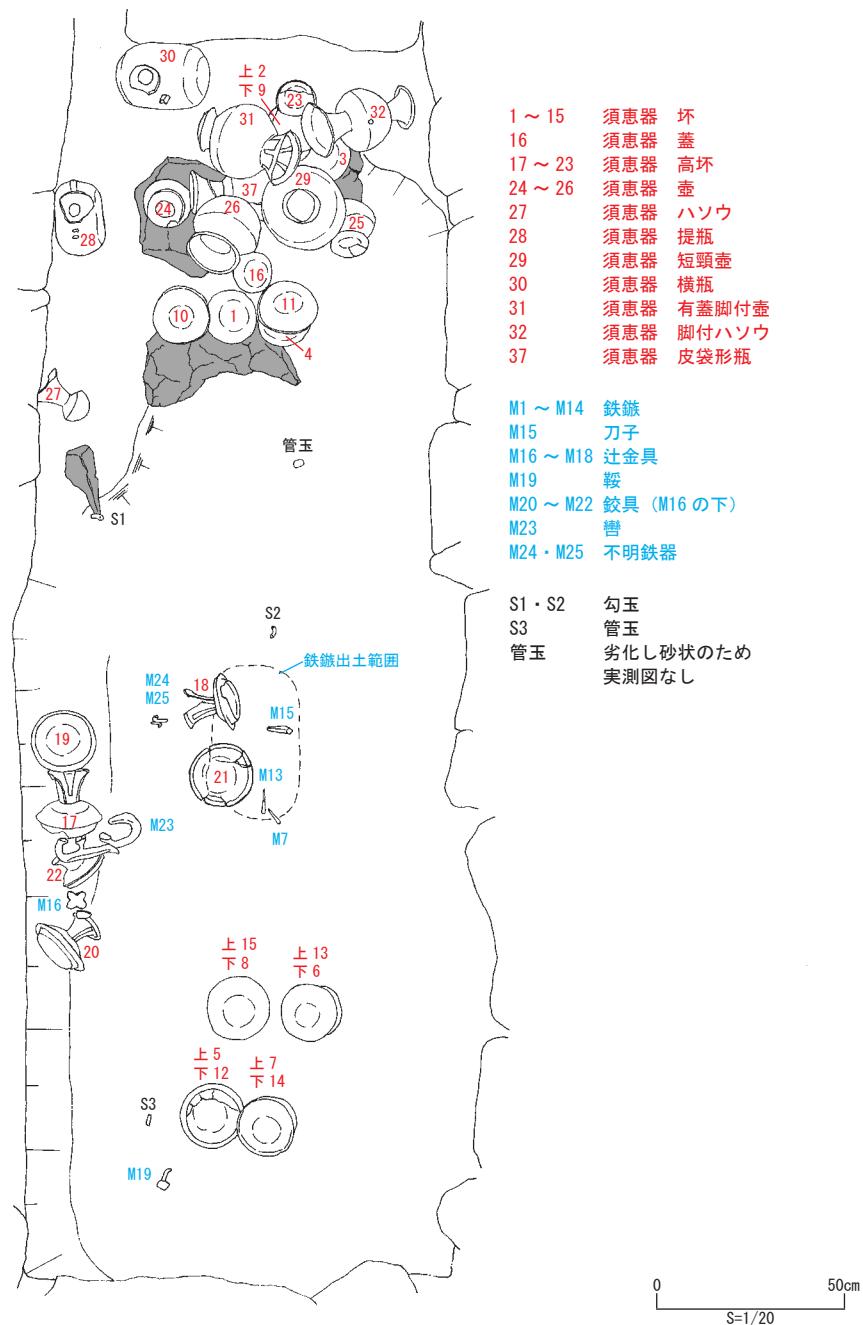
周溝は、尾根の高位（山側）である北西側から西側について地形的に僅かな凹部が認められたことからその存在が想定されたが、トレンチ土層では明確に認めることができなかった。後述するが、石室床面の状況と照らし合わせると、北西側の部分の尾根をカットして南東側に土を盛る形で墳丘の築成が行われたものと判断される。本墳の墳丘は径約10mの円墳に復元される。墳丘高については現状で約1.4mであるが、墳頂部が削平されていることから不明である。墳丘盛土は0.6m程度が残存するとみられる。葺石や埴輪などの外表施設はない。



第3図 墳丘及び南北トレンチ断面図 ($S = 1 : 120$)



第4図 石室平面・断面図 ($S = 1 : 40$)



第5図 石室内遺物出土状況図 (S = 1 : 20)

4. 石室と出土遺物の状況 (第4図・第5図)

4号墳の主体部は、墳頂部に築かれた竪穴式石室1基で、北壁から南壁に向かって石室幅は僅かに拡がる。主軸は北から43°東に偏し、ほぼ等高線に倣う。

石材は、津山石と通称される切石状の凝灰岩が使用されている。東西の側壁部分は底部にやや小ぶりもしくは扁平な石材を据え、ある程度石のレベルを合わせたのち、やや大型の石材、そして小型の石材を小口積みに積んでいる。南北壁部分についてはそれぞれ大型の石材を1石据え、その上に比較的小型の石材を積みあげている。南壁と東西壁の上部、および天井石は取り去られて滅失していたが、北壁は

築造時とみられる状態で残存していた。残存高は北壁の内法で約1.2mを測る。ほか、内部の寸法は長さ3.3m、北壁の幅0.9m、南壁の幅1.1m、残存高0.6m、石室中央付近の幅1.2m、残存高0.7～0.9mである。

石室床面は、西側約1/4程度が地山を削り出して造り出され、石室掘り方は盛土の上から掘り込まれている。調査期間の制約から十分な石材の検出はできなかったが、特に石室の西半については、地山の掘り込みを伴いながら築造されたと推定される。また、北壁付近において床面から3個の自然石が検出された。この3個の石のうち、石室中央寄りの1個は検出レベルが他の2個に比べて低く、残る2個は石室床面のレベルに等しい。これらの石は、当初すべてを棺台と判断したが、石材の検出位置およびレベルが異なっている状況から、棺台に加えて、副葬品を供獻するための用途の可能性を指摘できるのではないかと考える。

遺物は石室内の南東部分を除くほぼ全域から出土した。大別すると、北壁付近の多量の須恵器の1群、西壁に沿う1群、石室中央および南壁付近の各1群となる。出土状況から比較的旧状を留めているとみられた。北壁付近の須恵器出土状況は乱雑で、一見して寄せられた状況を示すが、埋葬の過程の結果であるのか攪乱に伴うものは判断できなかった。西壁付近からは、須恵器・馬具等が石室側壁に沿ったかたちで出土した。石室中央床面付近からは須恵器、玉類や比較的多量の鉄鏃が出土しているが、須恵器は床面からかなり浮いた状況であったため2次的な移動と判断した。鉄鏃は、石室内遺物取り上げ後の最終精査の段階で検出した。本来の石室床面と想定されるレベルよりはやや下がった位置である。また、棺は木棺とみられるが、釘は確認できていない。ほか、詳細は後節に譲るが、一般的な須恵器に加え、一辺1cm程度の方形（菱形）透かしを持つ短脚有蓋高环や、皮袋形瓶など、形態的・技法的に特徴のある須恵器が出土した。そのほか、耳環・玉類（瑪瑙製勾玉・管玉・小玉ほか）・馬具・刀子ほかが出土した。

（仁木）

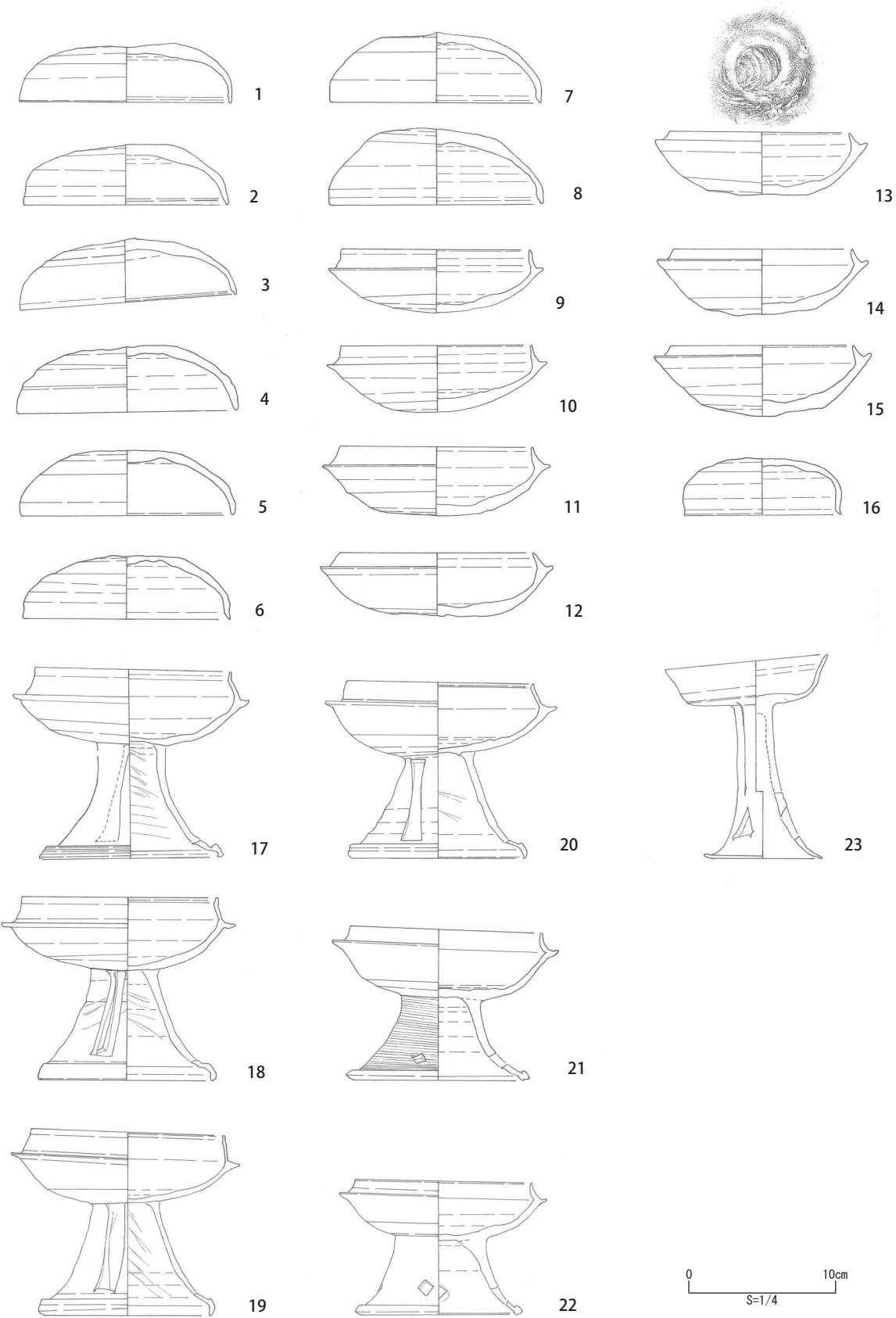
5. 出土遺物（第6図～第14図）

遺物は墳丘頂部表土、西側トレンチ、石室から出土した。このうち墳丘頂部表土、西側トレンチから出土した遺物は須恵器甕体部片が少量、土師器小片が1点である。石室からは須恵器、鉄鏃、刀子、馬具、玉類が出土した。

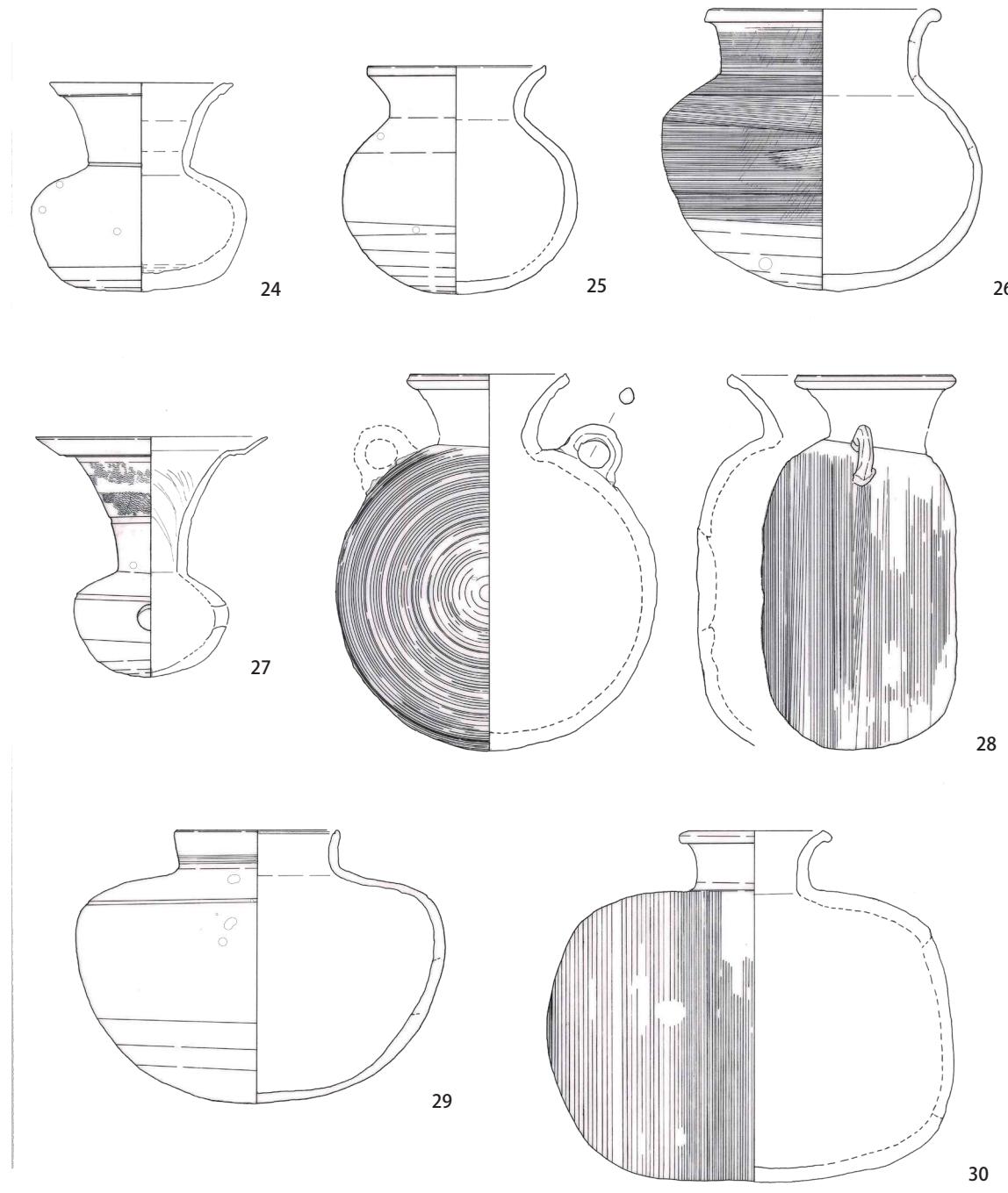
須恵器（第6図～第10図）

环蓋・环身は北壁付近で7点、南壁付近で8点出土した。北壁付近から出土した环は、石の上に蓋身共に伏せて置いたもの、壺類の下から出土したものがある。南壁付近は全て蓋身セットで出土しており、南端では蓋身が重なった状態で4点、その北側は蓋身が組み合わさった状態で4点出土した。

环蓋（1～8）は口径が13.6～14.8cm、器高が4.1～5.3cmで、法量が比較的大きいものと小さいものがみられる。前者（1～4）は天井部から体部にかけて回転ヘラケズリを施し、口縁部が直線的に伸び、端部に沈線を施す。後者（5～8）は前者よりも回転ヘラケズリの範囲がやや狭まり、天井部がやや平たくなる。口縁部は端部をつまむ。焼成はほとんどが良好だが、5は非常に焼成が甘く橙色を



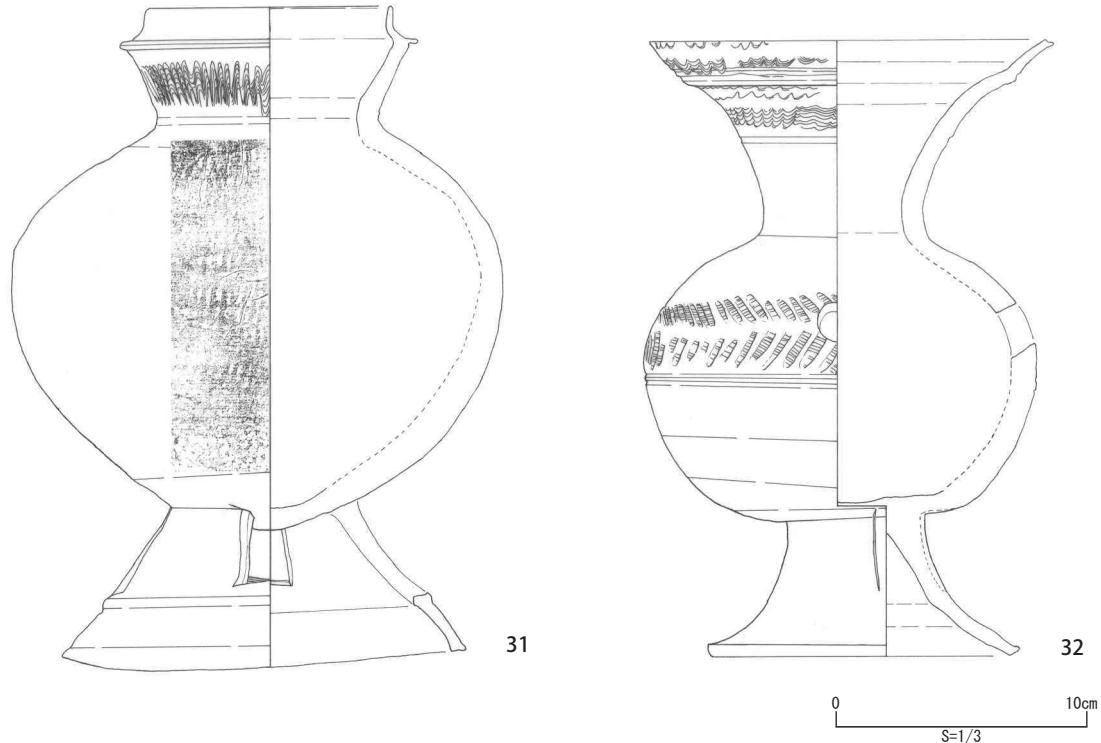
第6図 出土遺物（1）（ $S = 1:4$ ）



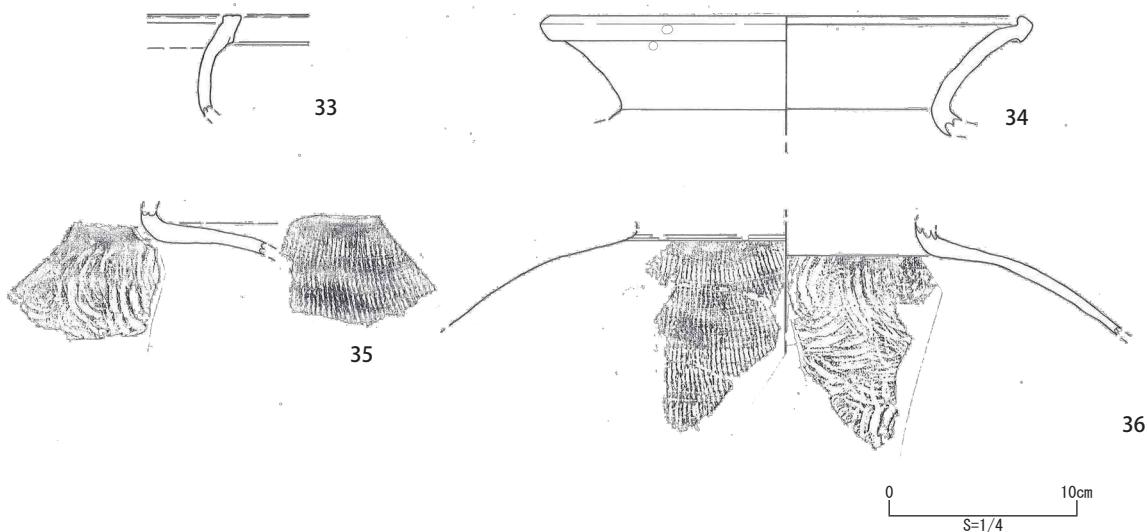
第7図 出土遺物（2）（ $S = 1:4$ ）

呈する。また、4は胎土に黒色粒を多く含み、全体的に器壁が厚い。

环身（9～15）は口径が12.0～13.0cm、器高が4.3～4.8cmで、法量にややばらつきがみられるが、口縁部が長く底部が丸みをおびるもの（9、10、11）、口縁部がやや短くなり、器高が低く扁平なもの（12）、口縁部が短いが器高が高く、底部が平坦なもの（13～15）がある。口縁部が短いものは、長いものよりも回転ヘラケズリの範囲がやや狭まり、体部と底部の境が明瞭である。このうち13は底部外面に粘土紐の痕跡が残り、底部内面に同心円状の当て具痕がみられる。



第8図 出土遺物（3）（S=1:3）

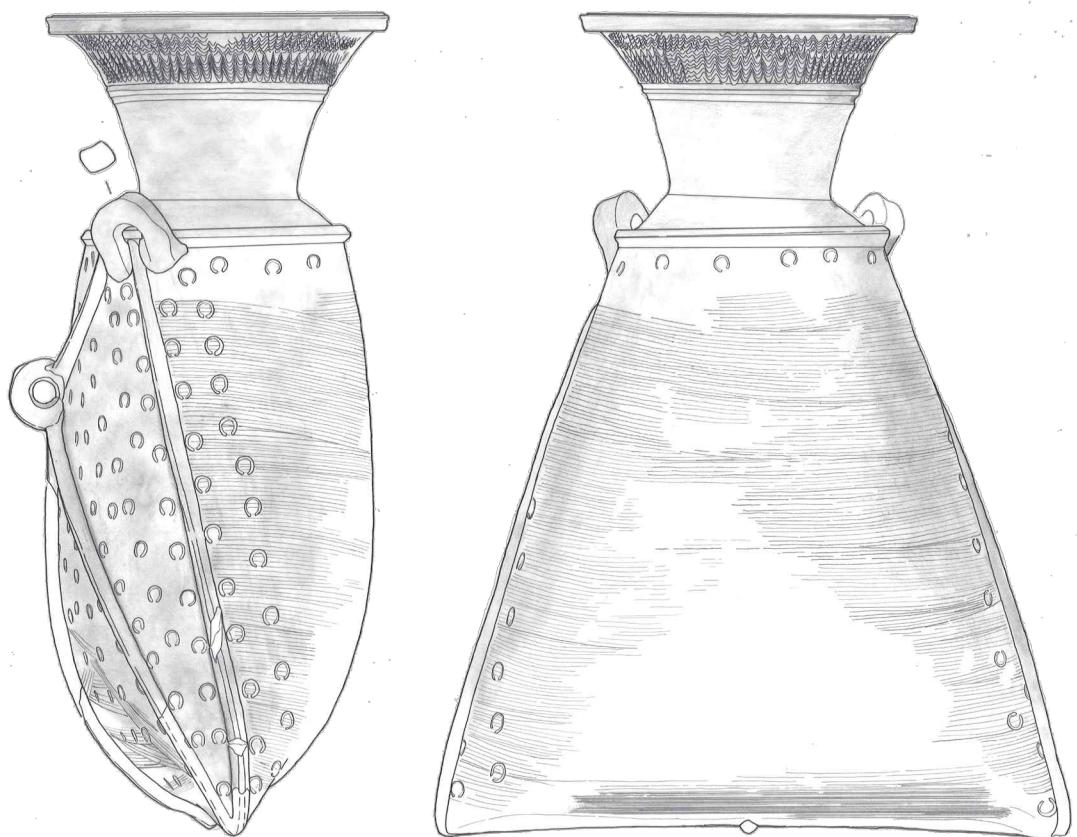
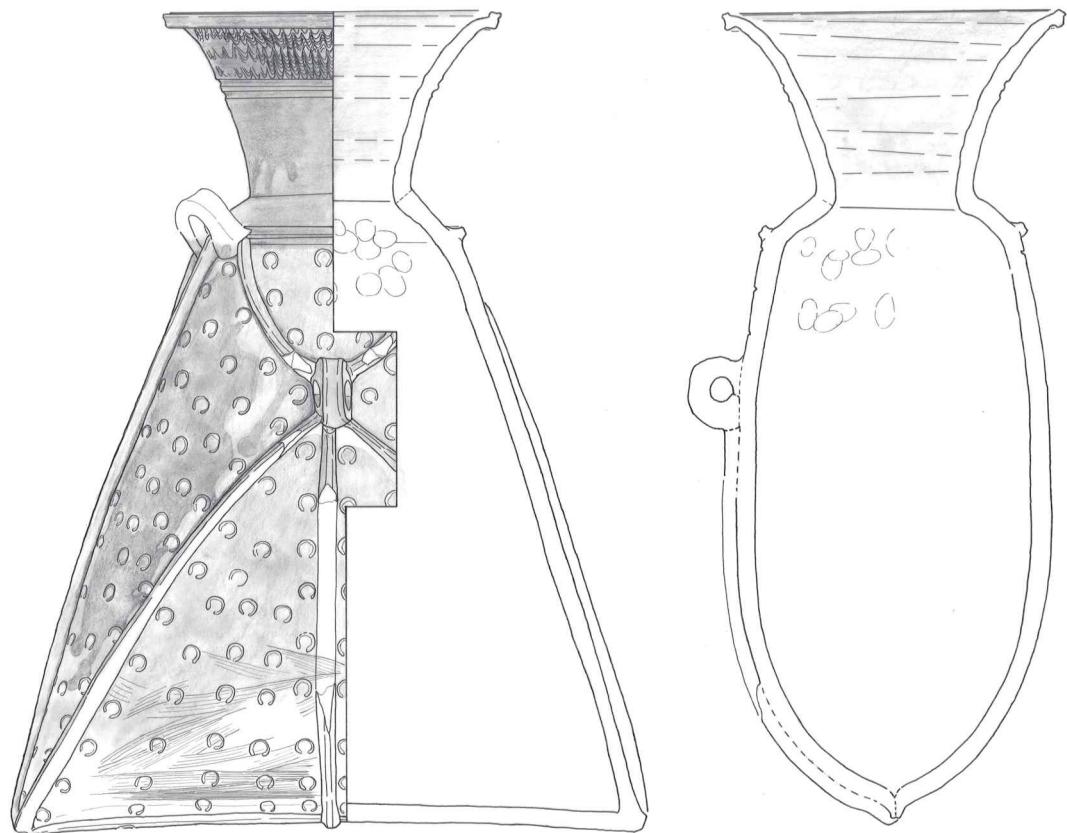


第9図 出土遺物（4）（S=1:4）

前述の通り、壺の多くは蓋身セットで出土しており、セット関係がわかるものは1と10、2と9、4と11、6と13、7と14、8と15である。5と12に関しては、重なって出土したが、蓋と身で焼成が大きく異なり、口径もあわない。また、北壁付近と南壁付近では出土状況がやや異なると記述したが、土器型式的にみると、北側は古く、南側は新しい様相を示す。

蓋（16）は後述する短頸壺や有蓋脚付壺の蓋と考えられるが、図化できた個体の中に組み合うものはなかった。体部を丸く仕上げ、口縁部のみ強く外反する。

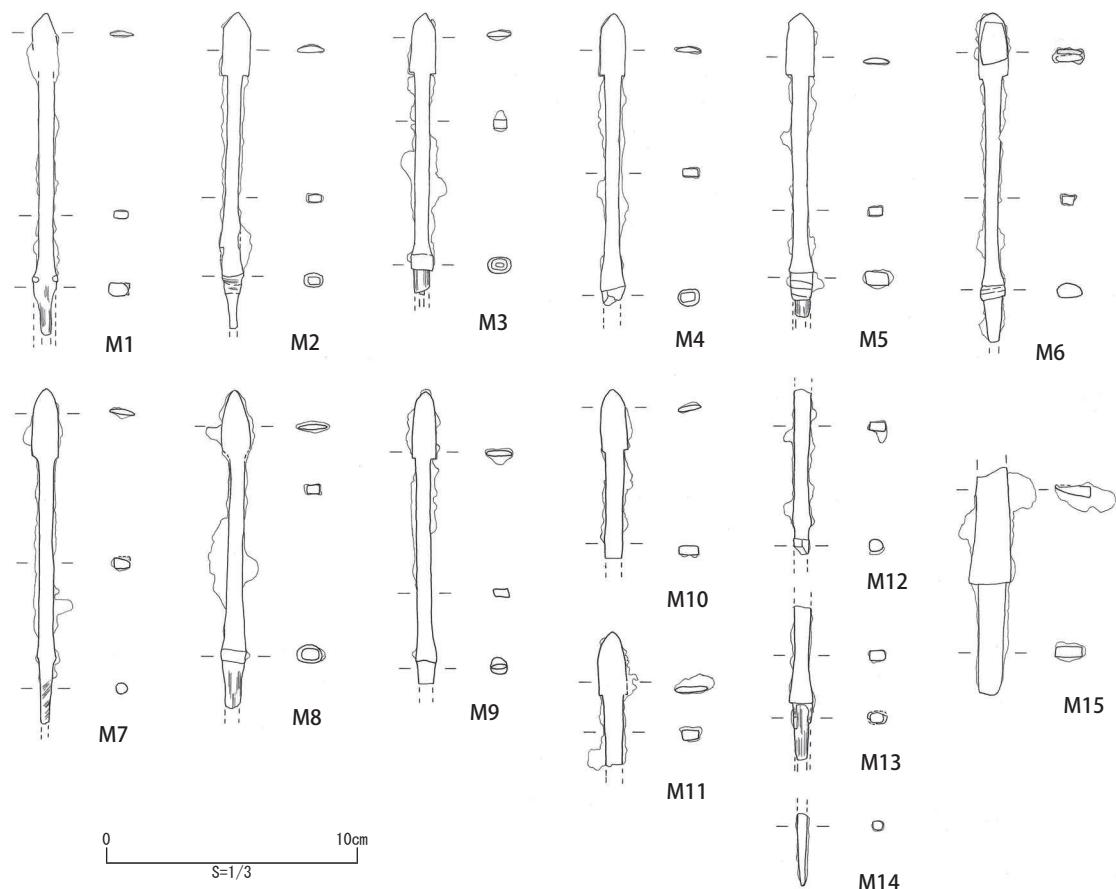
高壺は有蓋高壺（17～22）と無蓋高壺（23）があり、有蓋高壺には壺部の法量が大きいもの（17



37

0 10cm
S=1/3

第10図 出土遺物(5) (S=1:3)



第11図 出土遺物(6) ($S=1:3$)

～20)と小さいもの(21、22)がみられる。前者は3方向に長方形の透かしが入った脚台を持つ。焼成時には口縁部を下にしたとみられ、坏部外面と脚台内面に自然釉が付着する(18～20)。後者は前述の坏身と同程度の法量で、やや幅のある短い脚台を持つ。21は脚台に丁寧なカキメを施したのち、3方向に菱形の透かしを入れる。22は脚台に4方向、菱形の透かしを入れる。22の透かしの成形方法は他の高坏とは異なっており、断面の約半分ないしは3分の2まで切り込みを入れた後、外側から押し込むことで成形する。透かし部分が完全に切断されていないため、内面には粘土が円状に剥離した痕が残る。また、全体が橙色を呈するが、5と異なり焼き締まっているため、意図的に酸化焼成したものと考えられる。

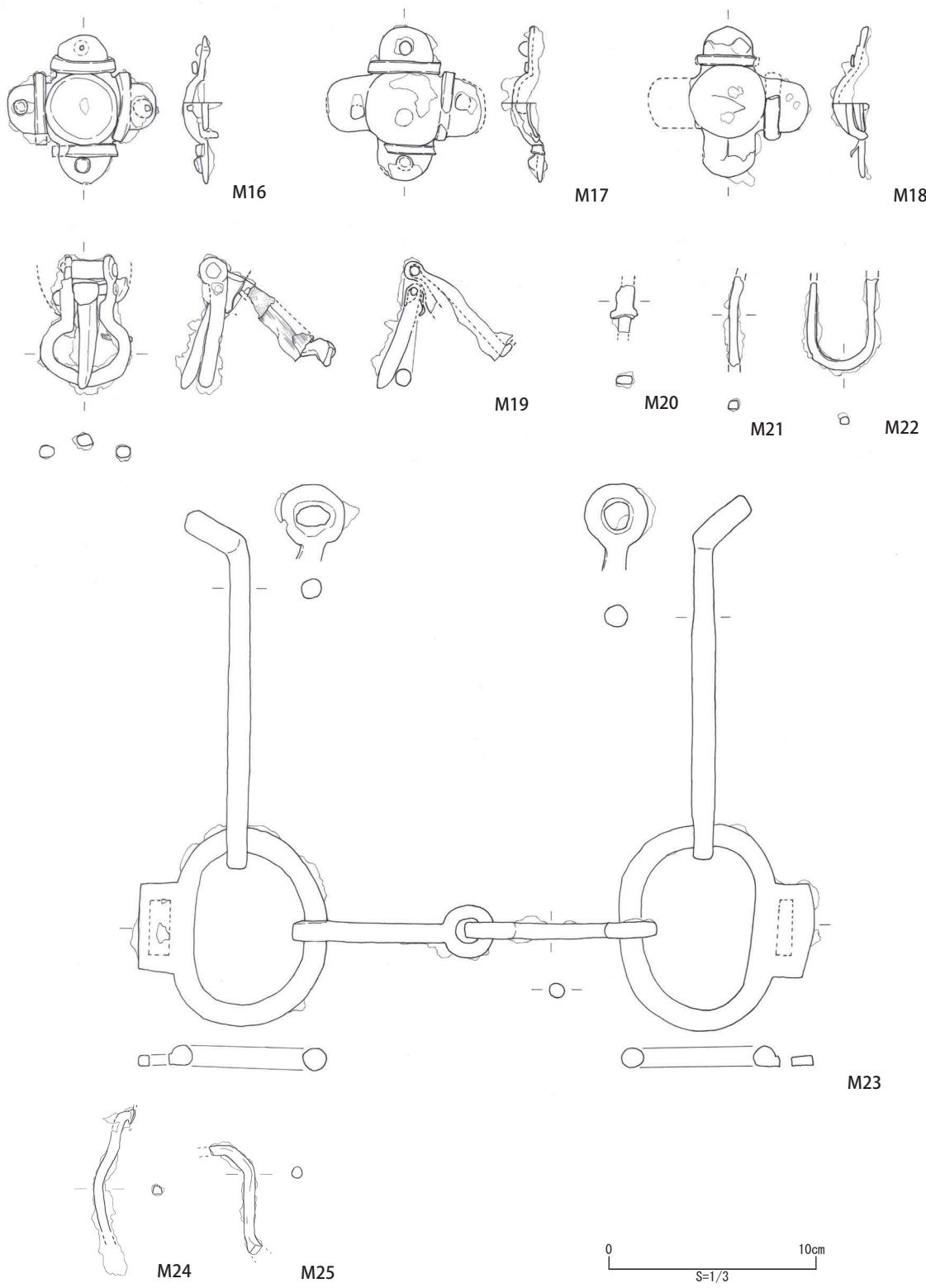
無蓋高坏(23)は2段3方向の透かしを持った脚台を持つ。上段に直線の切り込み、下段に三角形の透かしを施す。この個体のみ北側壁面付近から出土した。

壺(24～26)はそれぞれ法量や形態が異なる。24は法量が一番小さく、肩が強く張り、平坦な底部を持つ。25は全体が丸く、焼成はやや不良である。26はタタキのちカキメを施す。頸部はその後弱いヨコナデを施すが、カキメを消すには至っていない。

ハソウ(27)は頸部中央に幅のある沈線を入れ、上段に波状文を施す。波状文は施文後、中心をナデ消しているため2段に見える。

提瓶(28)は口縁端部をつまみ上げており、肩部に輪状把手を貼り付ける。

短頸壺(29)は肩部に沈線、頸部下半分にカキメを施す。蓋を被せたまま焼成したとみられるが、

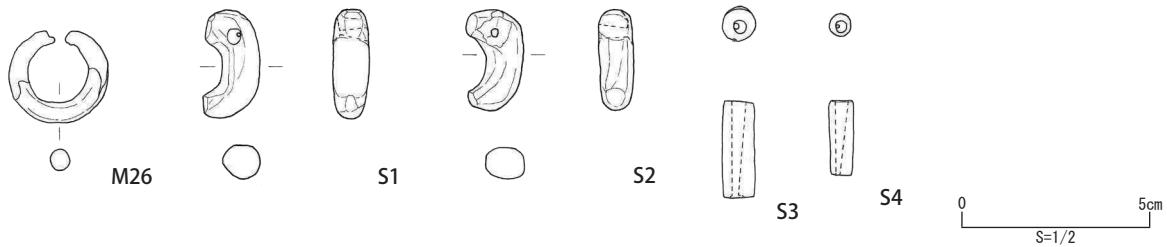


第12図 出土遺物(7) ($S = 1:3$)

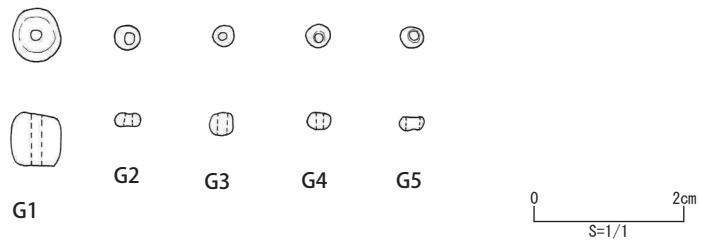
蓋は出土していない。

横瓶(30)は肩部の一部に环身の返し部分が付着している。

有蓋脚付壺(31)は口縁部に返しがつき、4方向に透かしを入れる脚台を持つ。頸部に波状文を施したのち、ヨコナデにより下半分を消す。体部外面に格子目タタキのちヨコナデを施す。透かしは細長



第13図 出土遺物(8) ($S=1:2$)



第14図 出土遺物(9) ($S=1:1$)

い台形であり、2回に分けて切断をする。

脚付ハソウ(32)は口縁部と体部の幅が同程度であり、3方向に切り込みのある脚台を持つ。口縁部から頸部にかけ波状文を、体部に平行タタキ目を施す。

甕(34～36)は墳頂表土及び石室内から破片で出土した。復元には至らなかったが、焼成が比較的良好なもの(34、35)と不良なもの(36)の2個体は存在したと考えられる。外面に格子目タタキ、内面に同心円タタキを施す。この他に壺口縁部片(33)が石室掘り下げ中に出土した。端部上面に深い沈線を施す。

皮袋形瓶(37)は北壁付近において、他の須恵器の下から出土した。口縁部及び肩部の把手が欠損する以外はほぼ完形である。縦に長い円錐台形の体部に突帯を貼り付け、3つの把手を伴う。体部の下端部は直線に閉じ合わせ、上端部はユビオサエにより肩部を成形し、口縁部を接合している。調整は体部外面に丁寧なカキメを施し、肩部に突帯、前面中央に把手を貼り付けた後、その他の突帯を貼り付け、最後肩部に把手を貼り付ける。施文も他の須恵器と比べて非常に丁寧であり、頸部には2条の沈線を巡らせたのち7～9本からなる波状文を2段施文する。体部には下端部までC字形の施文が施される。

鉄製品(第11図、第12図)

鉄製品は主に鉄鎌、刀子、馬具が出土した。鉄鎌は石室中央から全ての個体がまとまって出土しており、刀子は鉄鎌のやや南側から出土した。馬具は鞍以外、西壁際で高坏と共にややまとまった状態で出土した。この中の辻金具(M16)の下からは鉸具(M20～M22)が出土した。

鉄鎌(M1～M14)は鎌身で数えて12点であり、いずれも長頸柳葉形式である。M6は鎌身に別個体の鎌身が付着している。刀子(M15)は茎及び刀身の一部である。

馬具は轡(M23)1点、辻金具(M16～M18)3点、鞍(M19)1点、鉸具1点である。轡(M23)は環状鏡板付轡であり、長径は約9.8cmを計り、方形板状の立闇を持つ。引手と鐙はそれぞれ別に連

結し、引手壺はくの字に屈曲する。辻金具(M16～M18)は鉄地金銅張で、径 3.5cm、高さ 1.25～2.0mm の鉢が付く。脚部にはひも状の責金具と鉢 1 本が付着する。鞍 (M19) は座金具の上半分が欠損するが、恐らく円形である。輪金は瓢型であり、指金は断面隅丸方形で、基部を横棒に巻き付ける。脚は片方が 6 cm 程度残存し、2 種類の木質が付着する。脚部の付け根から 1.3cm 間及び輪金、座金の一部に横方向の木質、1.3cm から 4.0cm の間に前後方向の木質が確認できる。前者の木質部分は鞍の前輪部分、後者は居木部分が該当すると考えられる。また、脚部の末端は鉄部分がねじれた状態であり、端部は折れている。鉸具 (M20～M22) は接合できなかったが、全て同一個体と考えられる。辻金具の下から出土していることから、馬具の一部と考えられる。

また、轡と鉄鎌の中間地点から棒状の不明鉄器 (M24、M25) が出土している。

装身具（第 13 図、第 14 図）

耳環、勾玉、管玉、ガラス小玉が出土した。勾玉は石室中央 (S2) 及び北西 (S1) で、床面から浮いた状態で出土した。管玉は石室中央やや北側及び南側 (S3) から出土した。前者は検出時点で粉状となっており、図化できなかった。また、石室内の排土はできる限りふるいにかけた結果、耳環が 1 点、石室南側と考えられる排土から管玉 1 点 (S4) 出土している。同じく石室南側の排土内からはガラス小玉が 6 点出土したが、図化できたものは 5 点である。

耳環 (M26) は金環である。勾玉 (S1、S2) はいずれも瑪瑙製であり、片面穿孔である。S2 は片面穿孔のち穿孔方向側の孔を複数回打ち欠いている。管玉 (S3、S4) はいずれも碧玉製であり、片面穿孔である。ガラス小玉 (G1～G5) は 2 種類あり、G1 は径 6 mm を計り、濃紺色を呈する。G2～G5 は径 3.1～3.5mm に收まり、色は青緑色から水色まである。

6. まとめ

桑山南 4 号墳は、地山の一部を切込み、盛土を行うことで石室の床面を形成して築造された円墳である。墳丘は明確ではないが、直径約 10 m と推測でき、高さ約 1.4 m 以上を測る。石室は竪穴式石室で、長辺 3.3 m、短辺 0.9～1.2 m を測り、所属古墳群のなかでは最大規模である。

出土遺物について概観すると、須恵器壺はほとんどが組み合った状態で出土し、南壁付近から出土したものはやや新しい様相を示すが、おおよそ陶邑編年の TK10 型式の範囲に収まると考えられる。これは他の須恵器壺瓶及び、馬具の年代ともおおよそ符合する。他の須恵器には透かし穴が菱形の高壺や壺瓶類、脚付壺、そして皮袋形瓶が出土している。馬具は轡や鞍、辻金具が出土し、その他鉄製品としては鉄鎌や刀子が出土した。玉製品は勾玉、管玉、ガラス小玉が出土した。

桑山南古墳群の階層性については岡山県教育委員会が報告しており（岡山県教育委員会 2022）、今回の調査の結果、桑山南 4 号墳は当該古墳群の中では最も階層が高いことが改めて明確になった。また、特殊な器形として皮袋形瓶が出土した。県内においては出土例が非常に少なく、加えて特異な形態であることから、今後その性格等について検討が必要である。 （三輪）

註

註1 岡山県教育委員会 2022 「桑山南古墳群 細畝古墳群 一般国道53号（津山南道路）改築工事に伴う発掘調査1」
『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 255』

註2 令和3年10月28日付け岡山県古代吉備文化財センター報道発表資料による。詳細は註1の文献にて報告されている。

参考文献

1. 岡山県教育委員会 2022 「桑山南古墳群 細畝古墳群 一般国道53号（津山南道路）改築工事に伴う発掘調査1」
『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 255』
2. 岡安光彦 1984『いわゆる「素環の轡」について—環状鏡板付轡の型式学的分析と編年—』「日本古代文化研究 創刊号」
3. 岡安光彦 1985『環状鏡板付轡の規格と多変量解析』「日本古代文化研究 2」
4. 田辺昭三 1966『陶邑古窯址群』平安学園考古学クラブ

報告 番号	出土地	器種	計測値(単位 cm) ()内は復元値			胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	
			口径	底径	器高				調整、施文	その他
1	石室北壁付近	坏蓋	14.1	-	4.1	密 長石、黒色粒	灰～暗灰色	良		
2	石室北壁付近	坏蓋	13.6	-	4.1	密 長石	青灰～灰黄色	やや不良		
3	石室北壁付近	坏蓋	14.5～13.5	-	4.8	密 長石	灰色	良		
4	石室北壁付近	坏蓋	14.8	-	4.4	密 長石、黒色粒	灰色	良		
5	石室南壁付近	坏蓋	14.2	-	4.4	密 長石	橙色	不良		残存率60%
6	石室南壁付近	坏蓋	13.8	-	4.3	密 長石	暗灰色	良		一部自然釉付着
7	石室南壁付近	坏蓋	14.1	-	4.8	密 長石	青灰色	良		自然釉付着
8	石室南壁付近	坏蓋	14.3	-	5.3	密 長石、チャート	暗灰色	良		
9	石室北壁付近	坏身	12.6	-	4.3	密 長石	青灰色	良		
10	石室北壁付近	坏身	12.8	-	4.5	密 長石	青灰色	やや良		
11	石室北壁付近	坏身	13.0	-	4.7	密 長石、黒色粒	灰白～灰色	良		
12	石室南壁付近	坏身	12.9	-	4.3	密 長石	青灰色 軸：オリーブ黒	良		厚い自然釉付着
13	石室南壁付近	坏身	12.1	-	4.4	密 長石	灰色	良	底部内：同心円タタキ 底部外：板状圧痕	一部自然釉付着、粘土結の単位残存
14	石室南壁付近	坏身	12.0	-	4.5	密 長石	暗灰色	良		一部自然釉付着
15	石室南壁付近	坏身	12.3	-	4.8	密 長石	褐灰色 軸：オリーブ灰	やや良		一部自然釉付着
16	石室北壁付近	蓋	10.6	-	4.9	密 長石	暗灰色	良		
17	石室内	高坏	13.1	11.6	13.0	密 長石	暗灰色	良	脚部：シボリ 3方向透かし（方形）	
18	石室内	高坏	13.0	11.6	12.4	密 長石	暗灰色	良	脚部：シボリ 3方向透かし（方形）	一部自然釉付着
19	石室西壁付近	高坏	12.9	11.15	12.75	密 長石	青灰色 軸：灰オリーブ	良	脚部：シボリ 3方向透かし（方形）	一部自然釉付着
20	石室西壁付近	高坏	12.5	11.6	12.0	密 長石	灰色	良	脚部：シボリ 3方向透かし（方形）	一部自然釉付着
21	石室中央	高坏	12.8	11.25	10.5	密 長石	青灰色	良	脚部：カキメのち3方向透かし（菱形）	一部自然釉付着
22	石室西壁付近	高坏	11.7	10.4	9.3	密 長石	橙色	良	4方向透かし（菱形）	
23	石室北壁付近	高坏	10.95	7.95	13.8	密 長石	暗灰色	良	2段3方向透かし（上段切り込み、下段三角）	一部自然釉付着
24	石室北壁付近	長頸壺	11.0	-	12.7	密 長石	灰～青灰色	良		
25	石室北壁付近	壺	10.55	-	14.05	密 長石、黒色粒	灰白色	やや良		
26	石室北壁付近	壺	13.1	-	17.4	密 長石	褐灰色	良	頸部：カキメのちヨコナデ 体部：タタキのちカキメ	
27	石室北壁付近	ハソウ	(14.0)	-	14.8	密 長石	暗灰色	良	頸部内：シボリ 頸部外：波状文	一部自然釉付着
28	石室北壁付近	提瓶	(9.3)	-	23.1	密 長石	暗灰色	良	体部：カキメ	自然釉付着
29	石室北壁付近	短頸壺	9.5	-	16.8	密 長石	青灰色	良	頸部：カキメ 肩部：沈線	
30	石室北壁付近	横瓶	8.0	-	21.6	密 長石	暗灰色	良	体部：カキメ	自然釉付着
31	石室北壁付近	有蓋脚付壺	9.6	16.3	26.5	密 長石	暗灰色	良	頸部：波状文 体部：格子状タタキのちヨコナデ	
32	石室北壁付近	脚付ハソウ	15.75	11.85	25.6	密 長石	青灰色	良	口頸部：波状文 体部：タタキ目 脚部3方向切り込み	一部自然釉付着
33	主体部掘り下げ 根の周辺	壺（口縁部）	-	-	(5.4)	密 長石	暗灰色	良	口縁部：上面沈線 頸部：カキメ	
34	中心主体掘り下げ たち割りトレンチ（西）	甕（口縁部）	(23.1)	-	6.0	密 長石	灰色	良	内：格子タタキのちヨコナデ 外：同心円タタキ	
35	中心主体掘り下げ・南北区境頂表土はぎ	甕（肩部）	-	-	(2.3)	密 長石	暗灰色	良	内：格子タタキのちヨコナデ 外：同心円タタキ	
36	中心主体掘り下げ	甕（肩部）	-	-	(5.95)	密 長石	褐灰色	やや不良	内：格子タタキのちヨコナデ 外：同心円タタキ	
37	石室北壁付近	皮袋形瓶	13.5	-	33.2	密 長石	灰色 軸：オリーブ灰	良	内：ユビオサエ 外：波状文、カキメのちC字形文	

表1 桑山南4号墳出土遺物観察表（1）

報告番号	出土地	器種	計測値（単位 cm）			重量 (g)	材質	備考
			最大長(縦)	最大幅(横)	最大厚(奥行)			
M1	石室中央	鏃	13.1	1.0	0.55	11.0	鉄	
M2	石室中央	鏃	13.3	1.13	0.50	13.0	鉄	別個体の鏃身付着
M3	石室中央	鏃	12.3	1.15	0.60	12.0	鉄	
M4	石室中央	鏃	11.8	1.0	0.70	11.0	鉄	
M5	石室中央	鏃	12.8	1.15	0.07	13.0	鉄	
M6	石室中央	鏃	12.8	1.1	0.60	9.0	鉄	
M7	石室中央	鏃	11.4	1.1	0.68	11.5	鉄	
M8	石室中央	鏃	11.8	1.05	0.65	12.0	鉄	
M9	石室中央	鏃	6.8	1.0	0.40	6.5	鉄	
M10	石室中央	鏃	5.4	1.15	0.40	5.5	鉄	
M11	石室中央	鏃	2.9	-	0.40	0.5	鉄	
M12	石室中央	鏃	6.8	-	0.50	6.0	鉄	
M13	石室中央	鏃	13.4	1.1	0.40	13.0	鉄	
M14	石室中央	鏃	6.2	-		5.0	鉄	
M15	石室中央	刀子	9.2	1.7	4.50	19.0	鉄	
M16	石室西壁面付近	辻金具	(7.6)	(7.4)	(2.3)	43.0	鉄	金銅張
M17	石室西壁面付近	辻金具	(7.5)	(5.9)	(1.9)	34.5	鉄	金銅張
M18	石室西壁面付近	辻金具	(7.25)	(7.25)	(1.25)	43.0	鉄	金銅張
M19	石室南壁面付近	鞍	(6.4)	(4.4)	(7.5)	57.5	鉄	木質残存
M20	M17の下	鉸具(輪金)	(4.7)	(3.3)	0.4	6.5	鉄	
M21	M17の下	鉸具(刺金)	4.4	0.5	0.4	3.5	鉄	
M22	M17の下	鉸具	2.3	1.5	1.8	1.8	鉄	
M23	石室西壁面付近	轡	-	-	-	600.0	鉄	
M24	石室中央	不明鉄器	8.1	0.5	0.5	9.0	鉄	
M25	石室中央	不明鉄器	2.3	0.5	0.5	6.5	鉄	
M26	石室南側排土内	耳環	直径2.65	-	0.05	7.5	銅	

報告番号	出土地	器種	計測値（単位 cm）()内は復元値		重量 (g)	材質	色調	備考
			最大長	最大幅				
S1	石室中央	勾玉	2.9	1.0	5.0	メノウ	灰白～暗い赤褐色	片面穿孔
S2	石室北東	勾玉	2.65	1.0	4.5	メノウ	暗い赤褐色	片面穿孔
S3	石室南壁面付近	管玉	2.60	0.95	3.5	碧玉	暗い緑灰色	
S4	石室南側排土内	管玉	1.95	0.70	1.5	碧玉	暗い緑灰色	
G1	石室南側排土内	小玉	0.70	0.70	0.5	ガラス	濃い紺色	
G2	石室南側排土内	小玉	0.20	0.350	-	ガラス	淡い緑色	
G3	石室南側排土内	小玉	0.30	0.325	-	ガラス	淡い青緑色	
G4	石室南側排土内	小玉	0.24	0.31	-	ガラス	鮮やかな青色	
G5	石室南側排土内	小玉	0.27	0.32	-	ガラス	水色	

表2 桑山南4号墳出土遺物観察表(2)

写真図版 1 桑山南 4号墳



調査前状況（北西から）



調査前状況（南西から）



南北トレンチ（南半）（北東から）



南北トレンチ北半石室掘り方検出部分（北から）



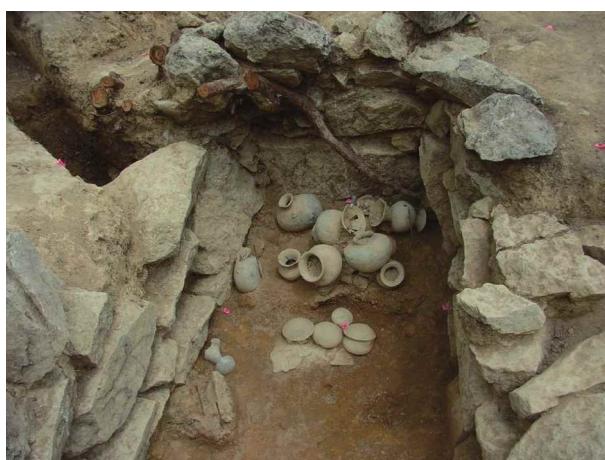
東西トレンチ（西半）（北西から）



東西トレンチ（東半）（南東から）



遺物出土状況（南西から）



北側壁付近遺物出土状況（南西から）

写真図版2 桑山南4号墳



石室南半遺物出土状況（北東から）



石室完掘後全景（南西から）



北壁（南西から）



南壁（北東から）



東壁（北から）



西壁（東から）



調査状況（北から）



石室埋め戻し状況（北西から）

写真図版3 桑山南4号墳



須恵器 坯蓋（1）



須恵器 坯蓋（2）



須恵器 坯蓋（3）



須恵器 坯蓋（4）



須恵器 坯蓋（5）



須恵器 坯蓋（6）



須恵器 坯蓋（7）



須恵器 坯蓋（8）

写真図版4 桑山南4号墳



須恵器 壊身 (9)



須恵器 壊身 (10)



須恵器 壊身 (11)



須恵器 壊身 (12)



須恵器 壊身 (13)



(13) 底部



須恵器 壊身 (14)



須恵器 壊身 (15)

写真図版5 桑山南4号墳



須恵器 蓋 (16)



須恵器 高坏 (17)



須恵器 高坏 (18)



須恵器 高坏 (19)



須恵器 高坏 (20)



須恵器 高坏 (21)



須恵器 高坏 (22)



須恵器 高坏 (23)

写真図版6 桑山南4号墳



須恵器 長頸壺 (24)



須恵器 壺 (25)



須恵器 壺 (26)



須恵器 ハソウ (27)



須恵器 提瓶 (28)



(28) 側面



須恵器 短頸壺 (29)



須恵器 橫瓶 (30)

写真図版7 桑山南4号墳



須恵器 有蓋脚付壺 (31)



須恵器 脚付ハソウ (32)



須恵器 壺 口縁部 (33)



須恵器 甕 口縁部 (34)



須恵器 甕 肩部 (35)

須恵器 甕 肩部 (36)



須恵器 皮袋形瓶 正面 (37)



(37) 背面



(37) 左側面



(37) 右側面



(37) 内面1



(37) 内面2

写真図版9 桑山南4号墳



鉄鏃 (M1～M14)



刀子 (M15)



鉸具 (M20～M22)



辻金具 (M16～M18)

写真図版 10 桑山南 4 号墳



鞍 正面 (M19)



(M19) 側面



(M19) 上から



不明鉄器 (M24 (左)、M25 (右))

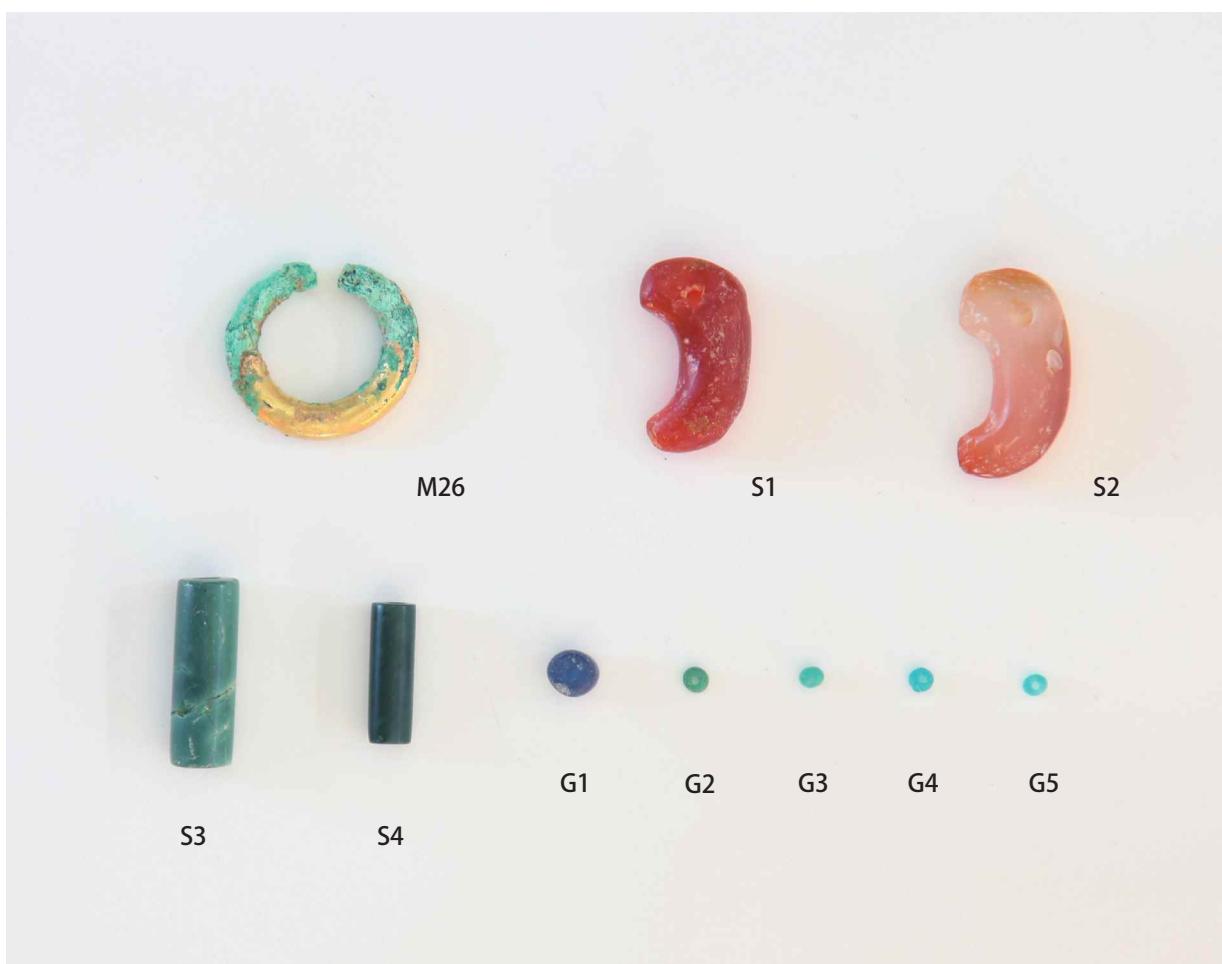


轡 (M23)

写真図版 11 桑山南 4 号墳



(M23) 上から



耳環 (M26) 勾玉 (S1、S2) 管玉 (S3、S4) ガラス小玉 (G1 ~ G5)

第4節 令和2年度試掘・確認調査

1. 慈恩寺古墳群確認調査

- a 調査地 津山市桑下 75
- b 調査期間 ①令和2年5月18日～
令和2年5月22日
②令和2年7月14日～
令和2年7月17日
- c 調査面積 ①8 m² ②12 m²
- d 調査の概要

(経緯と経過)

津山市桑下地内における周知の埋蔵文化財包蔵地である慈恩寺古墳群（遺跡地図上は慈恩寺1号墳～5号墳）のある丘陵において、平成30年7月豪雨により、丘陵の一部が崩壊した。崩壊した部分はもともと山を削って寺院（慈恩寺）が造成されており、削った斜面が豪雨により部分的に崩落し、一部建物に被害が及んだ。

古墳群はこの寺院境内の裏山に存在するとされ、遺跡地図によると、方墳1基（1号墳）、円墳4基（2号～5号墳）が丘陵の頂部に点在するとされていた。

崩落した斜面は垂直に近い状況であるため、保護のための工事をする必要があることから、影響範囲と推測される部分において5月に確認調査を実施した。確認調査は、崩落した法面の頂上に1箇所、北側の高まり部分に1箇所、合計2箇所のトレンチを設定した（①トレンチ1・2）。

その後、工事の実施にあたり周辺の樹木を伐採したところ、前回調査地の南西部に別の高まりがみられたため、この部分について再度確認調査を実施した。確認調査は、高まりの頂部付近に1箇所設定して行った（②トレンチ3）。

(調査概要)

トレンチ1

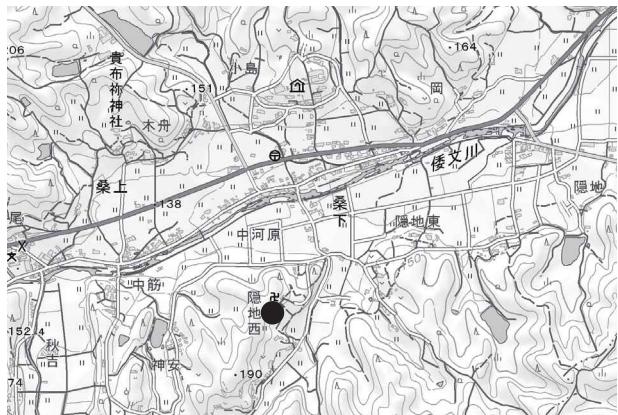
裏山の崩落部直上の最高所に十字に設定したトレンチである。表土を取り除くと、その下から赤褐色及び暗黄褐色土がみられた。これは地山の風化した土であると考えられる。この風化土はトレンチの中心部で最大30cm程度みられた。中心から離れたところについては、いずれも表土直下、あるいは厚さ10cm程度の風化土の下から固い地山が検出された。遺構・遺物は全く検出されなかった。

よって、本トレンチ部分については古墳は存在しないことを確認した。

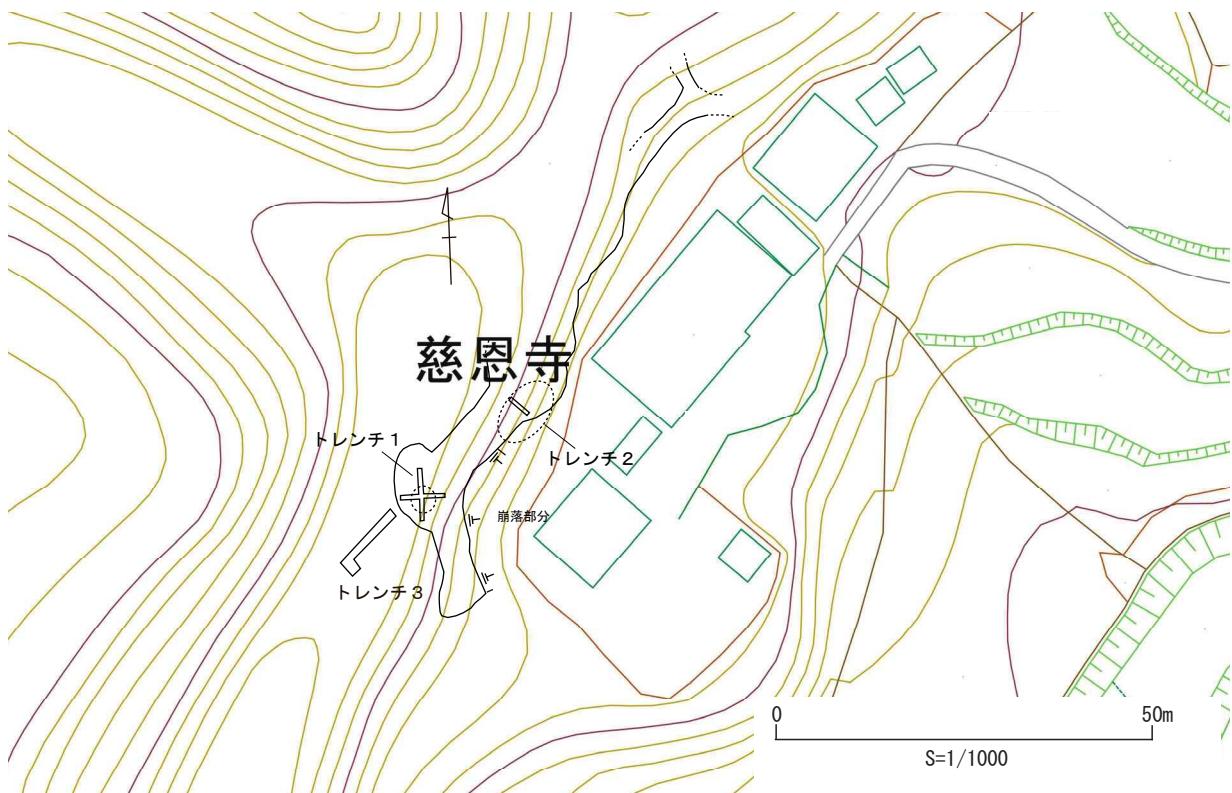
トレンチ2

トレンチ1から北に17mのところ、本堂の裏に近い部分に設定したトレンチである。当該地にも、わずかであるが高まりがみられたため、古墳であるかどうかの確認を行うために設定した。

トレンチ1と同様、表土を除去すると、地山の風化土が部分的にみられ、トレンチの南西側（法面側）では表土直下に赤褐色の地山がみられた。北東側（山側）では、30cm程度の暗黄褐色土が堆積してい



第1図 調査位置図 (S = 1:25,000)



第2図 トレンチ配置図 ($S = 1:1000$)

たが、その下には固くしまった地山が確認された。遺構・遺物はみられなかった。

よって、本トレンチ部分についても古墳は存在しないことを確認した。

トレンチ3

表土を取り除くと、その下は、黄褐色土がみられた。地山の風化した土であると考えられる。この風化土は高まりの中心付近で一部 20cm 程度みられる箇所もあるが、ほとんどが表土直下で地山が確認された。遺構・遺物は全く検出されなかった。

よって、今回の伐採によって確認された高まりは古墳ではないことを確認した。

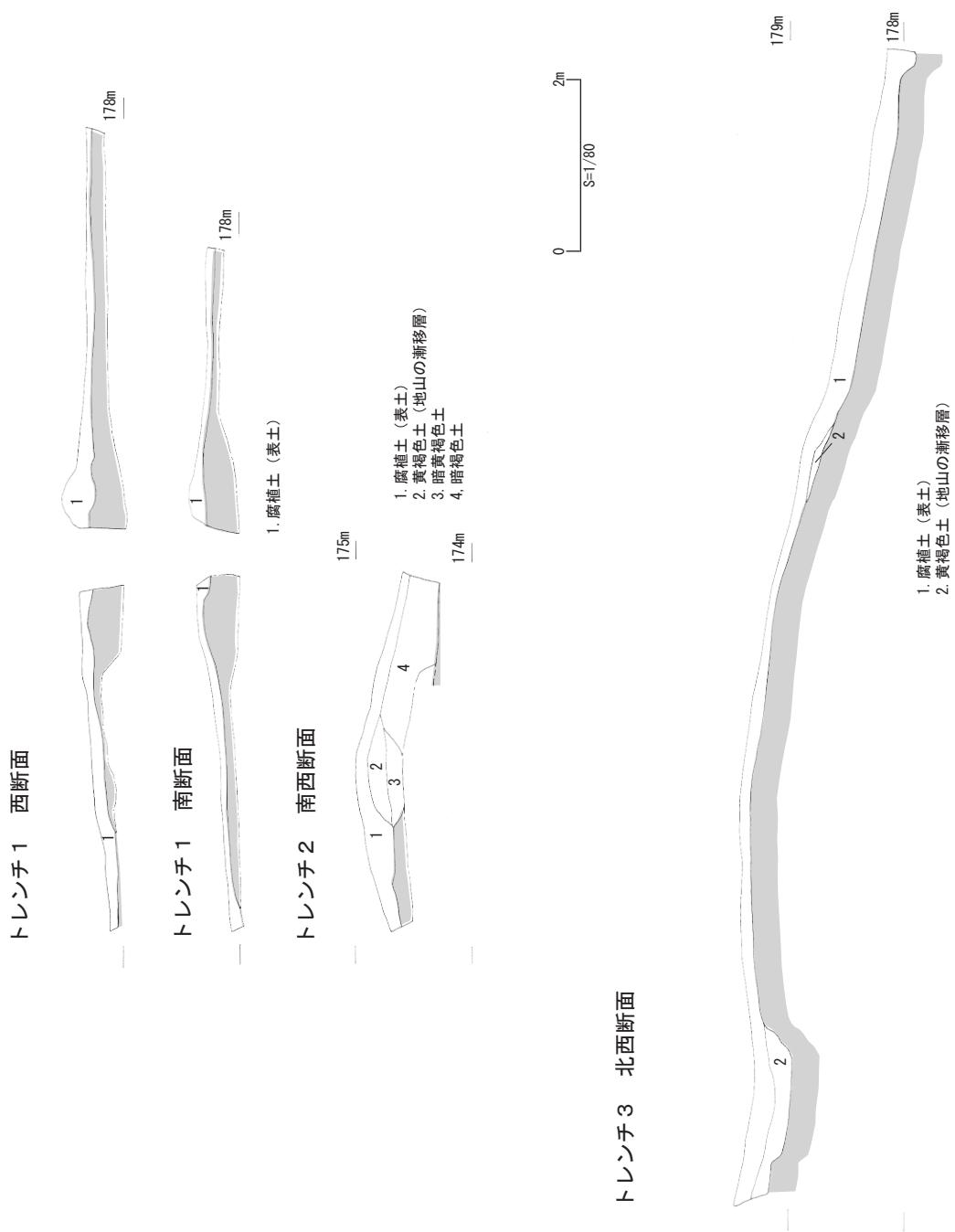
e まとめ

2回の調査の結果、調査を行った箇所については古墳は存在しないことを確認した。

今回は、2号墳及び3号墳とされる部分について、確認調査を行ったが、少なくとも今回のトレンチからは古墳は確認されなかつたため、工事の影響範囲の可能性のある部分には古墳は存在しないと結論づけた。また、古墳の有無を確認するため周辺の山林を踏査したが、該当すると考えられる明確な古墳は確認することができなかつた。しかし、少なくともトレンチ2付近に存在するとされる2号墳については存在しないことが明らかとなつた。

また、2回目の調査では、伐採範囲が広がつたことにより改めて確認調査を行つた。遺跡地図上では3号墳に近い箇所にトレンチを設定したが、表土除去後すぐに地山が確認されたことから、高まりは古墳でないことが確認された。古墳であるとすれば直径 18 ~ 19 mをはかる高まりであった。3号墳は遺跡地図では直径 18.5 mの円墳とされていることから、今回確認した高まりを3号墳としていたものと考えられる。

(豊島)



第3図 トレンチ断面図 ($S = 1 : 80$)

写真図版 1 R2 慈恩寺古墳群



調査地遠景（北から）



法面崩落状況（東から）



トレンチ1調査前（北から）



トレンチ1全景（北から）



トレンチ2全景（北東から）



トレンチ3調査前（北東から）



トレンチ3全景（北東から）



トレンチ3全景（南から）

2. 美作国府跡（総社川崎線）確認調査

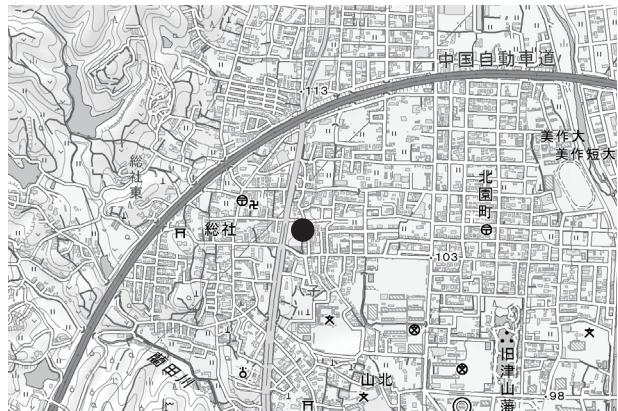
- a 調査地 津山市山北 13-13、13-15
- b 調査期間 令和3年2月8日～
令和3年2月24日
- c 調査面積 30 m²
- d 調査概要
(経緯と経過)

都市計画道路総社川崎線（山北工区）整備事業

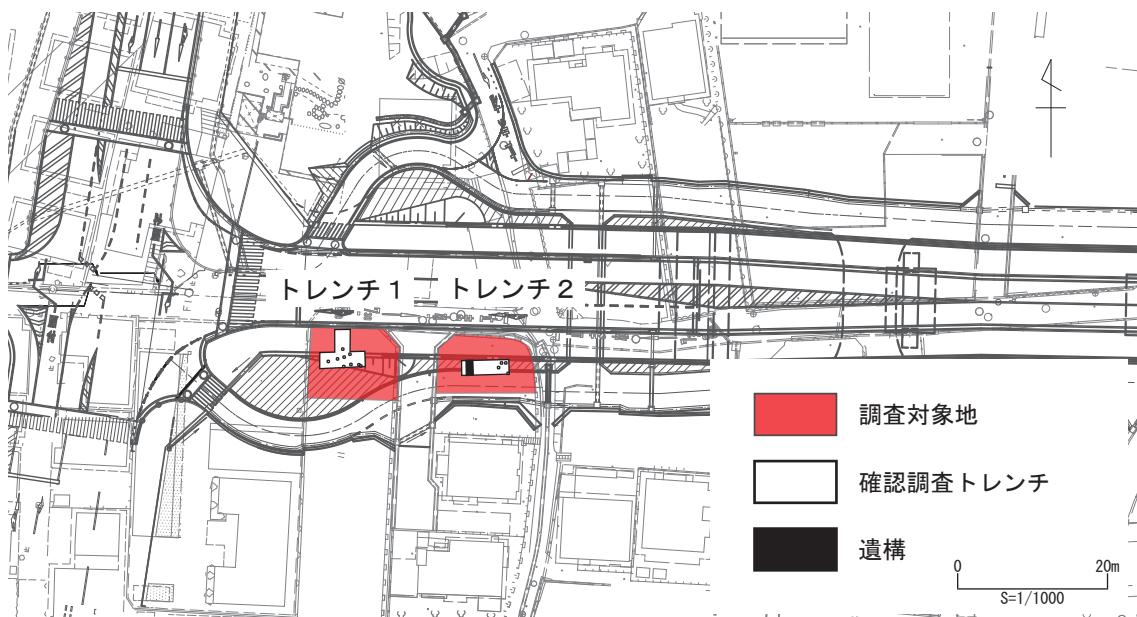
に伴い、道路新設予定地の遺構の有無及び遺構の深度等について確認調査を実施した。

当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である美作国府跡に該当する。美作国府跡は津山盆地の西側に広がる丘陵上に位置し、丘陵中心部分では、昭和61年から平成4年にかけて津山市教育委員会が行った確認調査で政庁跡と考えられる建物等を確認している。今回の調査地は丘陵の東側斜面であり、国衙域推定範囲の東端にあたる。

隣接する道路部分では平成19～21年に岡山県教育委員会による発掘調査が行われており、丘陵東端では弥生時代後期の集落や美作国府跡、11世紀後半の集落が広がっていたことが判明している。また、本市でも平成22年度、平成26年度に調査地周辺の確認調査を行っている（津山市2010「年報津山弥生の里19号」、津山市2016「年報弥生の里23号」）。



第1図 調査位置図 ($S = 1: 25,000$)



第2図 トレンチ配置図 ($S = 1: 1000$)

(調査の概要)

調査区は東西に2箇所設定した。西側がトレンチ1、東側がトレンチ2である。

トレンチ1

トレンチ1は、造成土の直下で黄褐色ないし黄橙色の地山を確認した。遺構はピットを9基検出した。いずれも径8~12cm、深さ2~3cm程度のものであり、規模が小さいため遺構とは考えにくいが、調査地は削平を受けていると考えられたため、ピットとして取り扱う。このうちトレンチ中央部分のピットは径約12cmで規模が揃い、等間隔に並んでいるため柵列と考えられる。遺構から遺物を検出していないため時期は不明である。また、遺構検出中に1袋分の中世の土器片が出土した。

トレンチ2

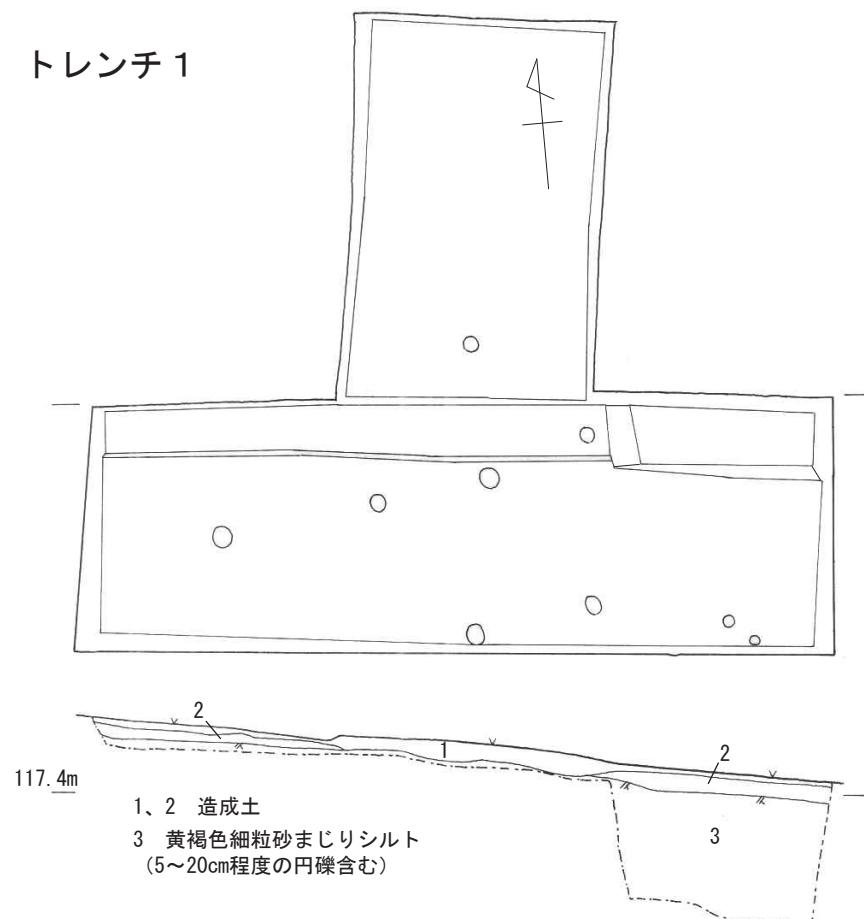
トレンチ2は、造成土の直下で黄褐色の地山を確認した。ただし、東半分では地山ブロックを含む黄褐色土が複数回かけて堆積する。遺構面は地山及び、黄褐色土層で2面検出した。遺構は溝1条とピット4基を検出した。溝は幅75cm、深さ10cm程度で南北方向に伸びており、埋土から勝間田焼碗を始めとする土器小片を1袋分検出した。ピットは黄褐色土層上面で1基、2面目で3基検出した。いずれも径12cm、深さ3cm程度のものであり、遺物は出土していない。また、土層中からは1袋分の土器小片や須恵器小片が出土した。

e　まとめ

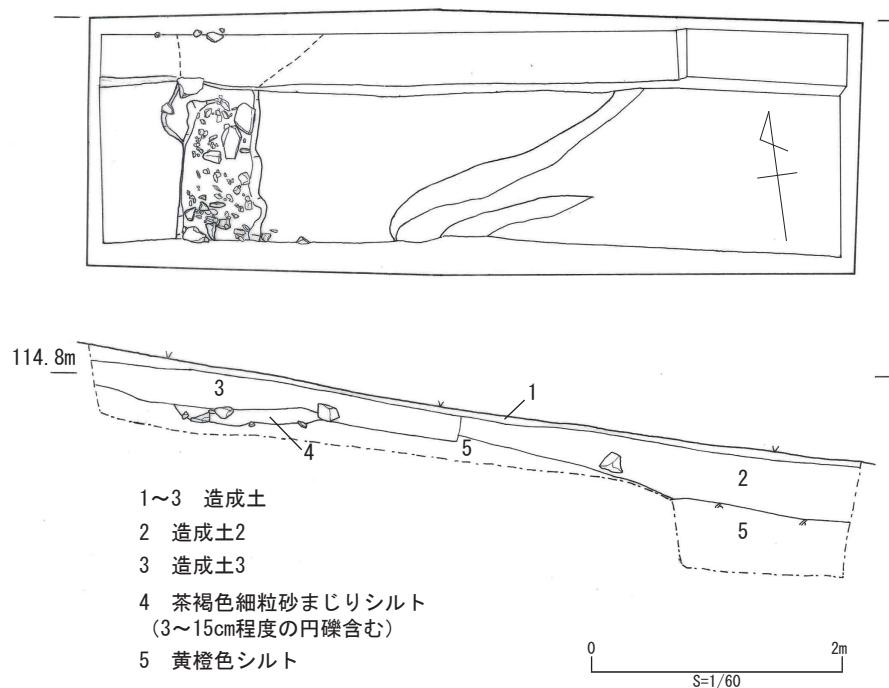
確認調査の結果、現地表面から10~50cmで遺構を検出した。溝は出土遺物から中世のものと推定される。また、トレンチ1でも、遺構検出中に中世の土器片を検出していることから中世の遺構が広がっていた可能性がある。しかし、検出した遺構の深度は浅く2~10cm程度であり、遺物はほとんど出土しないことから、遺構の上面は既に削平を受けていると考えられる。

(三輪)

トレンチ 1



トレンチ 2



第3図 トレンチ平面・断面図 (S = 1 : 60)

写真図版2 R2 美作国府跡（総社川崎線）



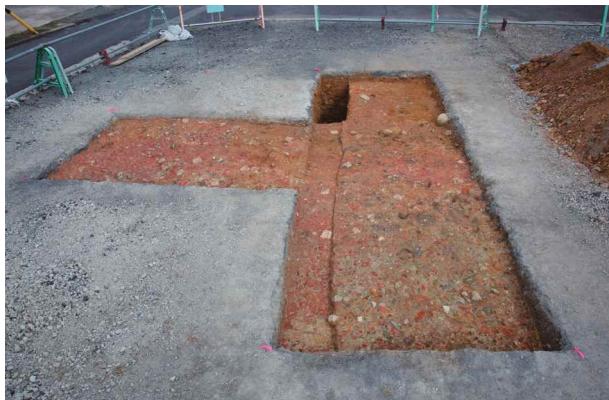
調査地遠景（西から）



調査地遠景（東から）



トレンチ1全景（東から）



トレンチ1全景（西から）



トレンチ2溝検出状況（西から）



トレンチ2全景（東から）

第3章 測量調査の概要

第1節 平成30年度測量調査

1. 県指定史跡津山藩主松平家菩提所 泰安寺墓塔測量調査

- a 測量地 津山市西寺町12番地
- b 測量期間 平成30年8月31日～
平成30年11月27日
- c 測量面積 9m²
- d 測量の経緯

泰安寺の境内には、本堂、靈屋、表門、客殿、庫裏、

不動堂（旧経蔵）、弁天堂、森家第二代藩主長繼の第十三子大吉や津山で死去した松平宣富、同斉孝の墓塔などの建造物が建ち並ぶ。これらは藩主の菩提寺として拡張・整備され、近世大名家の菩提所を構成する建造物や境内景観がよく保存されていることから、平成24年3月9日に県の史跡に指定された。

平成30年7月5日から7日にかけ、津山市を総雨量400ミリを超える豪雨が襲った。市内に存在する指定文化財多くの被害を受けたが、その中のひとつに、県指定史跡津山藩主松平家菩提所泰安寺で、境内にある墓塔のうちのひとつが豪雨により陥没し、傾いた。墓の主は津山松平家第7代藩主松平斉孝の弟、松平維賢である（天明8年（1788）～嘉永3年（1850））。文献によると維賢は、天明8年、江戸の藩邸で生まれ、文化10年（1813）に津山城に移り、その後亡くなるまでの間津山に住み続けたことが判明している。墓は、境内北側の空間にあり、第7代藩主松平斉孝の墓の東に隣接して建っている。

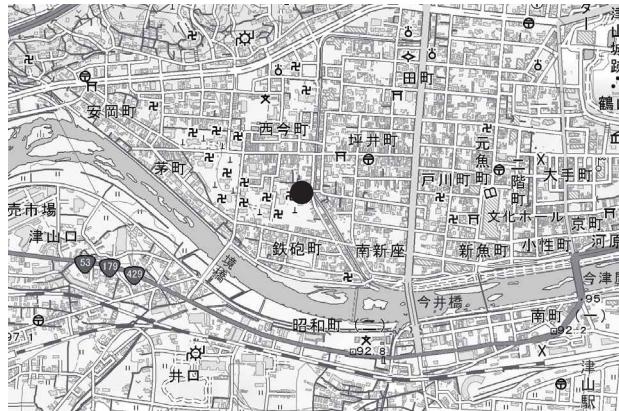
豪雨前は、墓塔の建っている部分を中心に浅い皿状に低くなっていたが、今回の豪雨により、低い部分に雨水が大量に流れ込み、陥没につながったと考えられる。陥没は墓穴全体にみられるが、墓坑の北西部が最も陥没度合いが大きく、30cm～40cm沈んでいる様子がみられる。

陥没した墓を含む境内は県指定史跡であるため、宗教法人泰安寺から平成30年7月17日に岡山県教育委員会あてに毀損届けが提出され、これに伴い、陥没の原因を調べるために発掘調査を行うこととなった（註1）。その前段として、陥没時の記録を行うため、墓塔の現況測量を実施したものである。

陥没した状況をみると、西隣りの斉孝墓とくらべ、20cm程度低くなってしまっており、墓の周囲が皿状にくぼんでいる状態であった。墓石自体は、全体的に現地表面から20～30cm沈んでおり、特に北東方向に大きく傾いていたことが判明した。

墓塔はその後撤去され、墓塔下の発掘調査を実施した後、岡山県、津山市の補助金を得て、復旧工事がなされた。

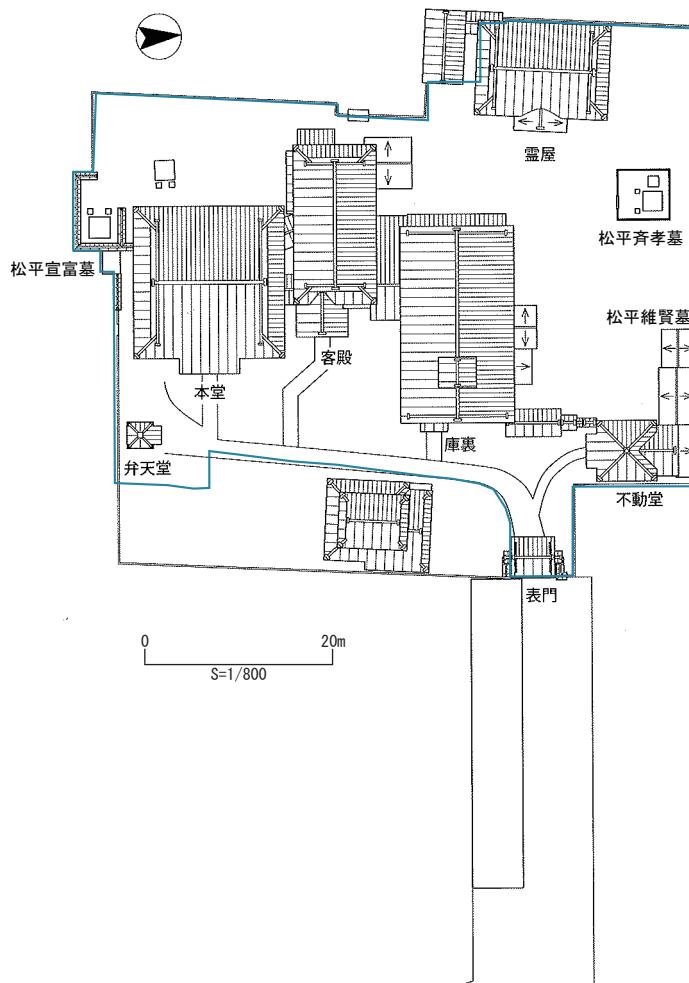
（豊島）



第1図 調査位置図 (S=1:25,000)

参考文献（注1）

1. 豊島雪絵・乾貴子編 2020『県指定史跡津山藩主松平家菩提所泰安寺 災害復旧に伴う発掘調査報告書』宗教法人泰安寺

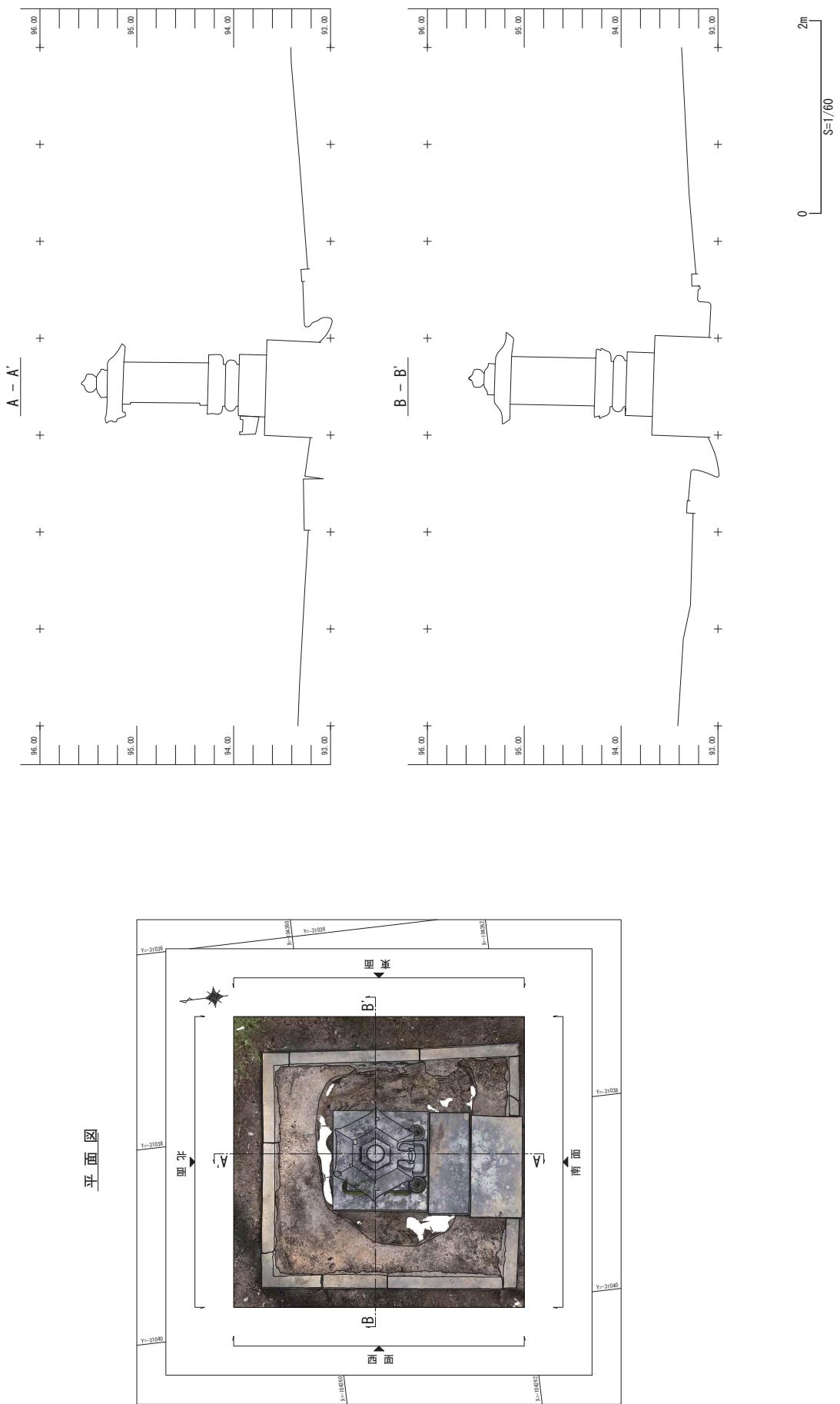


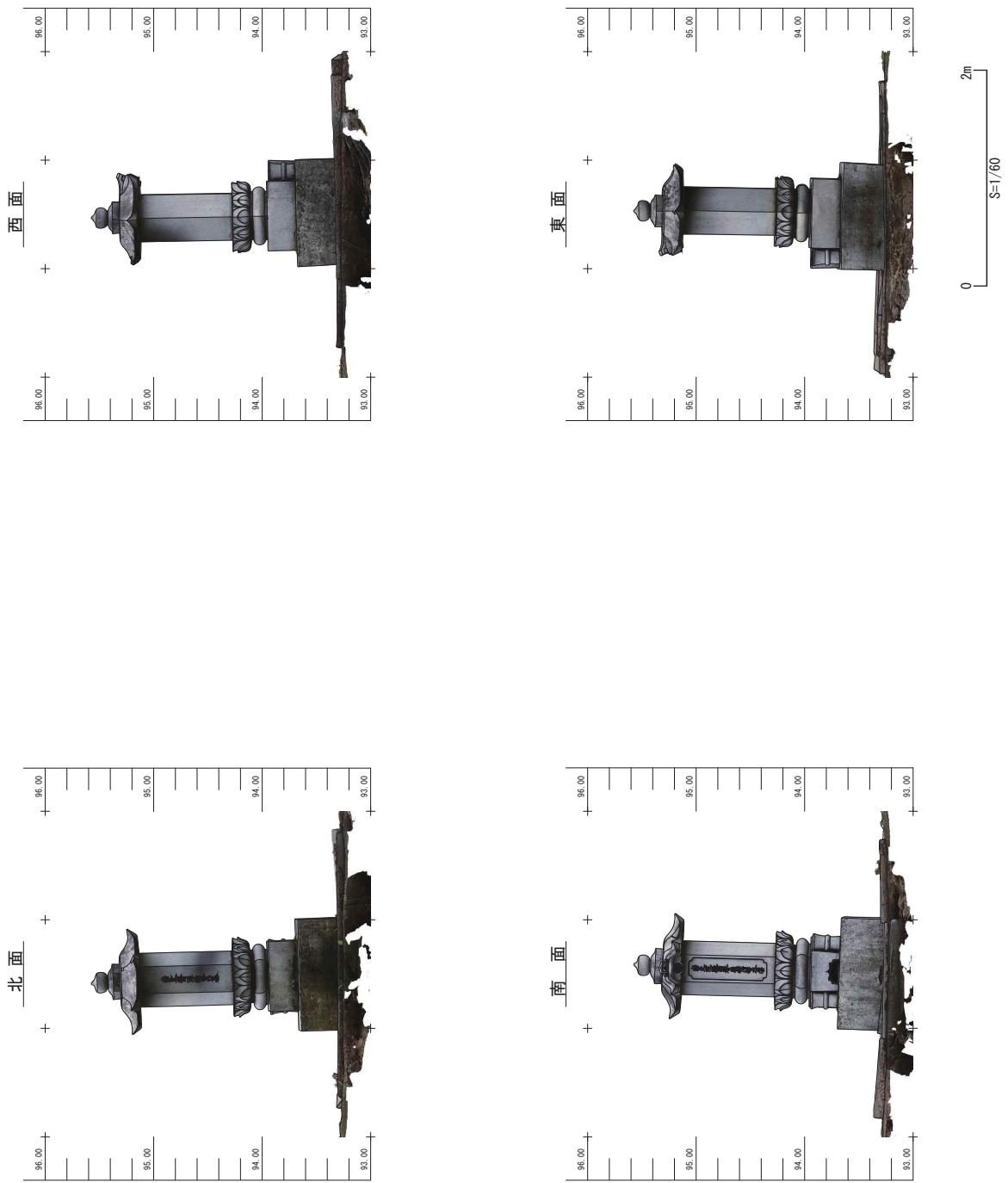
第2図 泰安寺 配置図 (1/800) (参考文献1から引用、一部加筆、青線は史跡の範囲)



写真1 陥没直後の状況（左：南西から 右：東から）

第3図 墓塔現況測量図（平面図・オルソ・立面図）（1/60）





第4図 墓塔現況測量図（立面図・オルソ）（1/60）

第2節 令和元年度・2年度年度測量調査

1. 高野山根1号墳・2号墳・3号墳 測量調査

a 測量地 津山市福田 30-1 ほか

b 測量期間 令和2年1月18日～
令和3年3月16日

c 測量面積 5,700 m²
令和元年度 2,500 m²
令和2年度 3,200 m²

d 測量の経緯

佐良山・剣戸古墳群は、津山市南西部の佐良山地区に所在する群集墳である。この地域は皿川が貫流する狭小な平野を見下ろす丘陵に180基以上の古墳がいくつかもとまりをもちらながら存在している。これらの古墳群の大半が横穴式石室を主体とする直径15m以下の円墳である。そのうちの1つである中宮1号墳は、津山市で初めての学術調査として1950～51年にかけて調査された古墳の1つであり、発掘調査によって多数の土器のほか、玉類、鉄製品、馬具などが出土した。この中宮1号墳を含む古墳群は、『中宮1号墳と剣戸古墳群』として、昭和31年に市の史跡に指定されている。

佐良山古墳群の調査は古墳時代後期研究の画期をなすものであり、考古学的に重要な遺跡であるが、古墳の全容を把握するための基礎資料となる詳細な墳丘測量図がないため、市内遺跡発掘調査事業の一環として墳丘測量を行うこととした。

高野山根1号墳～3号墳は、皿川東岸に張り出す丘陵の先端に位置する。北側に中宮池があり、池を挟んで北側の丘陵上には中宮1号墳をはじめとする10基あまりの墳が支群をなしている。高野山根1号～3号墳のある丘陵の南側の尾根筋には14基程度の古墳からなる剣戸支群がある。

これらの中でも、古墳群の中央に位置する高野山根1号墳、2号墳は突出した規模をもつ前方後円墳であるが、これまで発掘調査歴はなく、1991年に2号墳の墳丘測量、及び横穴式石室の実測が行われた報告がなされているほか、埴輪片等が墳丘表土で採取されている。2号墳の東側には円墳である3号墳が隣接している。

e 測量調査の概要

高野山根1号墳は、3つの支群のうち最大規模を誇る古墳である。先述のように調査歴はない。古墳は主軸を南北方向に向けており、北側に後円部、南側に前方部が位置する。南側は土地の造成に伴い一部が削平されている。墳形の特徴として、前方部と後円部との高低差が大きく、後円部の中央部が大きく抉られていることから、盗掘をうけた可能性が考えられる。また、盗掘坑内には、竪穴式石室の一部とされる壁面が露出していたといわれる。さらに、くびれ部付近には幅の狭い小道が横切る形についており、獸道となっていることが推測される。後円部の周囲を中心に周溝が廻っていることが確認できるが、くびれ部から前方部に懸けては非常に不明瞭である。測量作業は担当者の指示のもと、業者に委託



第1図 調査位置図 (S = 1:25,000)

して実施した。

調査の結果、1号墳は全長（残存長）35m、後円部最大径28.5mをはかる前方後円墳であることが分かった。後円部の高さは最大6.6m、前方部残存長は約10m、残存部での最大幅は17mをはかる。前方部と後円部との高低差は2.6mである。くびれ部はかなり等高線に乱れがあり、正確な墳形を確認することができなかった。後円部北側には、幅3m程度の周溝がよく残っており、その外周には周堤が廻る。

1号墳は、明確な時期は判明していない。しかし過去の踏査により確認された竪穴式石室の一部の存在や、前方部と後円部との比高差が大きいことなどから、2号墳より遡ることは可能性がある。

2号墳は、1号墳の南側に位置し、主軸をほぼ東西に向ける前方後円墳である。南側の削平部分の断面に横穴式石室が開口している。石室はやや墳丘の主軸から12～13度西にふっている。古墳の北側には、明確に周溝がみとめられる。

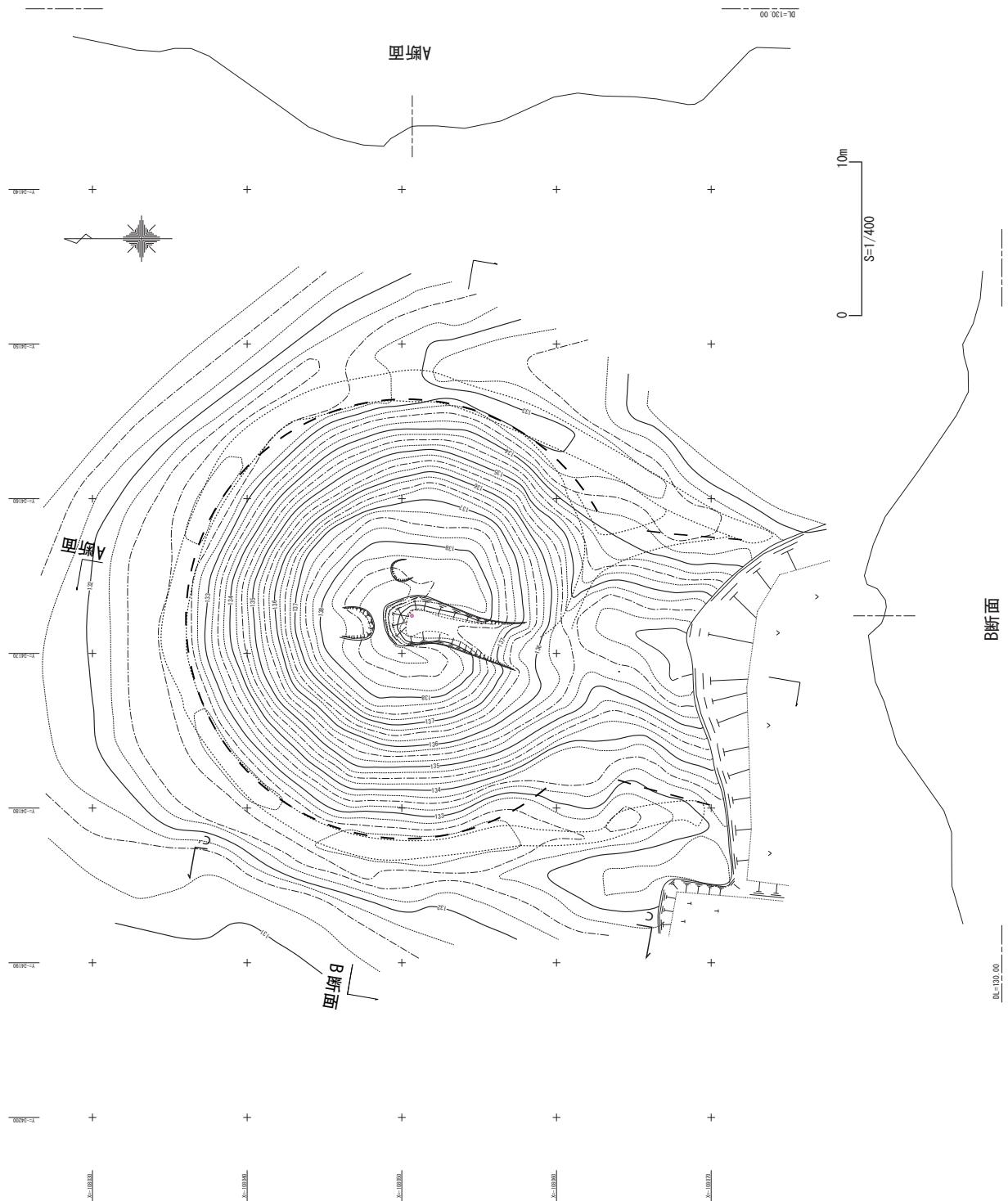
調査により、全長（残存長）37m、後円部径約22mをはかる前方後円墳で、後円部の高さ4m（後円部の後端）、周溝からの高さ5.4m、前方部は残存長15m、高さ5.1mをはかる。前方部と後円部との高低差は約0.9mである。前方部については、測量図からは前方部西端はほぼ前端部とみられる。くびれ部については、墳丘の残りの良い北側の状況から幅19m、高さ4.7mに復元できる。また、周溝の幅は3mで、墳丘北側、後円部からくびれ部に近い前方部にまで及ぶが、それ以外の部分に周溝があったかは不明である。周溝の外側には周堤がよく残っている。横穴式石室については、今回測量の対象としていないが、小型の石を積んだ横穴式石室で、その特徴からは6世紀代に遡ると考えられる。

3号墳は2号墳の東約3mで、2号墳から1.5m程度主軸が北にずれる。後世の攪乱等により、墳頂付近は大きく攪乱を受けている。攪乱坑を確認したところ、埋葬施設にかかる石などはみられず、時期等は判明しないが、測量の結果、3号墳は直径13m、高さ最大で約1.7mをはかることが確認された。

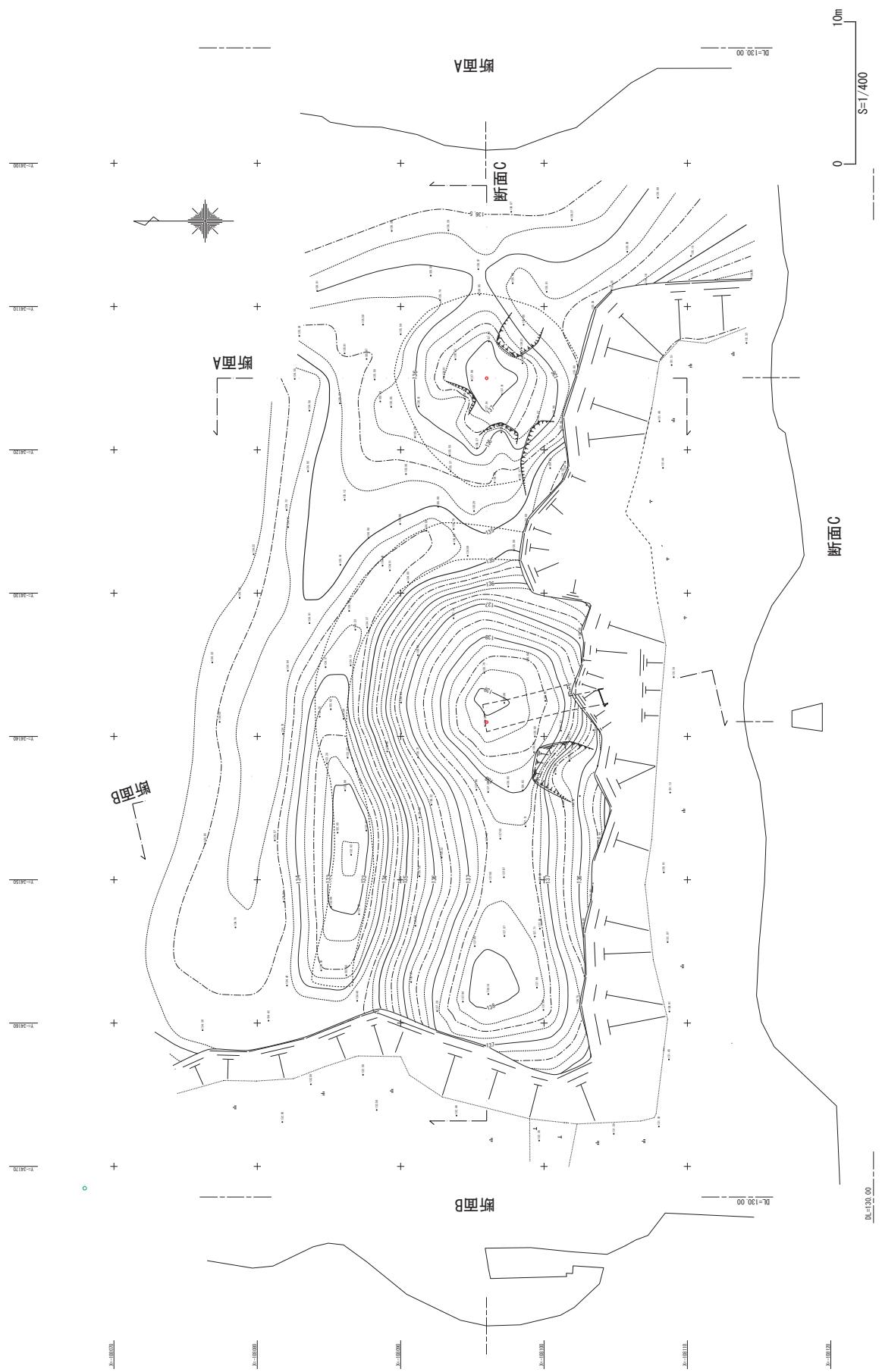
（豊島）

参考文献

1. 近藤義郎編 1952『佐良山古墳群の研究』第1冊 津山市
2. 安川豊史 1986「高野山根1号墳・2号墳」『岡山県史』考古資料 岡山県史編纂委員会
3. 内山敏行・大谷晃二・田中弘志 1991「佐良山古墳群高野山根2号墳について」『古代吉備』第13号 古代吉備研究会



第2図 高野山根1号墳平面図・断面図 ($S = 1 : 400$)



第3図 高野山根2号墳・3号墳平面図・断面図 ($S = 1 : 400$)

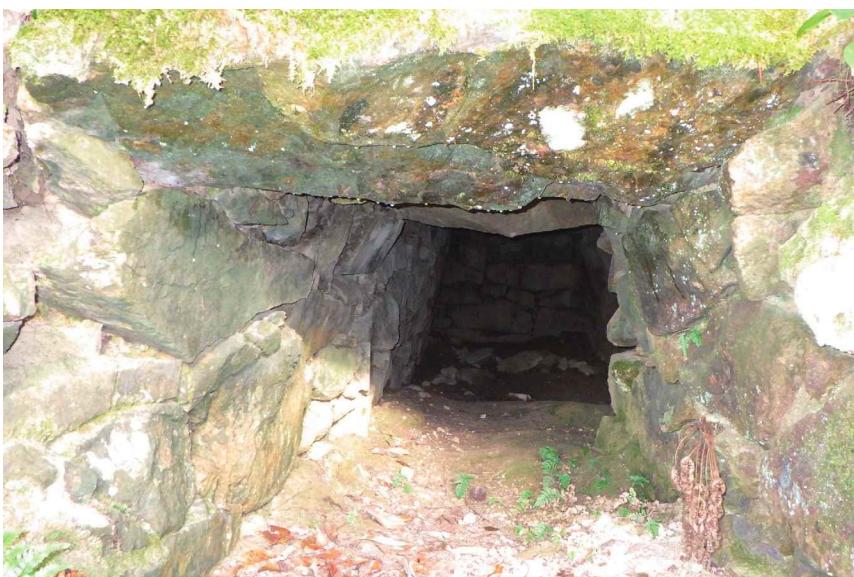
写真図版1 R1・R2 高野山根1号墳・2号墳・3号墳



高野山根1号墳
(前方部から後円部
をみる)



高野山根2号墳
(前方部から後円部
をみる)



高野山根2号墳
横穴式石室

第4章 保存処理の概要

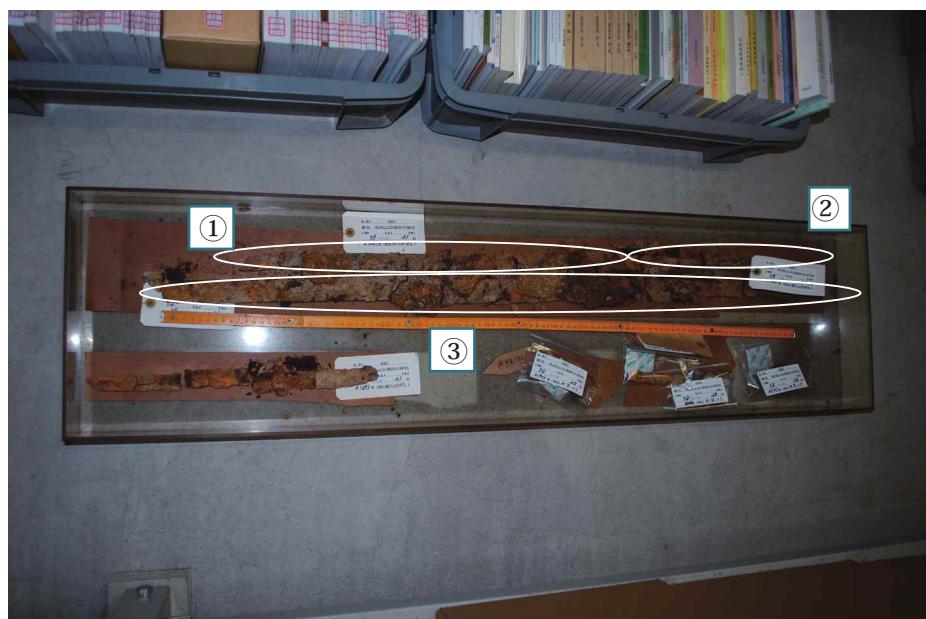
平成30年度・令和元年度保存処理業務

津山市では、市所有の埋蔵文化財の保管状態を確認しているが、このうち、特に鉄製品の腐食が進行し、そのまま放置すれば元の形が失われてしまう恐れがあることが判明した。

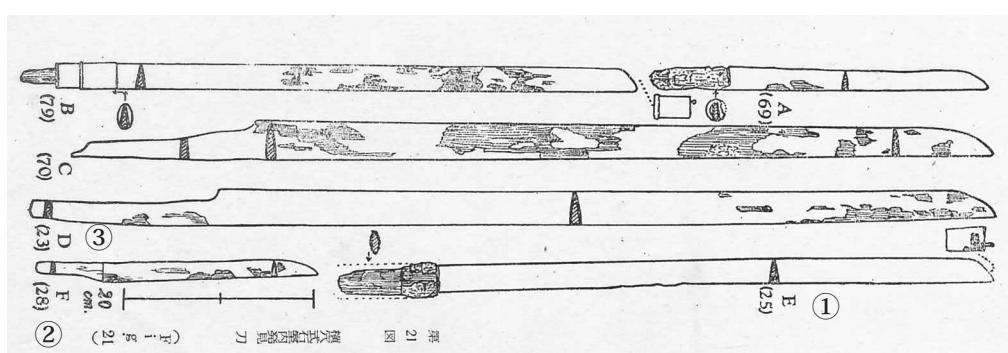
これらを国民共有の財産としてよりよい形で将来に残し、また活用しやすい状態にするため、平成29年度から保存処理を行うこととした。平成30年度、及び令和元年度の対象とするのは中宮1号墳（市指定史跡）出土の鉄刀3本である。

番号	種類	出土地	寸法	報告書番号	数量
①	鉄刀	中宮1号墳	全長70cm、刃長59.7cm	p.79のE	1点（平成30年度）
②	鉄刀	中宮1号墳	全長30cm、刃長22.5cm	p.79のF	1点（平成30年度）
③	鉄刀	中宮1号墳	全長103cm、刃長83cm	p.79のD	1点（令和元年度）

表1 保存処理対象鉄刀一覧表（文献1より）



保存処理対象鉄刀写真（処理前）



第1図 中宮1号墳出土鉄刀（文献1より）(S=1:8)

3本とも出土後の処理を行っていないため、劣化が著しい状態であったが、保存処理により、その形状や特徴がよく分かるようになった。①(E)は、茎部分及び刀身部の一部に木質が残存している。また、鞘口に接する把縁に刀装具がみられる(註1)。茎の先端付近及び刀装具の付近の2箇所に目釘穴がみられ、刀装具に近い部分には釘が遺存している。②(F)は、木質の一部が刀身に残存している。③(D)は、最も全長が103cmと、出土した直刀の中では最長のものである。処理前にすでに2つに分断されていたため、保存処理も2つに分けて行った。茎部分と把縁付近の2箇所に目釘穴がみにも目釘がみられる。

平成29年度から令和元年度にかけて実施した保存処理により、中宮1号墳出土の鉄刀についてはすべて保存処理が終了した。
(豊島)

(註1) 刀装具は、報告書によると鹿角製である。また、鉄製の鞘尻金具が発見されているとあるが、現状では確認することができなかった。

参考文献

1. 近藤義郎編 1952『佐良山古墳群の研究』第1冊 津山市



保存処理後写真（上から②、①、③）

令和2年度保存処理業務

令和2年度保存処理の対象としたのは、市指定重要文化財である藤蔵池頭古墳出土の蛇行剣、及び史跡津山城跡出土の鉄釘6点である。

藤蔵池頭古墳出土の蛇行剣は、津山市里公文にあった古墳（消滅）から出土したもので、全長55cm、幅2.3cm、厚さ0.7cmをはかり、3箇所で緩やかに曲がっている。津山市では唯一の出土例であり、祭祀的性格の強い遺物であることから、昭和56年に市の重要文化財に指定された。

久米歴史民俗資料館に展示されていたが、劣化が著しく、このままでは展示に耐えうることができないと判断されたため、保存処理を行うこととした。

史跡津山城跡出土の鉄釘は、平成22年度に実施した二の丸東側石垣天端の発掘調査により出土したものである。石垣面に開口している排水吐口の内側（石垣背面）の調査により、鉄釘が規則正しい方向で多数出土したことから、石垣背面に木製枠があり、そこに集まった水を石垣面の開口部から排水していたものと推測される。今回保存処理を行ったのは6本であるが、鉄釘は確認できた限りでも90本出土しているため、今後も継続的に保存処理を行う予定である。
(豊島)

参考文献

1. 豊島雪絵・宮崎絢子 2018『史跡津山城跡 保存整備事業報告書IV』(津山市埋蔵文化財発掘調査報告第88集)

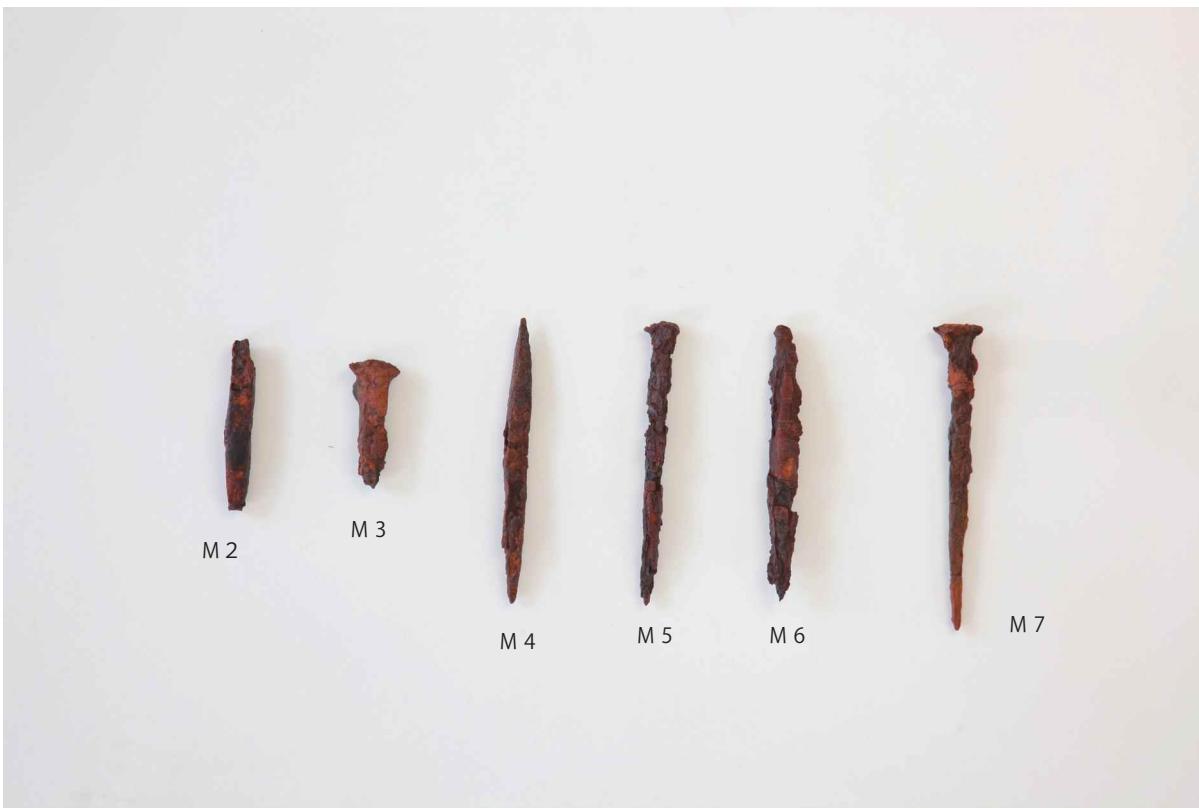
津山市教育委員会

番号	種類	出土地	長さ	最大幅	厚さ	報告書番号	備考
M 2	鉄釘	津山城跡二の丸東側石垣天端 (T 2)	(13)	0.8	1.0	p.35 第18図M 2	木質付着
M 3	鉄釘	津山城跡二の丸東側石垣天端 (T 2)	(5.9)	1.1	1.0	p.35 第18図M 3	木質付着
M 4	鉄釘	津山城跡二の丸東側石垣天端 (T 2)	(12.9)	0.9	0.6	p.35 第18図M 4	木質付着
M 5	鉄釘	津山城跡二の丸東側石垣天端 (T 2)	(13.1)	1.1	0.5	p.35 第18図M 5	木質付着
M 6	鉄釘	津山城跡二の丸東側石垣天端 (T 2)	(12.6)	0.9	0.7	p.35 第18図M 6	木質付着
M 7	鉄釘	津山城跡二の丸東側石垣天端 (T 2)	(13.8)	1.0	0.8	p.35 第18図M 7	木質付着

表1 史跡津山城跡出土保存処理対象鉄釘一覧表（文献1より）



保存処理対象遺物処理前写真



保存処理後写真（上：蛇行剣 下：鉄釘）

報告書抄録

ふりがな	つやましないいせきはくつちょうさほうこくしょ へいせい30ねndo～reいwa2ねndo							
書名	津山市内遺跡発掘調査報告書 平成30年度～令和2年度							
副書名								
卷次								
シリーズ名	津山市埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	第94集							
編著者名	仁木康治 豊島雪絵 平井泰明 宮崎絢子 三輪 望							
編集機関	津山市産業文化部文化課 津山弥生の里文化財センター							
所在地	〒708-0824 岡山県津山市沼600-1 電話0868-24-8413 FAX0868-24-8414							
発行年月日	2022年3月31日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
美作国府跡 勤使遺跡 津山城跡 津山城跡 東一宮天王遺跡 美作国分寺跡 美作国府跡 水原遺跡 東一宮天王遺跡 刈田家住宅及び酒造場 沼京免遺跡 沼京免遺跡 院庄跡 沼京免遺跡 桑山南4号墳 慈恩寺古墳群 美作国府跡 津山藩主松平家菩提寺所 泰安寺 高野山根1号墳～3号墳	津山市山北 津山市高野本郷 津山市山下 津山市山下 津山市東一宮 津山市国分寺 津山市山北 津山市新野山形 津山市東一宮 津山市勝間田町 津山市沼 津山市沼 津山市戸 津山市沼 津山市高尾 津山市桑下 津山市山北 津山市西寺町 津山市福田	416 746 654 654 101 1002 416 勝北20 101 35° 3' 39" 676 676 323 676 1195 613～617 416 495～497	35° 4' 28" 35° 4' 19" 35° 3' 4" 35° 3' 50" 35° 5' 59" 35° 3' 4" 35° 4' 27" 35° 7' 35" 35° 5' 58" 35° 0' 37" 35° 4' 49" 35° 4' 49" 35° 3' 41" 35° 4' 51" 35° 2' 26" 35° 1' 20" 35° 4' 28" 35° 3' 34" 35° 1' 32"	133° 59' 58" 134° 3' 20" 134° 0' 22" 134° 0' 16" 133° 59' 49" 134° 2' 23" 135° 59' 53" 134° 6' 20" 133° 59' 51" 134° 0' 37" 134° 0' 32" 134° 0' 33" 133° 56' 39" 134° 0' 31" 133° 57' 46" 133° 55' 10" 133° 59' 55" 133° 59' 34" 133° 57' 30"	2018.2.8～2018.2.13 2018.6.7～2018.6.13 2018.7.24～2018.8.31 2018.8.2～2018.8.20 2018.9.11～2018.9.19 2018.9.28～2018.10.23 2019.1.7 2019.3.22～2019.3.28 2019.3.25～2019.3.30 2019.4.3～2019.4.12 2019.4.23～2019.4.26 2019.4.17～2019.5.7 2019.9.20～2019.9.25 2019.7.24～2019.8.22 2019.4.19～2019.11.28 2020.3.16～2020.5.9 2020.5.18～2020.5.22 2020.7.14～2020.7.17 2021.2.8～2021.2.24 2018.8.31～2018.11.27 2020.1.18～2021.3.16	5.85m ² 12.5m ² 10.6m ² 25.2m ² 15.9m ² 81.2m ² 10m ² 11.4m ² 52m ² 8.5m ² 36m ² 20m ² 41m ² 28m ² 700m ² 8m ² 12m ² 30m ² 9m ² 5,700m ²	道路工事 病院建設 トイレ建設 公共施設建設 宅地造成 宅地造成 宅地造成 太陽光発電施設 宅地造成 消防設備工事 宅地造成 宅地造成 宅地造成 駐車場等造成 法面工事 測量調査	

- 要約
- ・美作国分寺跡の調査では、柱穴・土坑のほか、国分寺を区画する南北溝とみられる遺構を確認した。
 - ・桑山南4号墳の調査では、石室内から一般的な須恵器や鉄器類に加え、皮袋形瓶等形態的・技法的に特徴のある須恵器が出土した。出土遺物から、古墳の造られた時期は6世紀中頃と考えられる。
 - ・古墳の測量調査は、福田に所在する古墳を中心に、市指定史跡合計3箇所で実施した。高野山根1号墳の調査では、古墳の全長は35m、後円部最大径28.5mとされた。
 - ・保存処理では、中宮1号墳出土の鉄刀、藤藏池頭古墳出土の蛇行剣、史跡津山城跡出土の鉄釘の保存処理を実施した。

市内遺跡発掘調査報告書

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第 94 集

平成 30 年度～令和 2 年度

2022 年 3 月 31 日 発行

発行 津山市産業文化部文化課

津山弥生の里文化財センター

〒 708-0824

岡山県津山市沼 600-1 番地

T E L 0868-24-8413

F A X 0868-24-8414

印刷 二葉
